
東方紅蓮録 ~ Vermilion Arms ~

紅丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅蓮録〜Vermillion Arms〜

【Nコード】

N9995L

【作者名】

紅丸

【あらすじ】

重度のオタク少年（？）秋山慧は色々あつて幻想入りしてしまう。それも紅魔館にある悪魔の妹…フランドール・スカーレットの部屋に…

この小説は東方projectの二次小説で、幻想入り小説です。

第一話 悪魔の妹と紅蓮の少年（前書き）

初めまして紅丸と言います。

フランが好きすぎてやっちゃったZE

後悔なんてない！

と、おふぎはここまでにして、この小説は、私が小説を作るのが初めてで才能が無いため、駄文な上に誤字脱字（多分）があり、キヤラ崩壊や独自設定、原作ブレイクもありますのでご注意ください。

第一話 悪魔の妹と紅蓮の少年

突然だがみんなに、特に男に聞きたい。

女の子に追いかけられているシチュエーションでどう思うよ？

まあ大抵の奴は「羨ましい」とか「死ぬ、リア充」とかと思うだろう。

誰だってそう思うさ。俺だってそう思う。

けどなあ、コレを見て同じことが言えるのか！？

「キャハハハ！まで」

「待てるか！今待ったら、間違いなく俺の命がなくなるじゃないか！」

追いかけてくる幼女。降り注ぐ弾幕。俺は今幻想郷にいます。

それも幻想郷屈指の危険地帯、紅魔館。しかもその館内にあるフランドール・スカーレットの部屋（かなり広い）。

勿論、今俺に弾幕をばらまきながら屈託のない可愛らしい笑顔で追いかけてくる可愛い幼女こそ、この部屋の主にして、悪魔の妹、フランドール・スカーレットである。

しかし、何故俺がこの幻想郷にいて、尚且つフランと命を賭けた追いかけてくことをしているのか？

それは数時間くらい前にまで遡った所から始まる。

午後12時30分

「やっぱりフランってかぁいいよな〜！〜一度でいいから、こんなロリっ子にきゃっきゃ、うふふと追いかけて回されたいぜ！」

まさか数時間後にそれが現実になるとも知らず、いつものごとく変態発言をしている阿呆こそが数時間前の俺、秋山 慧である。

「うわっ、また始まったよ。慧のロリコン発言」

「しかも、さり気に追い“かける”じゃなくて、追いかけて“られる”って所が変態っぷりに拍車をかけてるよね」

「ロリコンなうえにどMですか。間違いなく変態ですな〜」

場所は大学の食堂、時間は昼時、一緒に飯を食っている友人達は完全に呆れかえっているものの、もはや俺のこの様な部分は治しようがないことがわかっていいるのか、変態呼ばわりはしても、そのあり方を否定まではしていない。

と言うより、コイツらも同レベルの変態である。

「俺は変態じゃない！仮に変態だとしても、それは変態と言う名の紳士だ！」

「〜く〇吉wwwwww〜」

そう、ここまではいつもどおりだったんだ…

「そういえば、昨日また神隠しがあつたらしいぜ。しかも秋山の家
の近く」

ふと、友人の一人が唐突にそんなことを言ってきた。

ここ最近、何の前触れもなく人が消える事件が立て続けにおきており、しかもそれが日本全土、事件によつては同じ時間に全く別の所で人が消えたりするため、テレビや雑誌では現代の神隠しだとかといわれている。

「あ〜なんか朝近所で警官がうるちよろしてたな。原因はそれか」

「んっ？意外にドライな反応だな？秋山だったら『く〜俺も神隠しにあいて〜。そうしたら幻想入りできるかもしれね〜じゃねえ〜か』とか言うと思つたのに」

「まあきゃっきゃ、うふふなことをしたいって言つても、所詮幻想

郷は空想の産物だよ。さすがに妄想と現実の区別がつかないほど重症じゃないさね」

まあそれでも俺は妄想を選んでいるけどね。

「けどさ〜よく神隠しから帰ってきた人にどこに行っていたか聞くと、大半の人が桃源郷に行ってたって言うみたいだよ。なんか幻想郷ってどこことなく桃源郷っぽいイメージだし、案外本当にあるのかもよ」

「確かにその話しはよく聞くな。まあもしそれが本当なら、この神隠し事件の犯人はスキマババアで確定じゃねえか」

「ゆかりんのことかあ〜！」

「ちよつ、悟〇自重しろwww！それにしてもババアは酷くね？まあ解らなくはないけど」

確かにスキマババアこと八雲紫は見た目だけならかなりの美人に見える。しかしあの胡散臭さや、1日のほとんどを寝て過ごすなどの行動はまさにババア以外の何者でもない！

因みに年齢だけなら近い筈のゆかりんこと風見幽香は別である！

「まあどうにしたってババアはないわ。あれから出ているのは少女臭じゃなくて加齢臭だぜ。そもそもあの見た目でも少女はないわ」

「ちよつwwwそれ言い過ぎwww」

「『『ハハハハハ』』」

そう、それはいつもどりの光景だったんだ。

ただ一つ、俺達が普段飯を食う席の近くの席に普段見慣れない金髪の女がいたことを除けば…

「ふ〜ん『ババア』ね。うふふふふふ」

後にそのことを俺が知ったときには、もう全てが手遅れになった後であつた。

〜午後10時8分〜

そんなわけで時間を大幅にすっ飛ばして夜。

「あゝ今日もバイト疲れた。さてっ、帰って寝る前にゲームでもやるか」

いつもど通りのバイト帰り。

手には廃棄のコンビニ弁当と鞆（中身はゲームや教科書など）。空には綺麗な満月が、そして周りには無数の罪袋が……

あれ？何かおかしくね？

気づいた時には既に遅く、俺は無数の罪袋に襲われ、抵抗虚しく捕らえられ、トドメに鈍器で頭を殴られ気絶してしまった。

意識を失う寸前俺は「ババアで悪かったわね」とか「そんなに幼女と追いかけて何がしたいなら、死ぬ程やらせてあげるわ」という悪意たっぷりの声を聞いた気がしたが、それをしっかりと聞き取れる余裕はなく、すぐに何も見えなくなり、何も聞こえなくなった。

こうして俺は幻想入りしたのであった。

午前1時52分

「クソっあのふざけた格好した野郎共、思いっきり頭ぶん殴りやがって！畜生まだ痛えぞ……つかそもそもここどこだよ！」

あれから何時間経ったのかわからないが、取り敢えず目が覚めた俺はブチ切れていた（主に頭を殴られた事に対して）。

しかし、この時点での俺はまだ自分が幻想入りしたことに気づいていなかった。

寧ろこの時の俺は自分が神隠しの被害者であり、尚且つこの一連の

神隠し事件が誘拐事件であり、あのふざけた格好をした連中による、組織的犯行というある意味正解である素敵な勘違いをしていた。

取り敢えず俺は一旦冷静になって当たりを見回してみた。

目が覚めた当初は怒りでここが自分の知らない部屋だとしかわからなかったが、こう冷静になって見てみると、どこことなく女の子らしい部屋にみえる。

正直何かおかしい。それが確信に変わったのはポケットの中に入れっぱなしにしていた携帯がそのままの状態で“あつた”からだ。

流石に圏外ではあったが、普通誘拐なら連絡手段である携帯は真っ先に壊すか取り上げる筈じゃないか？

そう考えていた時、後ろから突然声をかけられた。

「ねえ。お兄さんだあれ？」

俺は後ろを振り返った。

そこにはとてつもなく可愛い女の子がキョトンとした顔で俺を見ていた。

赤を基調とした服、サイドテールにした金髪、そして吸い込まれそうになる紅い瞳。

正直、ロリコンの俺には完全にストライクゾーンです！

ただこの子どこかで見たことが：

「ねえ！聞いているの？」

つて、いつまでも何も言わないから、なんか不審な目で見てるじゃねえか！まあ実際に不審者なんだが。

「ああ、ごめん。俺の名前は秋山慧ていうんだけど。何か変な格好をした連中に襲われて、目が覚めたらここにいたんだ」

取り敢えず俺は本当のことを言った。

「えっ、だいじょぶなの？怪我とかしてない？」

どうやらこの幼女は、見ず知らずの俺の話しを信用してくれるだけではなく、心配までしてくれているようだ。

正直、感動のあまり泣きたくなった程である。

「ああ、まだ殴られた所が少し痛いけど、大丈夫だよ」

「そうなの？よかった」

しかも俺に大事なないと知って純粹に喜んでくれているようだ。もう抱きしめちゃっていいっすか？

そんな欲望を必死に我慢して俺は彼女の頭を撫でた。

「ふえっ！？」

「心配してくれてありがとう。それともう一つ聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

俺は、撫でられて困惑している彼女に紳士的にお礼を言いつつ、あることを訪ねようとした。

「いいよ！何でも聞いて」

「よかった、実は出口がわからないから教えて欲しいんだ」

あまりに快く承諾してくれたので、俺はここから出る方法をすぐに聞いた。

しかしそれを言った途端、彼女は不満そうにこう言った。

「え、もう帰っちゃうの？急ぐ訳じゃなければあそぼーよ」

確かに急いで帰る理由もないし、そもそもあの罪袋達の目的がわからない以上手に動き回る方が危険かもしれない。

そして何より、俺が幼女の誘いを断れるわけがないじゃないか！

「ん、まあ確かに急いで帰る理由もないしな！よし遊ぼうか！」

それを聞いた彼女は、向日葵のような明るい満面の笑みで「わーいと喜んだ。

…やっぱりこういうのって癒されるな」

しかしどうもさっきから違和感が消えない。何というかもの凄くデジャヴを感じる。

（まあ気のせいだろ）

俺はそう思うことにした。

「それで、何して遊ぶんだ？」

「弾幕ごっこ」

……… 空気が冷える音がした。

まさかと思い俺はあることを聞いた。

「そ、そういえば君の名前ってなんて言うの…?」

「フランドール・スカーレットだよ フランてよんでね」
血の気が引きました。

「まさか…ここって幻想郷…?」

「うん ついでいうと、ここは紅魔館のフランの部屋だよ」
とてつもなくご機嫌である。

しかしこの時の俺は、“また” やっちまったー! と思っていた。
なぜかって? それは一年程前のことである。

その日俺はとある某有名伝記アドベンチャーゲームをプレイしていた。

そのゲームである幼女が「わたしのモノになりなさい」と言ってきた、俺はすぐさまYESを選択した。

その結果は見るも無惨な bad end!

そう俺はあの時と同じ過ちを犯したのだ! しかも今度は現実で!

「因みにコンティニューは…」

「出来ないのさ?」

「あ・た・り」

「やっぱりかー!」

「それじゃーいつくよー! それとサトルが勝ったら出口を教えただけ
るよ! その代わりフランが勝ったらサトルはフランのモノだからね
ー!」

こうして話は冒頭に戻るのであった……

く 現在く

「すごい! すごいよサトル! 只の人間で、それもスペカ無しで、フ
ランの弾幕を避け続けられる人なんて初めてだよ!」

俺は相変わらず必死にフランの弾幕を避け続けていた。
なぜかって? 当たったら死ぬからだよ!

「悪いな！俺は昔から反応速度が早くてな！その気になればエアガンの弾だって掴めるさ！」

これは挑発でも何でもなく本当の事である。だが本音を吐くと只の強がりでもある。それ程の反応速度を持つてしても、なんとかギリギリ避けることが出来ている程度だからだ。

「ふん。所でエアガンってなあに？」

予想外の言葉が返ってきたぞ。

だがこれはチャンスかも！

「この弾幕を一旦止めてくれたら教えてやるよ！」

よし！これに乗ってくれば、少しは時間を稼げる！

「んゝならいいや」

作戦失敗！やつぱりあまかったか！

「それに：ひさしぶりにこんなに楽しいのに、中断なんてできないじゃない！さゝてまだ余裕そうだし、ここからはスペカつかうよゝ

」

マズい失敗どころの話じゃない！

逆に悪化してる！？

「それじゃゝいつくよー、禁忌「クランベリートラップ」！」

ヤバイ！本格的にヤバイ！

このスペカは全方位から弾幕を撃つ攻撃だ。

ゲームのように上から見ている形なら、弾幕全体の形が解るから避けられるが、今の俺のように自分の前方しか見えない場合、全体が解らないため、避けるのは困難になる！

だがそれでも！俺は！避けなくてはならない！

しつこいようだが避けなきゃ死んじゃうから！

「うおおおおおおおおお！」

避ける！避ける！必死に避ける！

弾幕の隙間を！弾幕の途切れた場所を！

縫うように！ギリギリの所を避ける！避け続ける！

時には掠めてでも直撃を避ける！

直撃すれば確実に死！

だが、そんな俺を見ているフランは、まるで、サーカスを見ている子供のようなのだ。

その顔は純真無垢な笑顔そのもの。

おそらく彼女には悪気も何もないのだろう。

ただ純粹に楽しんでいるだけ。

だから俺は…こんなにも死にそうになっているのに、彼女の…フランのその笑顔がとても可愛らしく見えた…

そして、その油断が命取りとなった。

「うぐっ！」

あまりの痛みと衝撃で俺は。その場で倒れた。

最悪の展開だ。どうやら右足に弾幕が直撃したらしい。

しかも、一部感覚がないことを考えると、右足の肉が抉れているのだろう。

立てなくはない。だが弾幕はすぐそこまで迫ってきている。立ち上がる余裕なんてない。

文字通り、絶体絶命。

いつそのこと、転がって避けるか？

無理。

転がってよけたところで、次に来る弾幕に確実に直撃する。

不可能。

そもそも、立ち上がることができても、この足では立つだけでやっと、弾幕をこれまでのように避けることはできない。

確定的な死。

迫り来る弾幕、これだけの数だへたをすれば俺は死体すら残らないかもしれない。

終わった…

最早声すら出ない。それもそうだ、既に体力なんてとうに使い果たしている。

それでも避け続けたのは、単に死にたくなかったからだ。

だが
それも
もう
必要ない。

俺の死は確定した。

…それでいいのかい？…

（どうしようも無いだろ）

…どうしてだい？…

（どうしてって…足は潰され、動けない。
周囲には弾幕だらけ。
避けるのは不可能、お手上げだろ）

…避けられないなら、弾幕を消せば良いじゃない…

（どこのマリー・アントワネットだよそれ。
そもそも弾幕を相殺出来る程の力があればとづくに使ってる…）

…君は力が無いからこの状況を打開できないと？…

（お前の言い方はムカつくがそうだ）

…力が欲しいかい？…

（ああ）

…この不条理な状況を覆せる程の力が欲しいかい…

（ああ）

…だったら！

イメージしろ！

炎を！

君自身の象徴であり、力その物である紅蓮の炎を！

俺は残りの全ての力を使い立ち上がる…

半ば意識は飛んでいて、もはや体力なんざ残っちゃいない…
完全に気力だけで立っている状態だ…

だけどイメージする…

この状況を打開できる方法を…

紅蓮の焰で迫り来る弾幕を焼き消すイメージを…

その瞬間俺の視界は紅蓮に染まった。

「ぐっ…があああああああああああああ！…！」

炎…

全てを焼き尽くす紅蓮の炎…

それが俺の体中から噴き出して、俺を中心にして巨大な火柱を作り上げている…

そして、その火柱は、俺を殺す筈だった弾幕を一つ残らず焼き消した。

だが俺はその全てを見ることはできなかった。

なぜなら俺は再びその場に倒れて、気絶したからだ。

ただ意識を失う寸前、俺は聞いた。

「すごいね！ここまで追い詰められて逆転されるなんて初めてだよ
だけど気絶しちゃったからサトルの負けだよ！

だからサトルはもうフランのモノなんだから

だから…ずっといっしょにいられるように、死ななくしたげる」

…カプ…

そして首筋に痛みが走り、俺は完全に意識を手放した。

そうこれは物語の始まりにすぎない。

俺とフランの紅と紅蓮の吸血鬼の物語の…

始まりにしかすぎなかったんだ……………

第一話 悪魔の妹と紅蓮の少年（後書き）

これで第一話は終わりになります。

なんだか厨二全開で、ギャルゲのプロローグみたいな感じですが、楽しんでいただければ幸いです。

主人公紹介（前書き）

主人公の紹介です。

主人公紹介

秋山 慧（あきやま さとる）

年齢 20歳

身長 162cm

能力 炎を操る程度の能力

普通に大学生をやっていたが、八雲紫によって幻想入りする。かなり重度のオタクで、自他ともに認めるロリコン。

しかし巨乳のお姉さんも好きな事から只の女好きかも…

基本的にはさっぱりしつつも熱い性格だが、状況を的確に判断できる冷静さも持つ。

年齢の割に身長が低く、童顔なことを気にしている（中学生位に見える）。

過去に何か色々あったみたいだが、本人はあまり触れられたくないらしい。

side 1 (前書き)

今回はサイドストーリーです。

相変わらずの駄文です。

一応、今の所は一話終了ごとにサイドストーリーを一つ挟んでいく予定です。

あと、今回主人公は出ません。

それにしても第一話を投稿して1日でユニーク150人て多いのかはわかりませんが、結構驚きました(宣伝も何もしていない筈なのですが...)。

Side 1

「咲夜。今から部屋を一つ用意しておきなさい」

とある日の昼頃、紅魔館の主人、レミリア・スカーレットはとつぜんそんな事を言い出した。

「部屋を一つですか…わかりました用意しておきます」

いきなり来客の予定もないのに、そんな事を言い出した主人に対し、紅魔館のメイド、十六夜咲夜は疑問を感じたが、直ぐに主人であるレミリアの能力である“運命を操る程度の能力”を思い出し納得する。

「ふふ、流石は我が瀟洒なる従者、理解が早くて助かるわ」

レミリアも咲夜が自らの能力のことを踏まえて返事をしたのを察して、そう答えた。

「お嬢様？ いったいどの様な人間がこの紅魔館に訪れるのですか？」
咲夜は疑問に思いレミリアに聞いた。

するとレミリアは何か企んでいるような“あの顔”でこう言った。

「ええ、凄く面白い人間が来るわ。」

私の能力を使うまでもなくくらいに数奇な人生をおくる人間が…」
それを聞いた咲夜は納得したのか「失礼します」と言い部屋の用意をするために部屋を後にした。しかし咲夜が出ていったあとレミリアは静かに呟いた。

「尤も人間で言っても、貴女が会う時には既に“人間ではなくなっている”のだけでもね…」

それは丁度外の世界で慧達がああ阿呆な会話をしている時であった。

おそらく、この時点で…いや、下手をすればもっと以前に慧が数奇な人生の果てにこの幻想郷に辿り着く事は決定していたのかもしれない。

数時間後彼は幻想郷にやって来る…

そして出会う事となる… 悪魔の妹、フランドール・スカーレットと

…

side 1 (後書き)

と言うわけで、サイドストーリー第一回目、レミリアおぜうさまと咲夜さんの会話でした。

取り敢えず本編でも書いた通り、時間軸的には第一話の慧達が神隠しの犯人はスキマババア（笑）と言っている所をゆかりんが聞いている辺りです。

ストーリーについてはここまでにして、一応本編の方は一週間に一話を予定しており、サイドストーリーは本編を投稿してから2日後を予定してます。

けどストーリーに詰まったら1ヶ月後とかになりそうです。では今回も読んでくれてありがとうございます。

第二話 吸血鬼（前書き）

なんだか予想以上に読んでくれている人が多いので、かなり早いですが既に出来ている第二話を投稿します。

正直、相変わらずの駄文です。

それどころか厨二全開のシリアスシーンがあるので、ご注意ください
い。

第二話 吸血鬼

『あの子でしょ、最近親が離婚したっていう』
『嫌ねえ。ああいう子は周りに悪影響だし』

…うるせーよ…

『やーい！親無し秋山ー！』
『親がいないクセに調子のとてんじゃねーよ』

…黙れよ…

『貧乏人が、死ねよ』
『金の無い奴に生きる資格なんてねえーよ』

…黙れって言ってるだろ！

ああ…またこの夢か…
あれからもう何年も経ってるのに…
終わらない悪夢…
消えない憎悪…

俺には責任はないのに…俺は悪くないのに…
ただ生まれた環境が悪かったただけなのに…

悪意を受けるのは…いつも俺だけ…
辛い目に逢うのも俺だけ…

過去の事…

もう終わった事…

それでも憎悪は今でもなお燃え続けている…

まるで…全てを焼き尽くすかのように…

目が覚めた…

外から日が射している事を考えると既に朝になったのだろう。

事実、サイドテーブルに乗っている時計は午前9時を指している。

正直なところ、目が覚めたら自分の部屋のベットのう上っている展開を望んでいたのだが、やっぱりそうあまくないよな…

そう当たり前のことだが俺は紅魔館にいた。

俺が寝かせられていたこの部屋は、明らかにフランの部屋ではない。おそらく俺が気絶した後に異常に気づいた人…多分、美鈴か咲夜さん辺りが俺をここまで運んだのだろう。

ヤゴコロ印の傷薬でも使ってくれたのかフランにやられた傷は痛みもなく、完全に治っていた。

それよりも…

「フラン…お前なんでこんな所で寝てるんだ？」そう、俺の横にはネグリジェ姿のフランが寝ていた。

何故？と気になるところだが、この状況はマズい！

こういうパターンは大抵この後すぐに誰かがやつ「あらっ、お目覚めになられたんですか？」

…やつほ…い、どうやらもう手遅れだったみたいだ…！

「え、えっと十六夜咲夜さん？」

「はい、そうですよ。とその前にフラン様、またここに来ていたん

ですね」

「ええ、そうみたいですわって、“また”！？“また”っていったいどういことですか！？」

俺は驚いた。

“また”ってことは少なくとも俺は何日も寝たきりだったって事だよな？

「あの、話も長くなりますので、先にフラン様をお部屋に戻してきってからでもよろしいでしょうか」

おっと少々焦りすぎたようだ。

「ああ、すいませんっい…」

「ふふっ、気にしないでください。それでは失礼しました」

そう言って咲夜さんはフランを背負って部屋を出ていった。

さて、とりあえず今の状況の確認でもする「お待たせしました」

「のわああああ！」

いきなり今出ていったばかりの咲夜さんに声をかけられて、俺は悲鳴を上げた。

そうだった…咲夜さんは時間を操れるんだった…

「それでは、改めて自己紹介を、私の名前は十六夜咲夜と申します。ここ紅魔館のメイド長を勤めています。

貴方は…もしかしくなくても外来人ですね？」

「まあ、さっきの言動からわかると思いますが、外来人ってやつです。名前は秋山慧といいます」

とりあえず俺達は互いの自己紹介から始めた。

「では、ここ幻想郷についての事は…」

「はい、一応大ざっぱにですが…」

幻想郷 簡単に説明すれば、外の世界とは結界で分断された外の世界で忘れられた存在が辿り着く楽園。

「それでは先に本題から入らせて頂きますが…慧様、あなたはもう

…」

「元の世界には帰れない…ですよね」

そう、俺は元の世界には帰ることはできない。

この幻想郷には能力者という存在がある。

その能力者は自分自身の特殊な固有能力を持っていて、その範囲内なら本来できない事も可能になるというものである。

例えば咲夜さんなら“時間を操る程度の能力”で時間を操れるし、フランなら“どんなものでも破壊する程度の能力”でこの世に存在するものなら何でも破壊できるといった具合である。

そして稀に外の世界から来た人間、外来人にも能力が宿る時がある。しかし、能力者となった外来人は幻想郷の存在となるため、元の世界に戻る事ができなくなってしまうのである。

「知っていたんですか？」

「ええ、一応気絶する前に自分で能力、多分“炎を操る程度の能力”を使ったので」

しかし、そう言うてすぐ咲夜さんは微妙な表情をした。

まるで話がかみ合っていないとも言いたそうな顔だ。

まさかまだ理由があるのか？

「ま、まあそれもあるのですが…実はあ「サトル起きた〜!？」

咲夜さんが明らかに重要な話をしようとした瞬間、突然部屋のドアを勢いよく開けてフランが入ってきた（流石に着替え済み）。

そしてそのままの勢いで俺に飛び込んできた。

「も〜、やっとおきた〜。3日間も寝たきりだったから退屈だったよ〜」

マジですか？

俺そんなに寝てたの？

「はい、原因としては、外傷もありますが、最大の原因は能力による激しい魔力の消費ではないかとパチュリー様が」

パチュリーとはこの紅魔館の地下にあるヴウル図書館にいる魔法使いである。

そうか、診てくれたんなら、会ったときにでもお礼をしないとな…て
「そういえば咲夜さん、遅れてしまいました。怪我の手当てありがとうございます！」

そう俺は咲夜さんにお礼を言うのをすっかり忘れていたのだ！

「いえ、手当てについてでも大層な事はしてませんよ。それにフラン様も手伝って下さいましたし…」

それは予想外だな…

「そうなのか？フラン」

「うん！フランも手伝ったんだから！」

フランは「すごいでしょ」といって胸を張る。

まあその怪我の原因はフラン自身なのだが、こういう姿を見ていると、やはり憎めない。

だから俺は…

「そっか、ありがとなフラン」

そう言つて俺はフランの頭を撫でた。

「エヘヘヘヘ」

撫でられたフランは照れながら笑っている。

はつきり言つぜ！

愛が鼻から出そうです！

「それにしても、大層なことをしてないって言つてましたけど、永遠亭の傷薬なんて凄く高かったんじゃないですか？」

おそらく本人は大した事をしたつもりはないと思つているだろうが、それでも気になってしまふのは貧乏人の性なのだろう。

しかしそれを聞いた咲夜さんは、またまた微妙な表情で言った。

「実は慧様の手当てには薬を一切使つてないんです」

それは驚きだ。

「という事はやっぱりパチュリーが治療魔法でもかけてくれたんですか？」

そうだったなら、それこそパチュリーに会ったときにお礼を言わなきゃな…そう思いながら俺は咲夜さんに言った。

しかし咲夜さんは更に微妙な表情になり、こう言った。

「治療魔法やその類の魔導具も使ってないんです」

…へ？…それって…どゆこと？

「それが、先ほど言いかけた事なのですが…実は「サトル」！目も覚めたんだし遊んでよ」

咲夜さんが明らかに重要な話をしようとした瞬間、またまたフランが横から乱入してきた。

「フラン…今日はまだ病み上がりだから弾幕ごっこは勘弁してくれ…そもそも俺は当分は住处と職をさがさなきゃ行けないから、遊ぶのはもう少ししてからでもいいか？」

そう、幻想郷に永住する事が決まってしまった今、最も優先にしなければいけないのは、ここでの住居と職である！

そう思い俺はフランに聞いたのだが…フランさん？あなたは何故そんな不思議そうな顔をしていらっしやるのですか？

「サトル、なに言ってるの？サトルはもうフランのものなんだから、フランとずっと一緒に住むんだよ？」

正直、理性がブレイクしそうです！…と言いたいところだが…

「それは嬉しいけど、流石にいろいろマズいだろ。第一、レミリアの許しをもらったのか？」

「私のもので宣言には突っ込まないんですね…」

「まあ、負けたらフランのものになるって約束しちゃいましたから咲夜さんの突っ込みに返答しつつ、俺はフランに聞いた。

「だいじょぶだよ！だってサトルも吸血鬼になったんだもん！きつとお姉様も許してくれるよ」

そっか、俺も吸血鬼になったから大丈夫か、ちよつとそれは理由になつてないぞ……て、まてえぬ！

「ちよつとまった！俺が何だって！？」

「だっかっらっ！サトルとずっとあそびたいから、サトルを吸血鬼

にしたんだってば〜！」

マジで？

「まさか咲夜さん…さっきから言おうとしてたことって…」

「はい、たった今フラン様が言われたとおり、慧様はもう人間では
ありません。真正正銘の吸血鬼です…」

……………なんてこつたい！

正直、信じられない…そう思っていると、

「おそらく、ご自身の姿を見ていただければ、納得できます」

そう言つて、咲夜さんはいつの間にか持つてきていたのか、大きな移動式の鏡を俺の前に出した。

…そこに映っていたのは、間違いなく俺だった。

一見するとあまり変わりはない。

しかし、その瞳は明らかに変わっていた。

人間では有り得ない紅い瞳に…

「パチクリー様の話しでは、まだ吸血鬼になったばかりで、完全に吸血鬼としての能力が使えるわけでは無いそうですが、身体能力は既に吸血鬼と変わらないそうです。」

咲夜さんがいろいろと説明をしてくれているが、それにしてもレツドアイズなんてちよつとカッコいいぜ！

見た目も完全な人外じゃないし！

俺は半吸血鬼が主人公でヒロインが年上人外ロリな熱いゲームを思い出しつつ、そう思った。

まああれに变身するって形ならカッコいいけど。

「ご理解頂けましたか？」

「ええ、もうすっかりと」

咲夜さんの問いに、俺はそう答えた。

「それでは大分話が脱線してしまいましたが、これで慧様の現在の状況については終わりですが、何か質問は？」

「御座いません…」

というよりなんかいろいろ起こり過ぎて、質問が思いつきません！
「それで「咲夜！あまりにも遅いから、こっちから来たわよ！」って、お嬢様あゝ！？」

俺についての話しが終わり、咲夜さんが何かを言いかけたとき…きつとレミリアお嬢様がお呼びですので一緒に来てくださって言うおうとしたのだろう…またまた横からの乱入者…レミリア・スカーレットに話を止められてしまった。

だけど、さっきから咲夜さん、喋っているときに乱入されっぱなしだな…

それにしても…やはり出てきたか、レミリア・スカーレット。

この紅魔館の主人にして、フ란の姉。

そして運命を操る吸血鬼。

動画とかではカリスマブレイクが目立つけど、正直、面を合わせる と解るが、幼い俺好みの見た目とは裏腹に凄み…おそらくこれがカリスマってやつなんだろう…を感じる。

（こりゃ、話に聞いていた以上だな…）

そう思っていると、突然レミリアの口が開いた。

「ねえ、別に取って食おうとしてるわけじゃないんだし、もうちょっと楽にしてくれない？こっちも話しぶらいし」

どうやら表情に出ていたようだ。

俺は言われた通りに楽にする。

「ふゝん、まだぎこちないけど、まあいいわ。レミリア・スカーレットよ。この紅魔館の当主にして吸血鬼だ」

「ああ、俺は秋山慧だ。外人人で元人間の吸血鬼」
とりあえず俺達は自己紹介をした。

しかし自己紹介してからのレミリアの表情が明らかに何か企んでいる表情をしている。そう思っていると…

「咲夜、フラン、彼と二人で話がしたいから、少しはずつてくれるかしら…」

突然レミリアがそんな事を言った。

それを聞き咲夜さんは「かしこまりました」と言って部屋を出ていったが、フランは「お姉様〜！サトルはフランのものなの〜！」と文句を言ってきた。

きつと俺がレミリアに取られると思ったのだろう。

レミリアも同じ事を考えたのか、彼女はフランにこう言った。

「大丈夫よ。彼を取ったりしないわ。ただ少しだけ話をさせて頂戴」それを聞きフラン「ふう〜わかったよ〜」と言って部屋を出ていった。

部屋には俺とレミリアの二人だけになった。

「それで…話というのは…？」

「正確には話したいと言うより、聞きたいことね。…貴方ここで使用人として働く気はない？」

はい！？

今なんて言った？

聞き間違いじゃなければ紅魔館で働かないかって言ったよな？

「聞いているのだけど…ここで働かないかって」

どうやら聞き間違いじゃないらしい。

「因みに、住む所はここで食事もちゃんとあるし、毎月の給料もあるわ。で、どうするの？」

はつきり言って、衣食住の心配がなくなるのは、この世界に来たばかりで助かるが…

「正直、俺としては凄くありがたいけど、いいのか？こんな見ず知らずの吸血鬼を雇っても…」

履歴書も何も無いぜ？そう言つとレミリアは…

「大丈夫よ。少なくとも、フランにあれだけ懐かれているのだから悪い人ではないでしょ？それとも自分は悪人ですとも言いたいわけ？」

「いえいえ滅相もない」

「なら決まりね！」

あなたの仕事は主にフランの世話よ。だけどそれだけじゃなく咲夜

の雑用や門番の仕事もやつてもらわうわ。」

うわっ結構多いな… けどまあ使用人ていうのはそう言うものなのだろうと俺は納得する。

「まあ暫くは咲夜の指示に従って仕事をしなさい。それと仕事は明後日からやって貰うことになるけど、あなたはもうこの紅魔館の使用人なのだから、私への態度はわけまえなさい。これは命令よ」

正直、カリスマブレイクなんて嘘っぱちです！

それにしても…

「すみませんお嬢様、仕事が明後日からというのはどういう事でしょうか？」

それが気になって、俺は聞いた。
態度が変わったのは気にするな…

「早速しつかりとした態度をとったのは感心ね。仕事が明後日からなのは、まだあなたの生活の準備ができてないからよ。
とりあえず明日はこれからの生活の準備をしなさい。

着ていた服もかなりボロボロになっていたし、新しいのを買った方がいいわ」

確かに俺は幻想郷に来たばかりで、生活品も衣類も全くない。
しかし…

「済みません。俺の所持金、二千元、しかも元の世界の金しかないのですが…」

俺は携帯同様、ポケットに入れていた財布の中を確認して言う。

そう、こっちの世界に来たばかり、その上、着いて直ぐに3日間も意識を失っていた俺が幻想郷の通貨を持っている訳がない。

いや、それでも外の世界の金が無事なだけマシだ。

博麗神社に落とされでもしたら、きっと脇巫女に有り金全部奪われていただろうし…

そう思っていると…

「安心しなさい。お金くらいなら、こちらが出すわ」

なんという素晴らしいお方だ！

お嬢様！一生付いていきますぜ！

「その代わり、今月の給料は無しよ。だけど給料分はしっかりと働いて貰うわよ！」

前言撤回、やっぱり悪魔ですこの人。

「これで、私の話は全部だけど…それにしても、あなたはなかなか面白い人生を歩んできたようね…」

確かに、俺の人生は他人から見たら映画のような人生だろう。しかし…

「正直、俺としては、なかなかに堪えましたよ。」

俺は失笑気味に、そう答えた。

「あら、あなたの性格からして逆上すると思ったのだけど…」
はつきり言ってレミリアは能力で他人がどの様な運命を辿ってきたかがわかる。

だから、こういう事を言うてくるのは予想通りだ。

それに…その事はもう終わった事なのだから…

「まあ、いいわ。その反応から見ると、あなたの中では解決しているようだし」

「有難う御座います、そう言ってもらえると、助かります」

納得してくれたレミリアに対し俺は礼を言う。

やはり解決済みとはいえ、昔の事はあまり思い出したくない。

しかしレミリアは急に表情を真面目なものにし、こう言った。

「確かにその事はあなたの中では解決済みよ。だけど一つ忠告させて貰う。

あなたは生まれながらに数奇な運命を辿る宿命にある。

だから、これから貴方の回りではこれからも色々な事がおきるわ。それだけは覚悟しておきなさい」

俺は何も言えなかった。

どうやら俺の厄介事を呼び寄せる体質は、この幻想郷でも変わらないのだろう。

まあ、この幻想郷に来て、尚且つ吸血鬼になつて帰れなくなった時点で十分過ぎる程、数奇な人生を辿っているだろう。

「それじゃ恒例の「ちよつとまったく！フランがサトルにいうの」つてフラン！？まあいいわ。なら一緒に言うのはどう？」

「うん！」

またまた乱入してきたフランとレミリアが俺の前でじゃれ合い始めた。

そして咲夜さん…あなたはいつの間に来てきて鼻血を噴出しながら写真を撮ってるんですか？

「咲夜さん…その写真、あとで焼き増ししてください…」

「わかつたわ…」

やはりこの人も同志だったか…

「「それじゃサトル！幻想郷、そして紅魔館にようこそ！フラン」「私」達はサトル「あなた」のことを歓迎するよ」「わ」「！」「」

こうして俺はこの幻想郷で吸血鬼として第二の人生を歩むこととなった。

それにしても…

「あれゝ、さつきからサトル、鼻から血が出てるよゝ」

「咲夜もね…どうしたのかしら…」

やっぱり人外口りは最高です！

きつと咲夜さんも同じ事を考えたのか、俺達は互いにサムズアップをして、同時に貧血で倒れるのであった…

因みに咲夜さんの撮った写真を後日二人で現像したが、全部鼻血で駄目になっていた…

第二話 吸血鬼（後書き）

これで東方紅蓮録第二話は終了になります。

相変わらずの駄文& a m p ; 厨二ですが楽しんでいただければ幸いです（なんだか毎回書いていますが）。

正直、サイドストーリーの投稿後1日もしない内にユニークが三百人を超えた時は、本気でビビりました（作者は基本ヘタレです）。本音を吐くとそれだけの人が読んでくれていることに対しての喜びが半分、駄文すぎて文句がく留のではと言う恐怖が半分です。これからも頑張っていきたいと思います。

あと出来ればですが、感想なども書いてくれると嬉しいです。

side 2 (前書き)

今回、多分今まで（と言ってもまだあまり書いていませんが…）で一番駄文です。

独自設定と（多分）キャラ崩壊が酷いです。

side 2

「サトルいる〜って何してるの〜？」

俺が自分の鞆を漁っていると、突然フランがそう聞いてきた。

「ああ、さっき咲夜さんが俺の持ってた鞆を持ってきたんだけど…」

フランの問いに対して、俺はそう答えた。

この鞆は気絶から復活した後に咲夜さんが持ってきてくれたもので、俺の数少ない所有物である（中身も含めて）。

因みにフランに対して敬語を使ってないのは、フランが「なんか変だからフランに対してはいつもどおりでいいよ〜」と言ったからだ。余談だが咲夜さんは「もう、お客様じゃないし、寧ろ上司なんだから」という理由で俺に対してフランクな話し方になっている。

それにしても、そんなに変か？俺が敬語を使うの…

「だけど…てことは何かなくなってたの？」

「鞆の中身は無事だったんだけど、本当だったら鞆の他にもう一つなければおかしいんだ」

そう俺がスキマに落とされた（おそらく犯人はスキマババアに違いない）のは間違い無くバイトの帰りだ。

だったらそれが絶対ある筈なのだが…

「ちなみに、何がなかったの？」

「コンビ二弁当だ…」

「……………コンビ二弁当ってあの外の人間が食べるっていうアレ？」

「ん？よく知ってるな？」

「うん…前に図書館の本に書いてたから…」

本当に何でもあるんだなこの図書館…

こりゃネクロノミコンとかあっても不思議じゃねえな。

「ねえ…確かコンビ二弁当で安いけど、あんまり体によくなかった

よね…」

「まあな。けどコンビニでバイトしてたおかげで、廃棄のやつがタダで貰えたから、食費が浮くんだよ」

まあ貧乏だったからしかたなかったしな。

そう言つと、フランが泣きそうな顔でこつ言つた。

「サトルの家つて貧乏だったんだね… けどもう大丈夫だよ、もうそんなもの食わなくてもいいから！」

その言葉を聞いた俺は正直泣きそうになった。

ああ… ちよつと我が儘で手加減出来ない所があるけど、なんていい子なんだろう！

そう思つた俺はその後五分間感激のあまりフランを撫で続けるのであつた。

五分後…

「それにしてもフラン？ 俺に何か用事でもあつたのか？」

「あつ、そうだった！ 実はサトルに弾幕ごつこについて教えにきたんだつた！」

…… 何だろう、やけに嫌な予感がするぞ。

「フラン… 一つ聞いていいか…？」

「な… に？」

「それつて、実戦で教えるのか？」

「そうだよ… そつちの方がフランも楽しめるし あつ、大丈夫だよ。スペルカードの作り方も教え上げるから」

… デスヨネ…！

結局俺は咲夜さんが夕飯の時間を知らせに来るまでの間、みつちりとフランの弾幕の餌食となるのだった…

side 2 (後書き)

これで第二回サイドストーリーは終わりになります。

今回ヴウル図書館について少しだけ書かれていますが、この小説では外の世界で忘れられた本がヴウル図書館に流れ着くという設定になっています。

それこそ最強の魔導書から昔の漫画まで色々です。

では今回はここまでにします。

次回の第三話は一週間後を予定していますが、多分遅れる可能性が高いです…

第三話 初仕事と日陰の魔女（前書き）

お待たせ（待ってる人いるのかなあ）しました、第三話になります。
今回パチュリーが初登場します。
相変わらず駄文です。

第三話 初仕事と日陰の魔女

- 焰を操る程度の能力 -

それがこの俺、秋山慧の持つ能力だ。

えっ？ 炎が焰に変わってるって？

気にするな！

第一、こっちの方が格好いいじゃないか！

話が逸れたが、炎を操るつてのは結構色々な漫画やゲームで、主に主人公やライバルキャラが使う能力として結構強そうなイメージがある。

事実、俺のこの能力も使い易さに関しては、おそらくピカイチだろう。

日常生活や突発的なサバイバルな状況は勿論、弾幕ごっこにおいても、炎を弾幕として使うもよし、形を自在に操る事の出来る事を利用し、フランの持つレーヴァテインのような装備品を作り出すのもよしと凄く便利である。

しかし…

悲しいことに、この幻想郷においては…

この能力はとてつもなく弱い！

そもそも、この幻想郷にいる能力者はどいつもこいつもチートとは思えない能力を持っている奴が多い。

俺のいる紅魔館だけでも時間を操作出来る力を持つメイドに、運命を操る吸血鬼のお嬢様。

そして少し前まで俺を教育と言う名の“遊び”でボコボコにして、現在は俺の首にしがみついて、きやつきやとはしゃいで俺を無自覚に萌殺そうとしているこの悪魔の妹も、この世に存在するものならどんなものでも任意に“破壊”することの出来る核兵器よりもおっ

かない力を持っている。

話を戻そう。

取り敢えずの所、この能力の特徴としては…

？炎を発生させられるのは俺自身の体からのみ。

？炎の形は自在に操れるが、あくまで形が変わっただけ。

？炎を弾幕状にして放つ事は可能。マリオのファイアボールみたいに

この状態でなら数十メートルは飛ばせる（通常の弾幕程度）。

但し炎を発生させられるのは？での説明の通り自分の体からのみである。

？離れた所にある物を発火させる事は出来ず、自分以外の物を発火させる場合、直に触れなければならない。

？？の事（直に触る事で自分以外の物を発火させる事）の応用で、

魔導具に炎の属性を加える事が出来る可能性がある（発火させる際に、能力としての魔力を物体に通すから）。

？炎に関連する熱や爆発なども操れる。

？炎を操ることが出来る範囲は、半径30mくらいで、遠ければ遠い程その精度は下がる

という具合に大した能力でも無いのに、意外に制約が多く、やはり他の能力と比べてもかなりしょぼい力なのである。

咲「つまり、あなたは能力に関しての情報とスペルカードの為に“また”ボロボロになったと？」

咲夜さんに問い詰められて、俺は黙って頷いた。

何故こんな状態になっているかと言うと、単純にフランに弾幕ごっこについて（強制的に）教えてもらっていたからである。

勿論超スパルタの実戦訓練で。

まあ吸血鬼としての人生が僅か三日で終了するよりかは遙にいい。しかし、結果として夕飯が出来たので呼びにきた咲夜さんに見つかり、こっぴどく叱られているのである。

当たり前だ。

三日間も意識不明で、目覚めたと思ったら、また無茶をしている。これで怒られない方が不思議だ。

「まあ、今回はもう夕食の時間だからこれ位にするけど、病み上がりなんだし、今日だけは大人しくなさい」

「わかりました…」

しかし正直な所、吸血鬼になったお陰なのか、目が覚める前…人間だった頃と比べても、病み上がりなのに今の方が体が軽く感じるから、おそらくは多少無茶しても問題ないと思うのだが…

そんなことを言ったら、きつと夕飯抜きになるような気がする。流石に三日も何も食っていない状態で飯抜きは辛い。

結局俺は何も言えず、咲夜さんの案内で食堂に向かうのであった。

因みにフランは相変わらず、俺の首にぶら下がって、はしゃいでいて、こちらも結局食堂に着くまでこのままだった。

いやあ…もう最高です。只…咲夜さんの視線がとても恐ろしかった事を除けばですが…

「あら、随分と遅かったじゃない」

食堂に着くと、既にレミリアが席に座っていた。

随分と待っていたのか御立腹のようだ。

「大方病み上がりの癖にフランと“遊んで”いて咲夜にお説教されてたのでしょう」

「まあそんな所です」

ああ、完全にお見通しだな、こりゃ。

伊達に五百歳児を名乗っているわけじゃないか。

「今、私に対してとても失礼な事を考えたでしょう？」

「うぐっ」

うげえ…完全にバレてやがる…

どうやらレミリアは人の運命を操れるところか、考えまで読めるらしい。

「まあいいわ。

それよりもフラン。

こいつは芸の一つや二つは覚えたかしら？」

レミリアはフランに聞いた…ってちよつとまてえぬ！

「芸って…俺は犬じゃねえぞ！」

しかし俺の文句に対してレミリアは…

「似たようなものでしょう？」

まあ私はこんな不細工で生意気そうな犬はいらないけど…

あと口調が素に戻ってるわよ」

「ぐっ」

生意気ならまだしも、不細工は酷い…

と心の中でorzのポーズで嘆いていたら…

「お姉様！慧は不細工じゃないよ〜！

顔に関しては、にまいめ？っていうのまではいかないけど、わるくはないよ〜！どっちかっていうといいほうだよ〜！」

なんと！フランがレミリアに反論してくれたのだ！

正直とても嬉しいです！

しかも、うる覚えの言葉を頑張って使っている姿はもう鼻血ものだZE！

「生意気な犬なのは認めるけど！」

浮かして落としおった〜！

流石レミリアの妹！生まれながらのDSだ！

だがそこがイイ！（俺はロリコンであると同時に、DMです）

「だけどそれがイイんじゃない！」

なにっ！ここでまた持ち上げるだと…

コイツはフランに対する忠誠度が急上昇だＺＥ！ってあれっ？これって自分で犬みたいだってことを認めてない？

「ちょうきょう」だっけ？そのしがいがあるじゃない！」

「……………」

フラン様…あなたは最高過ぎです…

まさかのラストで落とすは上級者の技です…

本当にありがとう御座いました！

そんな感じで悶えていたら、レミリアに「なに悶えているのよ…気持ち悪い」と言われた…

「とにかく…慧！」

「はい？」

「今日からあなたの称号は“フランドールの犬”よ！光栄に思いなさい！」

「…もういいです、話しの最中に、自分が犬っぽいことを認識しましたから…」

それに…なんかいいかも…

慧は称号“フランドールの犬”を手に入れた！

「それで、結局何か使えるようになったの？」

「はい、取り敢えずスペルカードが三枚と能力の使い方がなんとなく解りました」

レミリアに聞かれて俺はそう答えた。

するとフランが…

「サトルは結構すごいよ」。

さいしょに弾幕ごっこしたときもそうだったけど、避けるのがすごくうまいし。

あとさつき作ったスペルカードもなかなかの強さだったよ」と言った。

正直、こんな非常識が常識な世界に放り込まれてこの先が不安だったけど、この雰囲気なら案外やっていけるんじゃないか？
と思っただけだ...

「スペカ以外の弾幕が微妙だけど...」

「.....」

「...ぷっ」

まあ予想はついてたよ...

あとおぜう笑うな！

確かに俺の作ったスペルカードは数は少ないが、性能に関しては悪くはない。

しかし問題はフランの言った通り通常に使う弾幕だ。
まだ能力に慣れてないせいか、弾幕を連発すると威力が下がってしまふ。

事実さつき作ったスペルカードも弾幕と言うよりは、能力である“炎”の性質をそのまま利用し応用したものしかない。

「まあ、始めてから1日もしない内にそれだけ出来れば上出来よ」

正直、以外な反応だった。

俺はレミリアの事だから『はあ？一日中やっていて、それしか出来てないわけ？

本当に使えないわねえ！』と言ってくると期待していた（しつこいようだが、俺はロリコンであると同時に、DMである）のだけど...
まあ可愛い娘に詰られるのも好きだが、決して褒められるのが嫌いなわけじゃないから、正直嬉しかったりする。

「けど、なるべく早めに何とかしないとイケないわね...て、かつ勘違いしないでよね！

別にあなたの為じゃないんだからね！

例えば犬みたいなものでも、紅魔館の住人である以上、弱いと私の威厳に関わるからよ！」

ツンデレミリアキター！

まさか幻とも言われた“あのセリフ”をここで聴けるとは！

そしてフランみたいな無邪気ロリもイイが、レミリアのようなツンロリも素晴らしいものがあるZE！

そして咲夜さん…

あなたは確かキッチンで料理をしましたよね…何故いつの間にか此処に？

あとさっきのカメラにしろ、今持つてるビデオカメラにしろ、あなたは一体どこでそんなもの手に入れたんですか？

それは兎も角…

「咲夜さん…後でそのテープダビングさせてください…」

「嫌よ…」

What!?

どうして!?

「さっきの写真は引き受けてくれたじゃないですか！」

「単純な事よ…あなたはさっきフラン様といちゃついていたじゃない！
い！

私だってそんな事したことないのに…羨ましい！

だけどフラン様は仕方ないとしても、お嬢様だけは渡せないわ！

例えそれがビデオテープ一本でも！」

納得しました…

それにしても咲夜さんのレミリアLOVEぶりは凄まじいものがある。

半ばヤンデレと化しているんじゃないか？

んっ？ヤンデレ咲夜さん悪く無いな…

と、そんな事を考えているとフランが「ねえ、ご飯まだ？お腹すいたよ」とぐずりだした。

確かに遅いな…

まあそれもそうだろう。

レミリアはうーうー言いながら、カリスマブレイクしているし。

肝心の咲夜さんは鼻血を出しながら、カリスマブレイク中のレミリアをカメラに収めていて頼りにならない。

きつと妖精メイドもサボってるんだろぅな…

仕方がない。

「フラン、あと15分くらい待っていてくれないか？

今から取ってくるから」そう言っつて、俺はキッチンに向かうために食堂を出ようとドアを開けた。

「むきゅっ！？」

「うおっ！？」

…瞬間に何か紫色のもやしみたいな物体にぶつかった。

「誰かもやしよ！」

「ぐはっ！」

殴られた、本の角で…

どうやら無意識に口に出していたようだ。

それは兎も角、俺の記憶で常に本を持っているイメージの紫もやしはたった一人しかない。

「えつと…パチュリー・ノーレッジさん？」

「そうよ…ついでに言っつと紫もや「済みません！

ちよつと今緊急事態なので謝罪とお礼は後にさせてください！

このままだと多分フランがキレます！

後、出来ればお嬢様と咲夜さんを正気に戻しておいて下さい！

俺は夕飯の支度をしてきますので！」えっ！？ちよつと！？」

正直自己紹介& a m p ;お礼& a m p ;謝罪をしている場合じゃない！

俺は急いでキッチンに向かった。

キッチンに着いた俺は啞然とした。

「妖精メイド、全員さぼってやがる…」

紅魔館には咲夜さん以外にも沢山の妖精メイドが雇われている。

しかしどいつもこいつもろくに仕事をしないので、殆どの仕事を咲夜さんがやっていると云うのは知っていたが…

知っていたが…こいつは酷すぎる！

談笑くらいならまだイイ…しかし野菜でキャッチボールとか、床で睡眠とか、挙げ句の果てに包丁で投げナイフ（しかも的は食材）とか本気で舐めてるのか？

取り敢えず料理の方は咲夜さんが既に仕上げていたので、あとは盛って、食堂に持っていくだけだが、流石に量が量だけあって確実に一人では15分以上掛かる。

そうなたらおそらく食堂が木っ端微塵になるだろう…

フランが暴れて…

（ならば…答えは一つだけか…）

そして俺はキッチンに居る妖精メイド全員に向かって、叫んだ…

「はい！全員注目してくれ！」

俺の声に驚いた妖精メイド達が全員俺に注目する。

まずは計画どおりだ。

「俺は秋山慧、本日付けで紅魔館の使用人になったが、現在咲夜さんが臨時でこちらに手が回らなくなったため、今日の夕食の残りの仕事は俺が取り仕切ることになった！」

俺は半分出任せ、半分真実を妖精メイド達に言った。

予想通り、妖精メイドの殆どは困惑しているようだ。

それもそうだろう。

突然見ず知らずの男がやって来て、いきなり仕事を仕切ると言っているのだ。

疑問に思わないやつなどいない。

だがそれでも、何人かは俺の事を知っているのかその動揺はあまり大きくはない。

それでいい…

俺の事を“知っている”…
それが最も重要だったがそれもクリアだ…
ならば…

あとは俺次第だ！

「と言うわけで、早速仕事だ！

今から10分以内に夕食の準備を終え、それを食堂に持って行く、
以上だ！」

キッチン内の動揺が広がる…

何を言っているんだ…

無茶苦茶だ…

そんなの起きるはずがない…

そんな否定的な意見が聞こえる。

だが俺はそんなものは無視し言った…

〈10分後〉

「お待たせいたしました」

そう言つて俺は食堂に入る。

その手には夕食を乗せたワゴンを押し、後ろには同じく夕食を乗せたワゴンを押している妖精メイドの姿がある。

しかしその顔は何かに怯えるような顔をしている。

現在の状況はレミリアも咲夜さんも正気に戻つて、フランも「はやく！はやく！」と言つてご機嫌のようだ。

良かった、どうやら最悪の事態は避けられたようだ。

しかしパチュリーに関してはかなり疲れた顔をしている。

まあSAN値が下がった友人と、最早正気なんてどこかに置いてきました状態のメイド長を正気に戻すのに苦労したのだろう。

事実テーブルの上には喘息の薬の包み紙らしきものがある。

俺は夕食の配膳を終わらせてから、パチュリーに謝ることにした。

「あゝ、パチユリーさん？」

「何？」

「本当だったら気絶していたときに診てもらったお礼をしなくちゃいけないのに、さっきはもやし呼ばわりしたり、仕事押し付けたりして済みませんでした…」

俺は誠心誠意謝った。

だがその表情は相変わらず無表情だ。

やっぱり土下座くらいした方がよかったかな…と思っている…

「別にいいわよ…さっきは緊急事態だったんだし…それに妹様を止めるよりはレミイ達を正気に戻す方が遥かに楽だし」

どうやらさっきのことは許してくれたようだ。

「それに意識がなかったときのお礼もいいわ…」

こっちも“色々”やらせてもらったし…」

「ひよっ？」

ちよつと待った！

色々ってなんだ！？

お前は俺に何をしたんだ！？

とそんな事を考えてうるたえていると…

「冗談よ…」

「へっ？」

「だから冗談よ…さっきのもやし呼ばわりしたお仕置きよ」

はあゝ良かったゝマジでビビったぜ。

流石に吸血鬼になったとはいえ、寝てる間に変な薬を打ち込またりするのは良い気分がしない。

「まあ、皮膚や毛髪からサンプルを採ったり、採血したり、“お腹をメスで切ってみた”りしたけど…」

「十分すぎる程色々やってるじゃねえーか！」

正直、採血までは解るが、腹を切ったって何だよ！

「仕方ないじゃない…診ている時に何か腹部に違和感があったんだから…」

因みに正体は立派な真田虫だったわ…

後で見る？」

「いえ、遠慮しておきます…」

正直、そんなもの見せられたら確実に胃の中身をリバーす。
それにそんな話を食事中にしないで…

みんな食が進んでないよ…

そう思っていると再びパチュリーが話してきた。

「後、話は変わるけど、私のことはパチュリーでいいわ…
それに敬語も要らない。」

どうもあなたが敬語を話していると違和感があるし…」

またかよ。

フランにしてもそうなのだが、俺が敬語を話すのはそんなに変なのか？

「変ね」

「変よ」

「へんだよ」

「……………」

もういいや…

そう思いながら、俺は再び心の中でorzのポーズを取るのだった…

んっ？そういえば…

「ごめん、パチュリー！」

すっかり自己紹介忘れてた！

俺の名前は秋山慧。

慧とでも呼んでくれ。

これからもよろしく」

「パチュリー・ノーレッジよ。」

こちらこそよろしく、変な外来人さん…」

こうして、ようやく俺達は自己紹介をしたのだった。

それにしても毎日こんな感じで、俺はこの世界で無事やっていけるのだろうか…

さっきは少し自信が着いたのに、また不安になる自分のヘタレっぷりに呆れつつ、俺は三日振りの食事を口にするのであった…

第三話 初仕事と日陰の魔女（後書き）

これで第三話は終わりでございます。

如何でしたでしょうか？

いつもながら、私としては楽しんでいただければ幸いです。

今回のストーリーで真田虫と言うのが出てきましたが、解らない人の為に説明すると、所謂寄生虫です。

詳しい説明は省きますが、デカイやつは十メートルくらいになるそうです。

因みにパチュリーが慧の腹から摘出したやつはそのくらいの大きさです。

ではサイドストーリーの予告ですが、キッチンで慧がなにを言ったのが判明します。

それでは今回はここまでにします。

それでは…

s i d e 3 (前書き)

バイトが忙しかったり、小説の内容が長くなったりして、予定より大分投稿が遅れましたが、サイドストーリー第三回です。

side 3

「そういえば慧、一つ聞いていいかしら？」

夕食の最中に咲夜さんが聞いてきた。

因みに本日にして俺の幻想入り初の食事は、ビーフシチュー“っばい何か”と幻想郷の野菜を使ったサラダとパンである。

しかし血が夕食になかった為、先程血はいつ頃飲めばいいか？とレミリアに聞いたところ、血は食後に出ることになっていると言っていた。

俺としては血を飲んだことが無い（当たり前だ）から、どんなものなのかと結構楽しみだったりする。

「いいですけど、どうしました？」

まさか：何かミスがありました！？

お嬢様の涎掛けを忘れたとか…」

「ちょっと慧！本当に私のことどう思ってるわけ！？」

何かレミリアが言っているが、そう言うセリフはこぼさずに物を食べれるようになってから言ってくれ。

事実、レミリアの服は、シチューをこぼしたせいで所々茶色に染まっている。

パチュリーもその事に気づいているのか、必死に笑いを堪えている。こりゃ咲夜さんの洗濯が大変になりそうだな。

シチューの染みは落ちにくいし…

「いえ、慧の仕事は多少は粗いけどしっかり出来ているわ。

寧ろ、正直こつちが助かったくらいよ。

あと涎掛けは次回以降お願いするわ。

「咲夜まで何言ってるのよ！」

只、どうやってさばり癖のある妖精メイドに指示を出せたのか気になって…

「うーうーうー」

（ああうーうー言っているお嬢様可愛い！）」

「ああ、その事ですか。」

単純にサボったら、腹を空かせたフランが暴れて、お前ら全員死ぬぞって言ったんです。

正直、俺とフランが弾幕ごっこをした事を知っている妖精メイドがいなかったら、流石に難しかったですよ。

話に信憑性が出ませんし……」

「なる程（ああもう我慢できない！）」

どうやら納得してくれたようだ（何だかレミリアに突撃していったが）。

しかしフランは不満があるのか「フランはお腹減ったからって暴れないよー！」と言っている。

ああ怒って頬を膨らましているフラン、かわええな。

それにしても、やはりフランとレミリアは姉妹だけあってよく似ている。

様相は勿論、ふと見せる仕草も似たようなものが多い……んっ？

「あれっ？フランはレミリアと違って、飯をこぼしてないんだな」
そうなのだ。

フランの服にはレミリアと違って、一滴の染みもないのだ。

ちよつと意外だな…そう思っていたら、フランは胸を張って言った。

「ふっふっふ、食事のマナーは“れでい”のたしなみなだよ、サトルくん！」

ありやま。

正直あそこでメイド長に愛でられているお嬢様より、よっぽどカリスマがあるじゃないですか。

こりゃ、頭首の座を奪う日も遠くなさそうだ。

けどまあ……

「“淑女”^{レディ}と言うわりには、口の周りにシチューが付いてるぞ」

そう言っつて、俺は紙ナプキンでフランの口元に付いたシチューを拭く。

やはりこういう所は、まだまだ子ども何だなと思った。

「あう！サトルはイジワルだ。」

フランの方が年上なのに。」

「ごめんごめん、けど本当に美味しいよな、このシチュー。」

そう言っただけはシチューを口にする。

うんやっぱ美味しい。

外の世界にいたときは、忙しくてロクなものを食べてなかったし、こっちに来てからは三日間絶食状態だったから余計に美味しく感じるとしても、凄く美味しい！

「あたりまえだよ！咲夜の料理は幻想郷一だもん！」

そうなのか、やはり今現在はかなり“アレ”な事になっているけど、紅魔館の瀟洒なメイドは格が違うな……

「いや、それにしても本当に美味しいよ。」

特にこの肉何だろ？

牛肉や豚肉とも違うし？」

確かに、この料理に入っている肉は俺が今まで食ったことのあるどの肉とも違う。

独特な臭みはあるけど逆にそれがイイ。

「サトルも気に入ったんだね、“人肉”シチュー」

………はい？

「これ…人肉なの？」

「うん！」

「へー初めて食うけど、美味しいもんなんだな！」と俺が人肉の美味さに感心していると……

「ちよつと！なんでそんなに平然としてるのよ！」

とレミリアが突っかかってきた。

よく見ると咲夜さんやパチュリーも啞然とした顔で俺を見ている。

何故に！？

「パチュリー様、彼は本当に人間だったんですか？」

「ええ、その筈よ……」

私が診たときはまだ完全に吸血鬼化していなかったし…まっまさか、外の世界ではカニバリストの殺人鬼だったとか！？

レクター博士みたいな！？」

「なんでそうなる！」

俺、普通に大学生やってたよ！」

あとこの世界に羊達の沈黙があつた事に驚きだよ！

「ハンニバルやレッドドラゴン、ハンニバルライジングもあるわ…

全部小説版だけ…」

本当に何でもアリだなヴウル図書館…じゃなくて！

「なんで俺が人肉ウマーで言っただけで、殺人鬼呼ばわりされなきゃいけないんだよ！」

俺は単純に美味しいものを美味しいと言っただけだぞ…

「それは…まあ、今まで色々な外来人を見てきたけど、人肉と知っても吐くどころか、寧ろ進んで美味しそうに食べてる人なんて初めて見るわ。」

正直作つた側としては凄く嬉しいけど…」

と咲夜さんはかなり複雑そうな顔をして言った。

「まあ…不味いて言われたり、吐かれたりするよりはいいんじゃないの？」

まあ約一名物凄く不満そうな人がいるけど…」

そう言つてパチュリーはレミリアの方を見る。

確かにレミリアは、物凄くふてくされた顔をしている。

そんなレミリアを見ていると、横にいたフランが「お姉様で、外来人が来ると人肉料理をふるまつて、そのはんのをみて楽しむの…」と言つてきた。

何というか…最低な趣味だな…

「けどまあ、自分の思い通りに進まなくて、いじけてるお姉様を見るのもおもしろいけどね」

そしてフラン…

君はやっぱりドSなんだね…

それも生まれながらにしての…

そんなこんなで、俺の幻想郷初の夕食は終わった。

余談だが、食後の血はやっぱ紅茶に入れられて出てきた。まあ予想通りだったけど、これまた凄く美味しかった…

……………んっ？俺なんか、順調に人外の道を歩いてないか？

side 3 (後書き)

これでサイドストーリー第三回は終わりになります。

まあ、いつもながらの駄文ですが…

ああ本当に文才が欲しい。

今回は紅魔館の夕食の風景だったのですが…

なんかカオスです…

レミリアは常時カリスマブレイクだし、咲夜さんは慧はスルーして
ましたが暴走してますし、パチエは空気だし、フランは天然ドSだ
し、挙げ句の果てに主人公は人肉ウマーてwwww

因みに主人公の人肉ウマー現象は沙耶の唄と言うエロゲのネタです
(まあここまでハイテンションではありませんが)。

因みに作者はこれからもnitro+ネタをガンガンに出していきます…主にデモンベインとファントムを(主人公と作者の目標は大
十字九郎みたいな漢になること)！

では今回はここまでになります。

感想や質問も待っていますので、お気軽にお書きください。

第四話 紅 美鈴（前書き）

ようやく第四話です。

正直ラブコメっぽい文章は難しいです…

今回でようやく美鈴（もう一人のヒロイン）が登場します。

第四話 紅 美鈴

「慧、ちよつといいかしら？」

夕食の後、紅茶（血液混入）を飲みながらフラン達とまたーりしていたら、咲夜さんが声をかけてきた。

えっ？なんで俺は仕事をしていないかって？

そりゃあ最初は咲夜さんの仕事を手伝おうとしたさ。

けど咲夜さんに「本当だったらあなたの仕事は明後日からなんだから、今日はもう休んでなさい」と言われて、こっやってまたーりしてたワケだ。

「良いですけど、どうしました？」

「実は、さっきお嬢様に頼まれた事があって、それが長引きそうで手が放せないから、門番に夕食を持っていつてあげて欲しいのよ」「門番と言うことはきっと美鈴のことだろう。」

そういえばまだ会っていなかったな…

「わかりました。」

それじゃあ、挨拶がてらにいつてきます」

「頼むわ。」

後サボって寝ていたら燃やしちゃって構わないから」

燃やすって…

流石にバイオレンス過ぎるだろそれ…

そう思いつつ俺は美鈴の夕食を持って、門に向かった。

「寒っ！」

俺の三日振りの外に關しての感想はそんな情けないものだった…
当たり前だ。

季節はまだ3月になったばかりだ。

確かに昼なら少しは暖かくなってきたが、正直夜はまだまだ寒い。
しかも幻想郷は温室効果ガスとは無縁だろうから、きっと俺の元いた世界よりも気温が低いのだろう。

（正直、コートとマフラーが無事で良かった）

俺はそう思った。

因みにこのコートとマフラーは鞆の中に入れていた為に無事だった数少ない衣類である。

しかし、コートの下に着ているのが黒のタンクトップ（上に着ていたシャツはフランとの弾幕ごっこでボロボロになってもう着れない）で、履いているのが最早ダメージ加工も真っ青な程にボロボロになったジーンズのため、どうにしたって寒い…

それにしても本当に広い庭だ。

庭園と言っのだろうか、花壇には沢山の花が咲いているようだが、残念ながら今は暗くてよくわからない。

そんなことを考えながら歩いているうちに、どうやら門の前に着いたようだ。

館の主の性格なのか、やたらと豪華でデカイ門だが、あまりくどくはなく、寧ろ上品な感じた。

そう思っていると…

「くしゅんっ」

と誰かが門の外でくしゃみをした音がした。

まあ大体想像はついていたが、咲夜さんに頼まれた事もあったので俺は門の外に出た。

そこには、赤い長い髪をした背の高い緑の中国風の服を着た女性がいた。

紅 ホン 美鈴 メイリン…

紅魔館の門番にして、気を使う程度の力を持つ武術の達人…

の筈なのだが……

「うううううゝ寒いよゝお腹へったよゝ」

と言って体育座りをしている姿は、全く門番には見えないのは俺だ

けだろうか…

取りあえず夕飯を渡した方が良さそうだ。

「あの夕飯を持ってきたんだけど…大丈夫か？」

「ふえ？」

「ご飯持ってきてくれたんですか？！」

「ありがとうございます！」

「そしていただきます！」

そういうなり、美鈴は物凄い勢いで俺から夕飯を受け取り（奪い）、
これまた物凄い勢いで食べ始めた。

どうやら余程腹が減っていたのか、持ってきた料理はみるみるうちに消えていく。

なんと言うか…年頃（と言ってもきつと俺より遥かに年上）なんだから、もう少し自重するべきではと思うくらいに、見事な食いつぶりだ…

おっどうやら食い終わったようだ。

「ふう〜ごちそうさまでした〜」。

で、あなたは確か…フラン様の部屋で倒れていた人ですよね…」

「ああ、秋山慧だ。

よろしく」

「慧さんですか〜」。

私は紅美鈴と言います。

この紅魔館の門番です。

こちらこそよろしくです」

と俺たちは互いに自己紹介をした。

「それにしても、よく生きていましたね。

今までにも何人か外来人でフラン様に会って生き残った人はいましたけど、徒手空拳で弾幕ごっこをして生き残って、しかも気に入られて吸血鬼化したのは慧さんが初めてですよ！」

「まあ本当に運が良かったよ…」

後、最後の最後で能力が発現したから別に徒手空拳ってわけじゃない

いぜ？

いや、本当にあの時は生きながらにして三途の川が見えたぜ…冗談じゃなく…」

と俺が冗談めかして言ったら「なんですか、それ」

本当に冗談に聞こえませんかよ」と言って美鈴は笑った。

その顔を見た俺は結構可愛いな…と思った。

というか、正直あの顔にときめかない奴は男じゃない。

「あれっ？何だが顔が赤いですけど大丈夫ですか？」

「あついや大丈夫、大丈夫」

もし俺が軟派な奴だったら、きつとここで『美鈴に見惚れていた』

とでも言っていたのだろうが、生憎俺にはそんな度胸はないぜ！

と心の中でそんなヘタレ発言をしていると…

「へっくち！」

と美鈴がまったくしゃみをした。

まあこれだけ寒いのに、そんな薄着で門番なんてしていたら風を引いてもおかしくない。

「この後もまだ門番の仕事があるのか？」

「んゝ取りあえず12時に妖精メイドと交代になりますから、あと四時間でところです」

四時間か…

流石にきつそうだな…

よし！

「美鈴！少し待っててくれないか？」

「あつ、はい。」

いいですけど、いきなりどうしたんですか？」

「まあそれは後でのお楽しみって事で…」

それと…よつと」

そういつて俺は着ていたコートを脱いで、座っている美鈴に羽織らせた。

「はわっ！？」

「それで少しは寒くないと思うから！
そんじゃ！」

そう言つて俺は“あるもの”を集めに走りだした。

〈十分後〉

「慧さん：お気持ちは嬉しいのですが、そんなに沢山薪を持ってこられても肝心の火がないですよ…」

そう俺が探していたのは、燃料になりそうなものである。

まあ、運良くよく乾燥した丸太があったので、そいつを吸血鬼パワ―全開の手刀で割つて薪にしたのだが…

どうやら美鈴は俺が吸血鬼になったことは聞いていても、俺の能力については聞いていないようだ。

「まあ見てなつて！」

そう言つて俺は手に抱えていた薪を地面に並べる。

その上に大量の枯れ葉（この枯れ葉は美鈴曰わく、門の前の掃除の時に集めたものらしい）を被せる。

これで準備は完了だ…

「よっしゃいくぜ！」

“燃える”！」

“ボウツ”

そう言つた瞬間、俺の手のひらに炎が灯つた。

そしてその炎を俺は枯れ葉と薪の山に引火させた。

“ボウツパチパチパチ”

うんやっぱりよく乾燥してるだけあつてよく燃えるな…

そう、俺がやりたかったのは所謂焚き火って奴だ。
薪も使ってるし、これなら結構長持ちするだろう。

「それが…慧さんの能力…」

「そつ、“焰を操る程度の能力”てとこかな」

「へへ格好いい能力ですね」

まあ確かに格好いい能力なんだがな…

「正直、周りの能力が反則的なのが多くて、イマイチ強そうに見えないんだよな…」

「そんな事ないです！」

なんかこう…吸血鬼で炎使いつて、漫画のヒーローっぽいじゃないですか！」

ヒーローか…柄じゃないけど、なんかいいな！
格好いいし！

「それに…慧さんだったら、自分の力を正しい事に使ってくれそうだし…」

正しい事？

突然、美鈴がそんな事を言ったので俺は疑問に思った。

「おいおい、俺は普通に使いたいように能力を使ってるだけだぜ？
そんな大層な事は考えてねーよ」

「確かに慧さんは意識はしていませんが、喋っていると何となくそういう感じに思えるんですよ…」

何というか…そういう人特有の“気”みたいなものが慧さんにはありますから。」

“気”か…

正直、眉唾ものな根拠だが、美鈴がそれを言うとその根拠に説得力があった。

なぜなら美鈴の能力は“気を使う程度の能力”と言って、生命の体に流れている“気”を読みそれを操る事ができる。

だから“気”に関してはプロとも言える美鈴が言うからには、実際にそういうものがあるのだろう。

「それに、慧さんは優しいですし！」

「？」

今なんて言った？

優しい？

俺が？

「いやいや、それこそ無い！」

俺なんか優しい人だったら、世界中善人と聖人君子で溢れかえってるぜ？」

「そんな事ないです！」

だって私にコートを貸してくれたり、焚き火をしてくれたりしたじゃないですか！」

まあ確かにやったけど……

「いや……それは……まあ、美鈴風邪引きそうだったし……その事を知って何もしいってのは何か後味悪いなって思っただけで……」

「だからですよ。」

「？」

「慧さんは誰かの為に行動を起こせる人ですから。

だから、慧さんは優しい人ですよ。

美鈴さんが保証します。」

正直……何か気恥ずかしいなこう言うの……

事実、俺は人から褒められた経験が少ないから、本音を吐くと結構嬉しかったりする。

だけど……

無意識に俺は昔を思い出す。

そして、その中で芽生えた黒い感情を思い出す。

美鈴には悪いけど……やっぱり俺は、自分が優しい人間とは思えないよ……

そう思っていると……

「も……慧さんは変なところで考えすぎなんですよ！」

こう言うのは理屈じゃないんです！」

とそんな事を言われた。

「理屈じゃないと言われてもな…」

「じゃあ、一つ聞いていいですか？」

「？まあいいけど…」

「寒いでしょ、今」

.....

「全然寒「寒いですよね？」いや、だか「鳥肌が立ってますよ」すみません…正直無茶苦茶寒いです…」

何だか押し切られるようにして認めてしまった…

「普通、自分も寒いのにあつて間もない人にコートを貸すなんてできませんよ。」

少なくとも優しくなければできません」

「そんなもんなのかねえ…」

「そんなものなんです！」

そう言つて美鈴は俺の目を見つめてくる。

きつと、美鈴は自分がどれだけ真面目なのかを伝えたいだけなのだろうけど…

なんというか…美鈴はやっぱ可愛いわけで…

そんなに至近距離で見つめられると緊張して思考が追いつかないわけ…

あと至近距離で見つめてくるから美鈴の胸（かなり特盛り）が当たってるわけで…

結局…

「わかりました…」

という情けない答えしか出せなかった…

美鈴はどうやら納得してくれたのか「よろしい！」と言ってくれた。なんだか、幻想郷に来てから女の子（主にフランや美鈴）に振り回されてばかりだな俺…

なんと言つか、エロゲの主人公が周りから羨ましいと言われても、喜んでいない理由がよく解った気がする…

まあ俺の場合はきつと恋愛対象に見られてないだろうが…

「けど、本当に良かったです！」

と美鈴は言ってきた。

「どうしてだ？」

「だって、一緒に働く人が優しい人でしたから」美鈴はそう言っ
てまた笑った。

うん、やっぱり笑っている美鈴は可愛いな…

「ふえっ!？」

ん？

何か美鈴の様子がおかしくないか？

顔が真っ赤だし…

「慧さん今なんて言いました!？」

あれっ？俺なんか言っただけ？

回想開始

「うん、やっぱり笑っている美鈴は可愛いな…」

……………あれっ？また無意識に声に出

してたの俺？

「慧さん？」

「はわ!？」

はわわわわわ!

何というか、違うんだその…じゃなくて!

まあ、確かにそうは思ったとは思っただけ…そう言う意味じゃないん
だ!

いや、これもなんか違うし…」

つか、そもそも俺は何を言っただよ…

取りあえずこの状況をひっくり返す策を見つけるしかない!

どうする俺!

どうする!

そんな感じで俺がパニックしていると…

「ぷっふぷふ…あははははは！」

と美鈴が爆笑していた…

何故に！？

「すいません…何かオロオロしている慧さんを見てたら可笑しくつて…」そう言いながら、美鈴は必死に笑いを堪えている。

「む、何か酷くね？」

まあ原因は俺の言った事なんだけど…」

ヤバイ…思い出したらまた顔が熱くなってきた…

「いえ、本当にすいません。」

私も初めて男の子に可愛いと言われて舞い上がってましたし」

「なんか意外だな。」

美鈴だったら結構そういうの言われてそうだけど…」

まあ当然の疑問だ…正直言つて美鈴はかなり可愛い。

渋谷とかみたいいな人が沢山いるところに立たせたら、殆どの人が振り向く（まあ東方のキャラは殆ど当てはまりそうだが）んじゃないかってくらいにだ。

「いえ、本当にないんですよ。」

まあこの辺りはあまり人間が来ませんし、そもそも幻想郷は男の妖怪が少ないですから。」

確かに考えてみればそうだった。

この幻想郷には男の妖怪が少ない。

少なくとも俺が知っている中ではこーりんくらいしか知らない。

まあ、それでも低級の妖怪や人間、俺のような妖怪化した外来人、天狗や鬼を含めれば結構な人数が居そうだが、吸血鬼と言う最強とも言える妖怪の館に近づく低級妖怪や人間はまずいない。

天狗は基本妖怪の山から出ないし、鬼に関しては地底の旧地獄から殆ど出てこない（翠香は博麗神社に居候してそうだが）。

外来人においては、そもそも人数が少なく、大半が妖怪の夕飯になるのに、俺のように妖怪化する外来人は数えるくらいしかないんだ

ろっ。

「だから本当に言われたことがないんですよ」

「なる程、納得」

（まあ本当は慧さんに可愛いつて言われたから嬉しかったんですけどね）

「んっ？なんか言ったか？美鈴？」

「いつ、いえ何も言ってませんよ」

「気のせいですよ」

なんかまた顔が赤くなってるけど、本人が大丈夫って言うてるなら大丈夫なのだろう。

と言うより、正直これ以上突っ込んだら地雷を踏む気がする。

「そっか。」

「そんじゃ俺はそろそろ行くよ」

「あつ！ちよつと待ってください。」

さっき貸してくれたコート忘れてますよ！」

そう言つて美鈴はコートを脱ごうとしたが…

「ああ、いいよ。」

明日服とか新しくするつもりだったし、やるよそれ。それにまだまだ寒いんだから、薄着じゃ風邪引くぜ」
と俺は言つた。

「だけど…それは慧さんも同じじゃないですか！」

「大丈夫だつて。」

俺馬鹿だし、風邪なんか引かないって。

「そんじゃ！」

そう言つて俺は紅魔館まで走り出した。

このままだと意地でもコートを返そうとするだろうし…

まあこれで美鈴が風邪を引く事もないだろう。

そう思いながら、俺は館のドアを開けた。

食堂に戻った俺は何かおかしいと感じた。
どうしてかって？

まずレミリアとパチュリーが俺を見てみよんにニヤニヤしている。
物凄くム力つく表情で…

そして何よりフランが物凄く不機嫌だ…

食後のデザートがお気に召さなかったのだろうか…？

「ねえサトル…」

なんか物凄く怒ってないか…

「さっき外で美鈴をナンパしてたでしょ…」

？、何の事だ？

確かに美鈴と話してはいたが、別にナンパしてたわけじゃない。
だから俺は正直に…

「いや、してないけど？」と答えた。

それを聞いたフランはキョトンとした表情になった。

「じゃあじゃあ！フランも美鈴とおんなじようにかわいい？」

ああ、どうやらさっきの俺と美鈴の会話を聴いていたな。

まあここからなら門まではそんなに遠くないしな。

「ああ、可愛いよ」

「本当！？」

「本当だとも！

第一、嘘をつく理由がないだろ？」

そう言うところフランはさっきまでの顰めっ面をがらりいつもの可愛らしい笑顔に変えて俺に抱きついてきた。

「ちよっフラン！？

どうしたんだいきなり！」

戸惑う俺をよそに、フランは俺にしがみついてはしゃいでいる。

そしてその光景を見ながら相変わらずにやついているレミリアとパ

チュリー。

「まあ何か大変そうねえパチュリーさん？」

「ええ…けど楽しそうなのだからよろしいのではなくて…レミリアさん？」

しかも何なんだ？

その三文芝居は？

「いえ、早速厄介事に巻き込まれているあなたを見て、楽しめそうだと思うっていただけよ。

ねえパチエ？」

「ええ…確かに慧は色々と楽しませてくれそうね…」

実際にこんな貴重な資料も提供してくれたし…」

そう言つて、パチュリーはテーブルからデカイガラス瓶を取り出す。中にはデカイ真田虫つてそれさつき言っていた俺の腹から取り出した奴じゃねえか！

結局出すのかよ！

はあ…どうやらレミリアの言った厄介事とは、きっと女難の事なのだろう。

まあ嬉しいのか、悲しいのか、誰も俺を恋愛対象としてみていないのがエロゲの主人公との大きな違いなのだろう…

「サトルの鈍感…」

「ん、何か言ったか？」

「何も言つてないよ」だ」

何故だ？何かまたフランが若干不機嫌だぞ？

何かしたかな俺…

「何だかフランも美鈴も大変になりそうね…」

「そうね…レミィ…」

本当に何なんだ？

第四話 紅 美鈴（後書き）

これで第四話はお終いです。

前書きでも書きましたが、やっぱりラブコメは難しいです。

けど慧にはこれからもフランと美鈴に存分に振り回される予定です。えっ？女のドロドロした闘い？

慧に関してはそんな事ありませんよ？

慧は作者であるこの私…紅丸をモデルにしていますので、二股できるような度胸はありません。

取り敢えずメインルートはフランになりますが、余裕があれば美鈴ルートも作る予定です。

因みに女のドロドロした闘いは、他のキャラではあります…

どのキャラなのは、御想像にお任せします…

side 4 (前書き)

遅くなりました。

side 4ようやく完成です。

なんかあくまでサイドストーリーの筈なのに、最近本編並みに長くなっているような…

因みに今回はフランや美鈴などが一人称の話になっています。

正直あまり自信がない… (いつものことですが… orz)

side 4

side 紅 美鈴

「大丈夫だつて。

俺馬鹿だし、風邪なんか引かないつて。

そんじゃ！」

「えっ？ちよつと！？」

そう言つて慧さんは館の方に走つていつてしまった。

仕方がないので、私は慧さんから貰ったコートを着直して門番の仕事に戻る。

門の前には先程慧さんが焚いた焚き火が今もお燃え続けている。

多分この感じなら、明日の朝まで燃え続けるだろう。

私はその炎を見て、ついさっきまで一緒にいた少年を思い出す。

…秋山慧

外来人であり元人間の吸血鬼…

彼を見たのは実は今日が初めてではない。

三日前、彼がフラン様によって吸血鬼にされた日…

私は咲夜さんに言われて気絶している彼を、フラン様の部屋から運び出したからだ。

しかし私は本音を吐くと、彼に会うのが不安だった。

既に咲夜さんに彼が人間ではなくなつてしまった事を聞いていて、きつと彼もこの紅魔館で働くと思つていたから…

人間から人外存在になつた者は、大抵がその事に絶望して性格が豹変してしまう。

大半はその現実を受け入れるが、中には自分を人外にした者を含めて全ての人外存在を憎む者も少なくはない。

私も伊達に長く生きてはいないから、そういう状況は何度も見てきた。

それ故に、妖怪である自分がそんな人とうまくやっていける自信がなかった。

そう…

彼…慧さんと再び会うまでは…

最初は彼も他の人と同じように、自分が人外となった事に絶望していると思っていた。

だから最初の言葉に“大丈夫か？”だなんて言葉が出るとは思わなかった。

本当だったら、自分が心配されるはずの立場なのに…

彼も自分が既に人間じゃないと解っているのに…

それでも彼は寒さで震えている私のことを心配してくれた…

“優しい人”…それが私が彼に抱いたイメージだった…

「…優しすぎですよ」

彼から貰ったコートを見て、私は不意に呟いた。

彼は確かに優しい人だ。

しかし彼はそれを否定している。

そんな彼が私には危うい感じに見えた。

だからきつと…

「こんなに気になるんだろうなあ」

冷たくも綺麗な月夜に、焚き火の暖かい光が灯っている。

ふと私は彼がまるでこの炎のようだと思った。

暖かく周りを包み込み、その光でどんな暗闇をも照らし出すのに、ちよつとした事で消えてしまいそうな危うさを持つ。

そんな所が彼と似ていると思った。

「本当に…優しすぎですよ…慧さん…」

だからこそ…

頼りがいがあるのに…

その危うさが気になって…

会ったばかりなのに…

私は…

こんなにも…

彼のことか…

好きになり始めていた…

side 十六夜 咲夜

紅魔館の武器庫。

古今東西、ありとあらゆる武器が保管されているこの部屋で、私はお嬢様に頼まれてある物を探している。

お嬢様曰わく、外の世界のルーマニアに住んでいた時に貰った品で、なかなか良い武器なのだが、今の今まで誰も使いそうになかったため、何十年も使わずに武器庫にしまいっぱなしになっている物らしい。

（あらっ、これかしら）

棚の奥にあった古い木製の箱を見つけ、私はそれを取り出す。

そして、その箱を見た瞬間、私はその箱の中身が目的の物だと確信した。

その箱は、一見すると変わった偉作がされている以外は鍵のついた

普通の箱である。

しかしその偉作は、魔に関わる者には最早常識と言っても過言ではないものであった。

“魔力隠蔽の結界”

その名の通り、結界内のものの魔力を外から感知されないように隠蔽：つまりは誤魔化すことができる魔術や魔法の基本中の基本である。

正直な所、私はこの箱の中身が気になっていた。

鍵以外にも魔力隠蔽が施されているこの箱の中にあるものが、一体どのような物なのかと。

鍵を開けるのは簡単だ。

けど、それをやるということは、自ら瀟洒なるメイドの異名に泥を塗る事になるだろう。

そう思った私は、何もせずにその箱をお嬢様に持っていくことにした。

しかし、私は本当にそれを渡してしまってもいいのだろうかとも考えていた。

この箱の中身を、きっと明日お嬢様が慧に渡すつもりなのだ。

そう考え私は箱の蓋に書かれた文字を見る。

“ P h a n t o m E i n & Z w e i ”

もし、これが私の知っている武器なら、彼は相当厄介な物を渡されたことになる…

（本当に慧は厄介事に好かれているわね…）

そう思いながらも、私はその箱を持ってお嬢様の部屋に向かった。

その時の私は、その箱をお嬢様に渡さなくてはいけないと思っていた…

まるで…

箱の中身自信が…

そう命じていたと思えるくらいに…

side パチュリー ノーレッジ

慧を散々からかったあと、私はいつものように地下の図書館に戻ってきていた。

勿論、特大真田虫も持ってきている。

これだけ立派なモノは、この幻想郷でも滅多にお目にかかれない。本当に彼には感謝している（実験台的な意味で）。

それにしても、本当に彼はいい研究対象だ。

以前から、吸血鬼化した人間を研究してみたいと思ってはいたが、レミイは人間を吸血鬼にするつもりが無かったし、フランに関しては大抵は破壊してしまうし、生き残った人間も大半が上手くその場所から脱出したりする場合ばかりで、正直諦めかけていたからとてもありがたかった（しつこいようだが、実験台的な意味で）。

ああ…にやけ顔が止まらない…

「パチュリー様？」

一体どうしたんですか!？

急ににやけだして…」

いつの間にかこあが後ろにいた。

しかも若干引いている…

「なっ、なんでもないわ…」

それよりもこあ、紅茶お願い…」

「あつ、はい！」

わかりました！」

そう言つてこあは図書館から出ていく。

こあが出ていくと同時に私はある魔導書を広げる。

この魔導書は主に魔法薬に関して記述されている。

そして私が開いたページには、“惚れ薬と媚薬”の二つの効果合わせ持つ薬の作り方が書いてある。

この薬は無味無臭でしかも色も透明、さらには何かに入れてもその効果が変わらないという優れものなのだ！

しかし、その薬にはある欠点がある、それは…

ティーカップ一杯分の量を作るのにでも、“あるものが”通常のもので結構必要なのだ。

正直な所、それはさほど珍しいものではないのだが、私の虚弱体質ではおそらく半分も集めきれない内に死ねる自信がある…

だが…

それも解決した！

私は顔をにやけさせて“特大真田虫”の入った瓶を見る。

そう！

この薬に必要なものは新鮮な真田虫なのだ！

本来なら結構な量が必要なのだが、この特大真田虫があれば、一匹で事足りる！

しかも、コイツは吸血鬼（実験台）の腹の中にいた奴だから魔力も持っている可能性がある。

そうなれば効果は更に上がる！

「ふふふ…コレさえあれば魔理沙はもう私のモ・ノ。

アリスなんかには絶対に渡さないわ…」

まずいにやけが止まらない…

まだだ！まだ笑っちゃ駄目だ！

この笑いは魔理沙を婿にするまで取っておかないと！

「ふふふふふふふふふふふふふふ…」

そうして私は、魔理沙との未来を夢想して笑うのであった…

「パチユリー様？お茶が入りましたって…怖っ！」

side レミリア スカーレット

「それでは、失礼します」

そう言つて、咲夜は部屋から出て行つた。

流石は我が瀟洒なる従者。

私の頼んだ仕事を完璧にやり遂げてくれた。

ただ、私としては気になつていゝなら別に鍵を壊して中身を見ても構わなかつたのだけれども…

まあ、咲夜は固いところがあるから、どうせ瀟洒の名に泥を塗るんでも思つたのだろう。

そう思いながら私は咲夜の持つてきた箱を見る。

魔力隠蔽の偉作の施された、異形の箱…

今から数十年前…咲夜や美鈴が働き始める前にやつて来たある男が宿代代わりと言つて置いていったものだ。

初めは、当時の使用人たちに使わせてみようとした。

しかし、誰一人として扱える人間がいなくて結局、長い間武器庫の奥にしまいっぱなしだったのだけど…

数日前に何故かふとその事を思い出し、その直後に慧が紅魔館にやつて来る運命が見えた。

恐らくこれは宿命だ…

慧はコレを手にする宿命だった…

この呪われた魔銃…ファントム アインとファントム ツヴァイを…

しかし、私はその呪いの真相を知っている。
そして、確信している。

慧が確実にこの銃を使いこなす事ができるということを。

「ふふふ…本当にあなたは私を飽きさせないわね…慧」

side フランドール スカーレット

「ああ、可愛いよ」

「本当!？」

「本当だとも！」

第一、嘘をつく理由がないだろ？」

サトルにそう言われて、わたしは嬉しくてサトルに抱きつく。

「ちよっフラン!？」

どうしたんだいきなり!」

サトルが戸惑っているけど、そんなの構わない。

だってサトルはフランの初めての人…

フランが初めて吸血鬼にした人…

サトルを吸血鬼にした理由は、実は自分でもよくわかってなかったりする。

ただ、サトルは何となくわたしと似てる雰囲気があった。

だからこそ、そんなサトルとずっと遊んで欲しくて、ずっと一緒にいたくて、離れたくなくて…

そう思っつて、サトルを吸血鬼にした。

実際にサトルは目が覚めてからもずっと一緒にいてくれる。

だからかな…さっき、サトルがメイリンと楽しそうにしている、メイリンのことを可愛いって言ったのが嫌と思ったのは…

サトルがメイリンに取られちゃうと思ったのは…

メイリンのことは大好きだ。

門番の仕事がないときは遊んでくれるし、偶にタイキョクケンを教えてくれる。

だけど、そんなメイリンにもサトルを取られなくなかった…

だから、わたしはサトルに「美鈴とおんなじようにかわいい？」と聞いた。

自分がサトルにどう思われてるのが気になって…

結果的には、サトルはわたしのことをメイリンと同じくらいに思っていてくれていた。

それが嬉しくて、今わたしはサトルに抱きついていてる。

だけど、それでもメイリンにサトルを渡したくない。

だって、わたしはこんなにもサトルが大好きだから…

「…誰も俺に恋愛対象として見てないのが、エロゲと違う所か…」
ん？なんかサトルまた独り言を言ってる…

正直、エロゲで言うのが何かはわからないけど、一つだけ言える気がする…

「サトルの鈍感…」

side 4 (後書き)

これでサイドストーリー第四回は終了です。

それにしても、最初はガンガンに書けたのに、side フランになった途端に五回もやり直す事態になって気づけば第四話から一週間近く経過…

いや本当に幼女っぽい文章がなかなか書けなかったんですよ（言い訳）。そして、連載から早1ヶ月経とうとしているのに、ストーリーが最初の一日目から全く進んでいない始末…

とりあえず今回の解説に入りますが、フランと美鈴は一見一目惚れに見えますが、フランに関しては恋と言うのがまだよく解っていないので、あくまでサトルのことが大好きという認識しかしていません。

美鈴に関しては、あくまで好きになり始めているだけです…てあれっ？コレって一目惚れじゃね？両方とも？

まあこっちに関しては、結構ほのぼのした感じのラブコメになりそうです。

ストーリー上の都合で重度のシリアスシーンが混ざりますが…

パチュリーはカオスです。

こっちの三角関係はサトル、フラン、美鈴の三角関係と違い激戦です。

寧ろ修羅場です。

そして何処まで引きずる！特大真田虫！

最後に今回サトルの使う武器、ファントム アインとファントム ツヴァイが名前だけ登場しましたが、実はまだ何の銃をモデルにするか迷っています…

一応候補はあるのですが、どれも好きな銃なので迷います…

因みに名前の由来は、完全にn i t r o + の処女作、ファントムオ

ブインフェルノの主人公とヒロインからとっています…

まあ去年アニメがやっていて、夏にXbox360でコンシューマが発売するので知っている人は多いと思います。

因みにこのゲームは作者のやった初めてのエロゲだったりします。

それ以来、買ってるエロゲの殆どはnitr0+です。特に虚淵作品は大好きです。

では今回はここまでにしたいと思います。

では…

第五話 魔双銃ファントム（前書き）

すみません。

テストがあつたり、バイトで忙しかったりしてかなり遅れました。お待たせしました第五話です。

一応この小説の独自設定が今回出てきますので先に説明しますが。この小説では吸血鬼は太陽の光に当たっても死にはしません。しかし太陽に弱く、太陽の光を浴びると不死性がなくなり能力が下がります。

更に太陽の光を浴びているときは倦怠感があつたりします。イメージでは月姫のアルクのような真祖みたいな感じですが。それでは長くなりましたが、本編の方をどうぞ。

第五話 魔双銃ファントム

「んっん」

朝だ…

窓から朝日が射し込んでいる…

正直な所、俺は朝が苦手だ…

どうにも頭の回転数が鈍っている感じがしてどうしても好きになれないのだ…

取り敢えず俺は隣でネグリジェ姿で寝息をたてているフランを起すことにした。

「おーいフラン、起きろ」

「うりゅーあと五分」

「いや、そのセリフだと絶対にあと五分で起きないだろ。

ほら、顔洗っちゃおう。

朝飯に遅れたくないし」

「あうーそだね」

そう言っただけでフランは洗面台まで顔を洗いに向かった。

因みに俺の部屋も含めて紅魔館の部屋は、ちょっとしたホテルみたいにトイレとバスルームが備え付けられている。

そう考えてみると、金がなくて風呂無し、トイレ共同のボロアパートどころか、ネットカフェに泊まっている人間が後を絶たないこの世の中。

ある意味異世界とは言えど職アリ、衣食住の心配無し、職場もプラ

イベートも美少女だらけの俺は案外相当な勝ち組なのかもしれない。
まあ元の世界に戻れない＋人間に戻れない以上、この吸血鬼ライフ
をエンジョイするしかないってのもあるけどね。

それにしても…なんかさっきから違和感がありまくりなんだが、な
んでだろ。

「ふーさっぱりした〜」

「すっきりそうかい〜」

……………あれっ？

「なあフラン…」

「どしたのサトル〜」

「なんで俺の部屋にいるの？」

そうだ…なんか自然に居着いていたから気づくのに遅れたけど、な
んでいるんだ？

確か昨日は俺の背中に乗って遊んでいる内にいつの間にか寝てたフ
ランを部屋まで寝かしにいつてから自分の部屋（とは言ってもすぐ
近く）に戻った筈なんだけど…

「だって冬だから一人だと寒いし、サトルと一緒になら暖かいもん」

ヤバい可愛い過ぎる！

というか、可愛い幼女にこんなセリフを言われて萌えない奴は漢じ
やねえ！

だけど同時に嫌な予感もしていた。

可愛い女の子が隣に寝ている。

この紅魔館には俺とフラン以外にも住人はいる。

さらに今は朝。

時間的にそろそろ朝飯の時間。

まさか…

「サトル、ちょっと朝食の準備手伝って欲しいんだけど…」

そう思った時には既に遅いって決まっているのか、予想通り朝食の準備の手伝いを頼みに咲夜さんが部屋に入ってきた。

「あつ咲夜さん…

これはえつとその…」

正直俺はパニックっていた…

当たり前だ…

このパターンで起きるのは、壮絶な勘違いしかないからだ。

最悪ご主人様に手を出したと勘違いされてクビの可能性もあるんじゃないか…？

「フラン様、また慧の所でお眠りになられたのですか？」

「うん！だってサトル暖かいもん！」

……………あれっ？

なんか物凄く普通の反応じゃないか？

というか“また”

「ちょっと！？咲夜さん！？

“また”てどういうことですか！？」

「その事は歩きながら話すわ。」

ではフラン様、少しの間慧をお借りします」

「うん、それじゃサトルーまたあとでね」

こうして俺はなんだか訳の分からないまま、咲夜さんに連れられて食堂に向かうのだった。

「そう言えば言っていましたねそんな事……」

フランが俺の部屋に居たことを咲夜さんが驚かなかった理由は、俺が意識不明だった3日間フランが毎日俺の部屋で寝ていたからという案外シンプルなものだった。

今思い出せば昨日咲夜さんが俺の部屋に入ってきた時に確かに「また、ここにいた」と言っていた。

あの時の俺は、自分がどのような状況にたっているかを把握する事で頭が一杯だったからもう一つの意味までは考えていなかった。

「まあお嬢様も毎日のように私と一緒に寝ているからこれも私達の仕事みたいなものよ」

そんなものなのかねえ

「咲夜く寝れな〜いって言うてくるお嬢様は鼻血が出るほど可愛いし……」

……そっちが本音ですね。
わかります。

そして今の発言で確信した。
やっぱり咲夜さんも俺と同じ（ロリコン）だということを。

「あとサトル」

「何ですか咲夜さん」

「フラン様はいいわ…悔しいけどフラン様はあなたのことが凄くお気に入りようだし（嫉ましい…）。
けどお嬢様だけはあなたには渡せないわ！
それだけは肝に銘じておきなさい！」

……正直、色々と突っ込み満載でどこから突っ込むべきか全くわからないがこれだけは言える。

「咲夜さん…なんかフリーダム過ぎやしませんか…ここ（紅魔館）…」

そんなこんなで準備も終わり、時間をすっ飛ばして朝食タイム。
朝飯は予想通り洋風のもので、昨日の夕飯同様とても美味しい。
因みにメンバーは俺、フラン、レミリア、咲夜さん、美鈴、パチュリーの六人である。

外の世界にいたころは朝飯なんてろくに食った事が無かったが、生活環境が変わったせいか体そのものが変わったせいかはわからないけど、思ったより腹に入るものである。

まあ今日はこの後、生活用品などを買いに行かなきゃいけないので、食わないとつらそうというのもあるのだが…

「サトル、朝食が済んだら私の部屋に来なさい」

朝飯を食っている最中にレミリアがそんなことを言ってきた。

そういえば昨日、当面の生活費（今日の買い物分も含めて）を給料の前借りという形で渡すって言っていたな。

正直、咲夜さんが紅魔館を出る前に渡してくれるのかと思っていたけど…

「実は給料以外にも渡す物があるのよ。

まあ私からの就職祝いってところよ」

就職祝いか…嬉しいことは嬉しいが、レミリアの事だ何か裏がありそうだ。

事実レミリアがこの話をしてから咲夜さんの様子がおかしい。

何というか不安そうな顔をしているのだ。

まあ念を入れておくに越したことはないか…

そう思い、俺はレミリアに真意を聞いてみることにした。

「正直なところ、それを俺にくれる理由は何ですか？」

「ぶっちゃけ面白いことになりそうだから！」

言い切っちゃったよ、この悪魔っこ。

あつそういえば、レミリアはスカーレットデビルの異名を持つ立派な悪魔だったな。

「わかりました。

では朝食後にそちらに行きます…」

「うむ！ よろしい！」

俺の答えに、レミリアは機嫌を良くしたのかそう言った。

きっと自分の思惑通りに事が運んだから機嫌が良かったらうな…

それにしてもさっきからフランが俺の皿にあるソーセージ（魚肉じやなく豚肉）を見ている…

「フラン…食べたいのか…」

俺がそう言つとフランは

「うん！」

と言つて頷いた。

昨日は食事のマナーはレディの嗜みとか言っていたのに、やはりこういうところは見た目相応なんだなと感じた。

「あゝん」

ところでフランさん…

あなたは何をやっているのですか…

「むゝサトルの鈍感！」

れでいがごはんを前に口を開けてたらやることは一つでしょ！」

つまりは食べさせて欲しいと？

正直なところ結構気恥ずかしいんだけど、まあこんなのも悪くないか…

そう思い俺は所謂あ〜んというやつを実行した。

「ほらフラン、あ〜ん」

「あ〜んもつきゅもつきゅもつきゅ、ん〜おいし〜」

そう言つてフランは俺のあげたソーセージを美味しそうに食べている。

うん、鼻血が出そうだ…

「じ〜」

…なんか今度は美鈴がこっちを見ている…

「…美鈴も欲しいのか？」

「えっ？ いやっそういうわけでは…」

「ああ、別に遠慮しなくていいよ。
ほら」

そう言つて俺は美鈴にもソーセージをだす。

美鈴はそれを見て顔を赤くしながら「それじゃいただきます」と言つて食べ始めた。

なんかさっきから顔が赤いけど大丈夫なのだろうか…

やっぱり火を焚いてコートを着させたくらいじゃ意味がなかったの
だろうか…

「いえ…別に風を引いているわけじゃないんですけどね…」

美鈴はそう言ってるけど、あまり大丈夫に見えないんだけど…
そう思っていたら、なんだか回りが一名を除いて呆れた顔をしてい
るのに気がついた。

「えっと…皆さんどうしたんですか…」

「いや…あなたがどうしようも無いくらいに鈍感だということを理
解しただけよ…」

「正直…ここまで来ると一種の病気じゃないかしら…」

「しかも、悪意がないだけ余計にたちが悪いですし…」

「む」

まあ鈍感なのは自分でもわかってるけど、流石に病気は無いだろ病
気は！

あとフランはなぜに怒ってるんだ？

「……はあ……」

だからなんなんだよおおおおお！

こうして、美鈴の顔が風邪でもないのに赤くなっていた理由も、何
故だか途中からフランの機嫌が悪くなった理由も、みんなが俺を鈍
感と言いだした理由も解らないまま今日の朝食は終了した…

朝食後、俺はレミリアの部屋に来ていた。

レミリア曰わく給料以外にも渡したい物があるらしいのだが…

「そう構えなくても大丈夫よ。

別に手にしたら確実に死が訪れるホーブダイアみたいなのをを渡すわけじゃないんだから…」

まあそうは言われても、レミリアの事だからとんでもなくヤバい代物をわざわざ引っぱり出してきても全くおかしくない気がする…

「まあいいわ…

取り敢えずは先ずはお金ね。

言っておくけど無駄遣いしては駄目よ」

そう言われて俺はレミリアから封筒を受け取るって…

「ちょっと！お嬢様！？

コレは初任給で前借りにしては多すぎじゃないですか！？」

俺は驚き、レミリアにそう言った。

それもその筈、レミリアから受け取った封筒には俺の世界でいう諭吉さん（幻想郷ではム力つくことに紫ババアのム力つく笑顔が描かれているが）が四十枚も入っていたからだ。

しかしレミリアはどこが不思議なんだと言つような顔をしてこう言った。

「なに言ってるのよ。

私やフランのお小遣いはこの何倍もあるわよ」

最早何も言えねえ…

どれだけ金持ちなんだコイツ等…

「そんなに驚くほどかしら…まあいいわ、こっちはついでもたいなものだし…」

おいおい…こんな大金渡すのがついでののかよ…

と俺が思っていると、レミリアは机の引き出しから彫刻が彫られ南京錠が取り付けられている木箱を取り出した。

「本当の目的はこっちの方よ」

そう言ってレミリアは、同じく引き出しから取り出した鍵を南京錠に差し込んだ。

バキ

鈍い音がした…

きつと長い間放置されていたから南京錠の方も鍵の方も錆び付いていたのだらう。

……………バキ

しばらく沈黙が続いた後再び鈍い音が聞こえた。

「開いたわ」

そう言ってレミリアは俺に蝶番の部分が破壊された箱を渡してきた。ここは突っ込むべきなのか？

けどここで突っ込みを入れたらいつまで経っても買い物に行けないと思い、俺は箱を開ける事にした。

「こいつは…」

箱の中に入っていたのは二丁のエングレーブの彫られた拳銃だった。一つはシルバーマトリックのリボルバーで、おそらくコルトパイソンの6インチをベースとしているのか重厚ながらも銃身の上部のベンチレーテッドリブと下部のカウンターウェイトのバランスに加え炎を模したエングレーブが彫られていることによって全体的に美しく見える。

もう一つは黒いオートマチックで、デザートイーグルをベースにしているせいかとにかくでかくてゴツい。

しかもパイソンの方と同様にこの銃にも銃身に炎を模したエングレーブが彫られているのだが、そのゴツい見た目と黒いカラーリングからパイソンとは対照的に禍々しく凶暴なイメージである。

だけど、俺も本物の銃を持つのは初めてなのだが、この二丁は洒落にならないくらいに良い銃だということが見るだけで解る。

「お嬢様： 本当に良いんですか？
こんな良い銃を貰ってしまっ…」

俺は、流石に就職祝いにしては良すぎるぞコレと思っていたのだがレミリアは…

「構わないわ。
今までずっと武器庫に放置されていたやつだし…
それにあなたがそれを持つのは運命だし…」

と言った。

俺がこの銃を持つ運命か…
なんか格好いいな！そういう展開！
けどちょっと待て…

レミリアは俺がこの銃を持つ運命だと言った。

と言うことはこの銃は俺の運命に少なからず影響を与える物なんじゃないか？

そう思い俺はレミリアの方を見た。

予想通りレミリアは相変わらぬ何か企んでいるような笑みを浮かべていた…

「お嬢様…この銃って一体何なんですか…」

俺はレミリアに聞いてみることにした。

まあ十中八九やばい代物で間違い無さそうだけど…

「その銃の名前はリボルバーがファントム アイン、オートの方がファントム ツヴァイと言ってかなりの強力な力を持った魔銃なんだけど、手にした者の殆どが沢山の人間を殺した後直ぐに死んだと言われているわ。」

まああなたなら大丈夫でしょうけど」

とレミリアは言った。

ふーんこの銃アインとツヴァイと言うのか…ってちょっと待て！

「うおい！大量殺人の後に直ぐ死亡って完全に呪いの銃じゃねえーか！」

しかも周りの人間を巻き込んでる時点でホープダイアより遥かにやばいし…

「だから大丈夫よ。」

呪いなんて人間の中で噂になったデマみたいなものだし、あなたはもう吸血鬼なんだから人間に対しての呪いなんて効くはずないでしょ

よ
」

確かに考え見たら人間に対する呪いが吸血鬼に効くとは思えない。
しかし、やっぱり不安なものは不安である。

「まあ呪いの事を除けばこの銃を気に入ってるんだから、当分の間
試しに使ってみたらどうかしら？」

レミリアの言うとおり、確かに俺はこの銃を気に入っている。
それにまだ幻想郷に来たばかりで、弾幕は撃てるがいまいち弾が安定
しなから武器があると正直安心出来る。

「確かに、物は試しで使ってみるのも面白いかもしれませぬね」

そう言うて俺はレミリアからアインとツヴァイを受け取った。
しかし俺は受け取った銃を見てあることに気がついた。
あれっ？

アインに入ってるこの銃弾：よく見たらダミーカートじゃないか？
そう思つて調べてみると確かに銃弾には様々な彫刻が彫られている
が火薬が入っている様子はない。

まさかと思いツヴァイの弾倉も引き抜いてみたが、弾が入っている
どころか弾倉自体が彫刻が彫られているだけのただの黒い箱だった。
正直、弾の入っていない銃でどうやって戦うんだよと俺が思つてい
ると…

「取り敢えずその試し撃ちついでに外に出るわよ！
その時に使い方も教えるわ」

とレミリアが言った。

「いや…一応銃の使い方はわかるんだけど…」

銃の使い方を教えると言ったレミリアに対して、俺はそう答えた。正直、使い方よりもこいつの弾について聞きたいんだけどと言おうとした。

しかし、レミリアは…

「いいから来なさい！」

そう言っただけでそのまま玄関まで行ってしまった。

まあきつと弾の事も説明してくれるのだろう。

そう思い、俺も外に出るために玄関に向かうことにした。

玄関に着いたらそこにはレミリア以外にも咲夜さんもいた。

きつとレミリアに言われて、試し撃ちのセッティングをしていたんだろうな。

實際庭に出てみると、五メートル程先の台の上に煉瓦や何故だか罪袋の絵が描いてある板が並べてある。

イメージとしてはお祭りの射的の屋台みたいな感じだ。

まあ屋台と違って結構距離があるけど…

「じゃあ慧、そろそろ始めるわよ。」

早速だけど銃に魔力を通してみなさい」

レミリアに言われて俺はアインとツヴァイに魔力を通す。

昨日フランに能力について教えてもらって解ったのだが、俺は触れている物に魔力を通すことでその物を発火させる事が出来る。

そしてフランはそれを応用すれば魔導具に炎の力を加えられるって
言っていたけど…本当に大丈夫なのだろうか…

「へえ…初めてにしては上出来ね」

どうやらその考えは杞憂だったようだ。

いつの間にかアインとツヴァイに彫られたエングレーブが赤く光り
出していたのだ。

発火していないところから無事に魔力は通っているのだろう。

「うん！それだけやれば十分ね。

これでアインとツヴァイのカートリッジに魔力が溜まった筈よ」

レミリアにそう言われて、俺はアインの弾倉を調べてみる。

確かにアインに装填されているカートリッジの彫刻も赤く光っている。
る。

おそらくツヴァイの方も同じだろう。

そこで俺はようやく理解した。

この銃はカートリッジに魔力を溜めて弾幕として打ち出す事が出来る
ということに…

「それじゃあ次「ドガガガガガガガガ！！」ってええ！」

俺はレミリアの説明を無視して早速試し撃ちを始めていた。

本音を吐くと、実はさっきから早く撃ちたくてうずうずしていたの
だ。

まあ銃好きの性というやつなのだろう。

銃なんてものは基本は照星と照門をしっかりと合わせて、ちゃんとし
た姿勢で撃てば大概は当たるモノである。

特にアインとツヴァイは命中精度の高いコルトパイソンとデザート

イーグルをベースにしてあるため止まっている物なら全弾外すなんてことはこの距離なら皆無だろう。

事実順調に煉瓦や板に命中させている。

「……………（驚きで啞然としている）」

「……………（同じく驚きで啞然としている）」

それにしてもさっきからレミリアと咲夜さんが無言だ。

まあきつと普通過ぎて面白くないんだろうな…

ならばと思い俺は罪袋の絵の描かれた板を一枚残して一旦銃撃を止める。

そして一気に接近してツヴァイの銃身の上部で板を殴りつけた。

しかしまだ終わらない！

更にその勢いを利用し体を捻りアインのグリップの下部で殴りつける！

そしてそこからローキック、回し蹴りと繋げ更に蹴り上げで板を打ち上げる。

更にその打ち上がった板をアインとツヴァイの銃撃で下からひたすら撃ちまくる。

そしてトドメに板が落ち始める寸前で…

「うおりやあああああ！」

バキッ

空中かかと落とし（ムーンサルトキック）でフィニッシュ！

さしずめ見様見真似の我流銃型^{ガンカタ}てところか…

まあ吸血鬼化してなかったら絶対出来ないけど…

「以上、秋山慧の我流銃型でした…ってありや？」

ちよつとくらい拍手や歓声が聞こえてくるかな…なんて思って、俺は後ろを振り向いた。

しかしそこには、相変わらず無言のレミリアと咲夜さんがいるだけだった。

流石に妖怪相手じゃコイツはつまらなかったかな…

「あつ……………」

「んっ？」

なんかレミリアが震えてるな…

寒いのかなと思っていたら…

「慧！何なのよさっきの連続攻撃は！

それにあなた何勝手に撃ち始めてるのよ！」

冬の寒空の下、レミリアの怒鳴り声が響いた。

こりゃあ面白い物の前にお説教かな……………」

第五話 魔双銃ファントム（後書き）

これで第五話終了でございます。

いやゝ相変わらずの駄文ですorz

今回魔双銃ファントムの全貌が明らかになりました。

アンケートをくださった方々、本当にありがとうございました。

因みに今回ファントムアインをコルトパイソン、ツヴァイをデザートイーグルにした理由はアンケート以外にも色々あります。

先ずアインのほうのコルトパイソンなのは二つあり、一つ目がこの銃の元ネタであるファントムと言うゲームのヒロインのアインが愛用しているということ。

二つ目が私自身の一番好きな銃がコルトパイソンだということです。次にツヴァイがデザートイーグルなのは、先ずコレもファントムで主人公が使う銃（と言ってもこのゲームは使える銃を選べるのですが…）の一つで、初使用のシーン（コレに関しては実際にやってみるか、角川で出ている小説版をお読みください）のインパクトがすごかったということ。

二つ目にこの時点でアインをコルトパイソンにする事は決めていたので、後に理由は説明しますがオートマチックの銃にしたかったということ。

そして最後にコレは結局最後まで悩んだのですが、ベレッタにするかデザートイーグルにするかで悩み、悩んだ末にコルトパイソンと対局のイメージになると思いデザートイーグルになりました。

因みにリボルバーとオートマチックの二丁拳銃の理由はデモンベインの主人公大十字九郎をイメージしたからです。

正直、オートマグ？とかコンテNDERとかワルサーP38とかも使ってみたかったです…

さて明日は待ちに待ったコミケです。

しかもニトロのブースで村正の公式アンソロ（見た感じファンデイ

スクっぽいですが、がでるそう、今からわくわくしています。

では今回はこの辺で、失礼いたします。

次回の予定は来週を予定していますが、今回みたいに大幅に遅れる可能性もあります。

第六話 香霖堂（前書き）

少し遅くなりましたが、第六話です。

今回慧がスペルカードを使います。

あと少しだけ東方とは全く関係ない作品のキャラが少しだけ出てきます…大丈夫かな…

第六話 香霖堂

よっみんな！

俺慧！

突然だけど、背水の陣で言葉知ってるか？

まあ簡単に言えば絶体絶命とか逃げられない状況で全力を尽くすって意味らしいけど…

えっ？前にも似たような感じで質問したって？

まあそれもそうだろう…

ドガガガガガガガガガガガガガ

「畜生！何でこうわらわらわらわら際限なく出てくるかな！
うわっ！なんか弾幕出してきたし！」

この通り今大量の毛玉（東方の本家で出て来る毛玉状の雑魚敵）に襲われている最中なんだよ！

何でこうなったかって言うと今から一時間くらい前…

レミリアを無視して試し撃ちをし始めた事で30分程レミリアに説教をされ、ようやく解放され咲夜さんに紅魔館の近くで色々な物が売っている店を教えてもらいそこに向かっている時だった。

俺はまだ幻想郷の詳しい地名がわからないから予想になるけど多分魔法の森の上空を飛んでいた時だと思う…

えっ？何で吸血鬼になったばかりの俺が飛べるのかって？

そりゃあ

昨日フランにしごかれましたから！

可愛い顔してやるのが某軍曹並みにハードなんですよあの子！

とまあこういう事があったから飛べるようになったんだけど…

兎に角俺は普通に魔法の森の上空を飛んでいたわけだ。
なのに…

奴らいきなりブワッと大量に湧いてきやがって！

まあこうして今現在の乱戦状態に陥るわけだ…

しかしこの状況は結構ラッキーなのかもしれない。

試し撃ちをして、ある程度アインとツヴァイの使い方になれたとい
ってもそれは所詮は動かない相手を的にした場合だ。

だからこの状況は動く相手に対する戦い方の良い練習になりそうだ。

それが大体30分前…

現在は…

わらわらわらわら

ドガガガガガガガガガガガガ

わらわらわらわら

減らねえー！

一向に数が減らねえーよ！

確かにいい練習相手だと思ったださ！

けどこう潰した先からわらわら出てこられたら目的地に着く前に魔
力が尽きてフルボッコにされるわ！

けど本当にどうする？

はつきり言っこのままじゃ冗談抜きでヤバイ。

何かあの毛玉を全滅させなくてもこの群を突破できる方法がないだ
ろうか…

そんなことを思っていたらふと俺はスペルカードのことを思い出し
た。

確か昨日作った三枚の中の一枚に群れを突破できそうなやつがあっ

たな…

俺はポケットの中に入れていたそのスペルカードを確認する。
よし！コイツならイケる！

そう思った俺はスペルカードの名を叫んだ！

「スペルカード『炎符「トツプガン・ドライブ」』！」

その瞬間俺の体は炎に包まれた！

そして毛玉の群れに突撃して毛玉達をなぎ倒しながら更に前へ突撃していく！

炎符「トツプガン・ドライブ」

俺のスペルカードの一枚で最も最初に考えたスペルである。

コイツは全身に炎を纏いその炎で推進力を作り出し敵に突撃するスペルだ。

まあぶっちゃけポ○モンのフレ○ドライブの空中版だ。

けど戦闘機が出てくる映画のタイトルを使ったただけあって、戦闘機のようなスピードで空を飛び相手に突撃するのは結構格好いいものがある。

そう思っているといつの間にかあれだけ沢山いた毛玉がいつの間にか消えていた。

どうやらトツプガンドライブで飛んでいる内にいつの間にか俺は毛玉の群れから脱出していたようだ。

それにありがたい事に目的地の方もようやく見えてきた。

香霖堂：魔法の森の入り口に建つ道具屋。

様々な種類の物を扱っており、おそらくこの幻想郷で唯一外の世界の道具が置いてある店である。

そういうこともあって、服などは人里より格好いいデザインのものがあるかなと思いついたのだが…

なんとまあアレか？

ゴミ屋敷ってやつか？

店の前にはタイヤとか一輪車とか狸とかヤゴコロとか赤い鋼鉄製の蜘蛛「御堂」どこってそもそもここ何処よ」……………今の
は見なかったことにしよう…

まあ兎に角訳の分からない物が沢山転がってる。

一応、香霖堂に関しては外の世界にいた時からある程度は知っていたし、店の前に沢山のガラクタがあることも知っていた。

しかし、聞くのと実際に見るのでは随分と違うものである…

求聞史紀で香霖堂の店主である森近霖之助は商売をする気がないって書いてあったけどこの状況なら納得だ…

「本当に大丈夫なのか？

この店…」

正直な所かなり不安である…

だけど咲夜さん曰わく置いてある物に関しては良い物だそうだし…

まあ物は試しに見ていくのも悪くはないだろう。

そう思い俺はドアを開けた。

「買わないか？」

俺は急いでドアを閉めた。

なんだ今のは？

ドアを開けた先になんか禪姿のマツチヨなメガネが居た気がしたんだけど…

きつと幻覚だな。

最近色々ありすぎて疲れてたのに加えて、魔法の森の近くだから幻覚茸の胞子でも吸っちゃったんだろう。

そもそも禪姿で客商売ってどんだけ仕事する気がないんだよ。

てか変態だし…

正直有り得なすぎる…

そう思い俺は再びドアを開けた。

「買わないか？」

よし人里で買い物しよう！

俺は自分が見た物が間違いなく現実だと理解すると、直ぐにドアを閉めようとした。

しかし…

「まっ、待ってくれ！

これは冗談なんだ！」

そう言つて禪男（多分コイツが森近霖之助なんだろうな…）は閉めようとしたドアを手で防ぎ、あるうことが俺の手を掴み無理やり店に引き込もうとしてきた！

「勘弁してくれー！

俺はノンケなんだよー！

誰かー！誰かー！

助けてー！」

「だから違うって！

話を聞いてくれー！」

禪男が何か言ってるが正直怖い！

俺は必死になつて逃げようとした！

だが…

バキッ

「あつ……」

どうも今日の俺の運勢は最悪だったらしい……

逃げようと必死になり足に力を入れすぎたらしく床板を踏み砕いてしまい、更にその勢いで前のめりに倒れてしまった。

勿論禪男がその隙を逃す筈もなく、俺は結局店の中に引きずり込まれてしまった。

「畜生！

こんななんだつたら毎朝7時の星座占いを見逃すんじゃないかっ！」

そもそも幻想郷にテレビなんか無いのも忘れ俺は叫んだが、助けなんて来る筈もなく、無情にも……

ドアは……

ゆっくりと……

閉められた……

b a d e n d ……

……………なわけあるか……！

店に引きずり込まれた後禪男は久し振りに客が来たからつついり知り合いだと思いき悪乗りしてしまったと説明してきた。

正直知り合いでも禪一丁でく○みそテクニクのネタをやられたら危機感を覚えると思うんだけど……とも考えたが話してみると案外マトモで信用できる人（？）だということがわかった。

まあいきなりビビって逃げ出そうとした俺にも悪いところはあったんだけどね…

「それにしても君も災難だったね。

まさか紅魔館の悪魔の妹の部屋に落とされるとはね。

しかも吸血鬼になって帰れなくなっただけだし…」

「いや、本当にあの時はマジで死ぬかと思ったよ…」

けどあそこに落ちたから能力が発現したり、フランや美鈴達に会えたんだけどね。

それに最初は吸血鬼になったって聞かされて驚いたけど、体とか人間の時に比べて随分と軽くなったし今じゃ結構悪くないと思ってる。

「

というわけで買い物をするばかりさっきから世間話（主に俺の幻想郷に来るまでや今に致まで）で盛り上がっていたのだが、流石にそろそろ目的を果たさないとマズい。

というか遅くなったらお姫様^{フラン}がキレル。

「こーりん。

そろそろ買い物しないとマズいから…

まずは服を買いたいんだけど何処にある？」

俺は話を切り上げてこーりんに服の置いてある場所を聞いた。

「服かい？

服ならその棚にあるのと、壁に掛けてあるのがあるよ」

そう言っでこーりんはその場所を指で指した。

因みに俺がこーりんと呼んでいるのは本人がそう呼んでくれと言っ

たからだ。

兎に角俺はこーりんが指した所を見てみた。

確かに咲夜さんの言うとおり物は古いけどなかなか良い服が揃っている。

正直どれにしようか迷うぜ。

そんな事を考えながら見ていると、ふと俺は壁に掛けてある服に気がついた。

それはファアのついた黒地のシンプルなレザージャケットだった。

イメージとしてはF〇8のス〇ールが着ている感じのやつだ。

それにこのジャケット俺が外の世界でのお気に入りのジャケットによく似ている。

これはもう買うしかねえ！

そう思った時には、既に俺はこーりと交渉していた…

その後、先程のレザージャケットの他にそれに合いそうな服や、半袖のレザージャケット、更には銃を入れておくホルスター（腰につけるタイプ）やその他の生活用品や雑貨など（小型の蓄音機やレコード（ロックやジャズ））、アクセサリ（シルバーはマズいので外の銀系統の色の金属）等も買ったたりして、気付いたら先程レミリアから貰ったお金が四分の一程減っていた…

流石に買いすぎたかな…

それにこれどうやって持っていこう（主に蓄音機とレコード）…

「取り敢えず…蓄音機や服とかは破れないような袋に入れておくよ…あと沢山買ってくれたサービスに鞆をあげるからレコードはそれに入れとくといいいよ」

そう言ってこーりんは紐の長いエコバッグみたいなものを渡してきた。

なんかデフォルメされたこーりんの絵と香霖堂の文字がブロック体で描かれている。

因みに俺の今の服装は先程買ったレザージャケットとそれに合わせた服装になっている。

「なんか最近外の世界で流行ってるんだって？
こういう感じの鞆を配るの」

まあ確かに流行っていたのかもしれない。
実際色んな所で配っていたりしてたし…

「それじゃありがたく貰っていくよ。
けど悪いな…色々手間とらせちゃって」

「別に構わないさ。

それに僕としても結構楽しかったよ。

慧とは結構話が合うしね。

だからここにはいつでも来てくれて構わないよ。

正直大歓迎さ」

正直、こーりんの言葉は俺としても結構嬉しかったりする。

確かに幻想郷に来て可愛い女の子に囲まれてイヤッホーな気分ではあるのだが、周りに話が合う同性がいないというのは結構辛いモノがある（因みに俺はホモではない）。

だからこーりんがいつでも来てくれと言ってくれて嬉しかったのだ。

「人里まで酒を飲みに行くのも悪くないぜ。

まあ取り敢えずもう少しこっちの生活が落ち着いたらまた来るよ」

「それもそうだね。

それじゃ道中気をつけなよ。

さつきみたいに毛玉の群れに襲われないようにね」

そんなこーりんの台詞に苦笑しつつも俺は感謝し…

「ああ大丈夫だ」

とだけ言っただけ言っただけのまま真っ直ぐに紅魔館へ帰ることにした。
それにしても本当にこの荷物を持って飛べるんだろうか…

side 森近 霖之助

「ああ大丈夫だ」

そう言っただけで彼、秋山慧は真っ直ぐに紅魔館へ帰って行った。

正直変わった男だ。

しかしあのサッパリした性格や雰囲気は僕からしては結構好印象だった。

それにこれからまた賑やかになると考えると、なかなか嬉しいものがある。

この店、香霖堂は魔法の森の入り口にあるといっても途中で妖怪も出るため、ここに来る人はそこその実力のある人のみになるため客は決して多くない。

だからこそ新しく客が増えるのは嬉しいし、特に彼とは話が合う為また彼が来るのが楽しみだ。

バンッ

「コーリーん！」

何かどこかい袋が空を飛んでたんだけど、何なんだあれは？」

突然店のドアが勢いよく開かれ、黒白の魔女のような格好の女の子が入ってきた。

彼女の名前は霧雨魔理沙。

僕が昔働いていた人里の道具屋、霧雨道具店の娘で僕にとっては妹みたいな存在だ。

まあ現在は魔法使いになるって言って家出して勘当同然の状態らしいけど…

「魔理沙…

何時も言っているけどドアは静かに閉めてよ…

この間新しくしてもらったばかりなんだしさ…」

「別にいいじゃんかよ」

細かいこと言っていると女の子にモテないぜ！」

正直事実を言っただけで女の子にモテなくなるのかわからないけど、どうやら魔理沙に直す気はないらしい。

「はあ…

で今日はどうしたんだい？

なんか一週間振りだけど、また八卦炉が壊れたかい？」

「いや、だからでかい袋が空を飛んでたんだって！
一体なんだったんだあれ？」

どうやら魔理沙は袋を背負って飛んでいる慧を袋が飛んでいると勘違いしたらしい。

まあ彼は男にしては身長が低い方だし、服とか色々買っていて大きくなくなった袋で隠れてしまったのだろう。

「ああ魔理沙が見たのはさっきまでここにいた外人だよ。色々買っていたから荷物も多くなっちゃったんだよ」

「外人？

外人人にしては随分と沢山の荷物だったけど…」

魔理沙の疑問ももつともである。

事実外人人の殆どは幻想郷に長居はしない。

まあ帰る場所があり帰れるんだから当たり前何だけど…だから外人人はあまり物を買わなかったりする。

「ああ彼…秋山慧って言うんだけど、どうも吸血鬼になったりして帰れなくなったらしいよ。

だから新生活の為に色々買っていたんだよ」

そう、外人人の中には人外が存在になったり能力を発現したりなどして外に帰れなくなる者もいる。

まあ慧のように吸血鬼にされるパターンはかなり珍しいけどね…

「あ……………」

そこまで考えたところで僕は自分の失敗に気がついた…

魔理沙にこの手の話はマズい！

魔理沙は面白そうなことや自分の興味を持ったことに関しては直ぐ

に首を突っ込むタイプの人間だ。

しかも外来人にして吸血鬼である慧に魔理沙が興味を持たない訳がない！

そう思い魔理沙を見てみると…

やはり何か悪巧みをしているようにやけ面をしていた。

「へえ、また新しい外来人が来たのか…

しかも吸血鬼ってことは紅魔館か…

明日になったら本を借りにいくついでにちょっかいで出しにいくか！」

ああ予想通り行く気満々だよ…

こうなった魔理沙はもう僕には止められない…

（はあ、慧…なんか明日になったら厄介事がおきるかもしれないけどなんとか頑張ってくれ…）

僕は今ここにいない、なったばかりの友人に対して薄情かもしれないがそう願うことしか出来なかった…

第六話 香霖堂（後書き）

これで第六話お終いになります。

それにしても前回投稿した話を見直してみたら物凄く酷かったです…
まあ1ヶ月振りだったので仕方ないんですけどね…理由付けです済みません…

今回は多少はマシになっていると思います。

第六話の話になりますが紅魔館以外のキャラがようやく出せました。
正直紅魔館以外のキャラはこーりんにするかチルノ＆大ちゃんにするかルーミアにするかで結構悩みました…あれ？なんかこーりん以外がロリじゃね？

まあ私がロリコンなのでチルノとかになると確実にヒロイン扱いになるので最終的にこーりんになりました。

ヒロインに関しては第二章でもう一人増える予定です。

因みにロリです。

えっ？ロリコン？

最高の誉め言葉です。

あと前回説明し忘れていたのですが、慧の二丁拳銃であるファントムはアインの方が速度が速くて威力の低い弾幕を出し、ツヴァイの方が威力はあるけど速度が遅い弾幕を撃つという設定だったりします。

では今回はここまでになります。

それにしてもあの赤い金属製の蜘蛛は出しても大丈夫なのだろうか

…

s i d e 5 (前書き)

今回は新衣装の御披露目とパチュリーの陰謀の二本です。
相変わらずパチュリーが暴走しています。

side 5

「おゝ！もふもふだゝ！」

「あら、意外に似合ってるじゃない？」

「慧さんすごく格好いいです！」

紅魔館に戻ったあと、早速の新しい服の御披露目となった。

まあこの反応からわかる通り、評価はなかなか上々だ。

けどフラン…ファーがもふもふして気持ちいいのはわかるけど、そろそろ降りてくれ…

なんか色々当たって「あててるの！」左様ですか…って一体どこで覚えたのその言葉！？

あと美鈴、嬉しいけどそこまでストレートに言われると照れるぜ…

因みに何故美鈴がいるのかというと、単に休憩時間だからである。

あと咲夜さんは仕事、パチュリーは図書館に引きこもっていて今ここにはいない。

「けど慧さん、一つ聞いて良いですか？」

いきなり美鈴が少し困った顔をしてそんな事を聞いてきた。

「良いけど、どうしたんだ？」

「ふと思ったんですけど…」

私みたいに門番だけやってるならその服装でも問題なさそうなんですけど、確か慧さんって門番以外の仕事もやりましたよね…

そついう仕事の時は動きづらくないですか？」

「珍しいわ…」

美鈴が真面目な事を言ってる…」

美鈴の質問に対してレミリアがそんな事を言った。

結構容赦ねえなおぜう…」

「お嬢様酷い…」

それでも頑張ってるのに…」

「そういう台詞は昼寝をしないようにしてから言いなさい。

実際さつきも咲夜にナイフを投げつけられたでしょ」

確かにレミリアの言うとおり、美鈴の被っている人民帽（星に龍の字の入ったあの帽子）にナイフが突き刺さったような跡と血が付いている。

それにしても帽子に穴と血が付いてるってことは頭に刺さったってことだよな…

人間だったら普通に死んでるぜ…

「まあ美鈴が仕事中に昼寝をする事に関しては今は置いとくとして、確かに美鈴の言うとおりこの服じゃ仕事がい辛いけどちゃんと対策はしてあるぜ！」

そう言っただけ俺は着ていたジャケットを脱ぎ、袋からあるものを出しそれを着る。

「どうだ！

これなら問題ないぜ！」

「……………」

「……………」

「サトル…それってエプロン？」

そう、フランの言うとおり俺が今着ているのはエプロンである（色は赤）。

勿論頭には赤いバンダナを巻いて、髪の毛に対する対策もバッチリだ。

「なんと言つか…」

恐ろしいほどに似合ってますね…」

「そうね…」

それにしても着慣れてるわね…」

あなたまさかその年で子持ちって事はないわよね…」

「「えっ!?!」」

「いやいや、流石に子持ちじゃないって！

着慣れてるのは単に外の世界で家事とかが俺の担当だったからだよ」

なんだか素敵勘違いをしているフランと美鈴に俺はそう説明した。というか明らかに俺は子持ちには見えないだろ。

「ふゝん外の世界も大変ね。

それよりも慧、私からも一つ聞いてもいいかしら？」

突然レミリアがそんな事を言ってきた。

もうこれ以上話題なんてあったか？
とそんな事を考えていると…

「この蓄音機とレコードとアクセサリーは完全にあなたの趣味の物
よね？」

「……………」

ヤバイ…

つい衝動買いしちゃったけど、やっぱり駄目だったみたいだ。
不味いな…

コレはまた説教タイムか…

「言ったわよね…」

無駄使いはだめだって…」

「いや、なんと言うか…」

偶然好きなバンドの古い曲見つけちゃったり、今まで着けてたシル
バーが駄目になったからなんか手が寂しく感じちゃったりしまして
…」

取り敢えず俺は言い訳を試みることにした。

まあこんなんで説教を回避できるとは思えないけど…

「言い訳はそれだけ？」

やっぱり駄目でした…

結局このあと再びレミリアに説教される俺なのであった…

side 十六夜咲夜

同時刻 紅魔館グワル図書館

「咲夜、頼んだ通り慧に香霖堂の場所を教えてくれた？」

「はい…」

ですが、本当に大丈夫なんですか？」

「ええ大丈夫よ…」

これであの店主は魔理沙に慧のことを言う筈…

そしてあの魔理沙のことだ。

外来人にして吸血鬼である慧に興味を持たない訳がない。
なら来るとしたら明日。

ついでに図書館の本も盗みに来る筈。

その時にさっき完成したこの催淫惚れ薬を飲ませれば…

うふふふ…

完璧よ！

どこにも隙のない完璧な作戦よ！

これで魔理沙は私のモノ。

魔理沙は私と一緒にこの図書館で永遠にあぐんなことやごうんなこと
とをし続けるのよ！」

なんかパチユリー様、
最近色々と凄まじいわね…

それに喘息はどうしたのだろうか…

けどただ一つ言える…

魔理沙、今回はかりは同情くらいはしてあげるわ…

side 5 (後書き)

第5回サイドストーリーこれで終了です。

正直、今回は次回の第七話への繋ぎの話なので、あまり面白くない筈です(と言ってもそもそも私の小説が普段から本当に面白いのか自分ではわからないのですが…)。

先ずオリジナルの設定の解説ですっかり書き忘れていて、まあ皆さん解っているとは思いますが…

真田虫で催淫惚れ薬は作れません！

だから好きな子がいてもそんな得体のしれないモノを作ったり、飲ませたりしてはいけません！

次に三人目のヒロインですが、現在翠香と小悪魔と諏訪子で悩んでいます。

しかもそれに追加して一度はボツにしたルーミアルートやチルノルート、魔理沙ルートまでやりたくなっている状態です。特にルーミアルートは大まかなシナリオは考えてあるので、かなり悩んでいます。

最後に次回第七話の予告です。

次回はようやく魔理沙との対決開始です！

一応、慧の持っているスペルカード三枚の内の残り二枚はこのバトルで出ます。

この話は私が東方紅蓮録に置いて最も書きたかった話の一つであり、結構テンションが高くなりそうです。

取り敢えず現在は前、中、後の三回に分ける予定ですが、全部一話にまとめたり、普通に前編、後編で分ける可能性もあります。

それにしても、最近フランの出演が少ない気がします…

まあ魔理沙戦が終わればフランメインの話になるんですけどね…

では今回はここまでになります。

また次回お会いしましょう。

第七話 紅蓮の二丁拳銃 前編（前書き）

少し予定より遅れましたが第七話です。
今回は前編後編に分かれています。

第七話 紅蓮の二丁拳銃 前編

ああ…

ドガガガガガガガガガガガ！

ああ…

ドガガガガガガガガガガガ！

「くっ、初めてのスペルカードバトルにしちゃあかなりやるじゃないか！

ただどこいつならどうだ！

魔符「スターダストレヴァリエ」！！」

バラバラバラバラバラバラ！！

ああ！！

「すげえ、このタイミングでスターダストレヴァリエも避けられるってどんだけだよ！

お前本当に吸血鬼なりたてなのかよ！？」

ああ！！

最高だ！！

これが本気のスペルカード戦か！

フランが大好きなものも今ならわかる！

これは血がたぎる！

それに俺の中の吸血鬼としての本性が戦えと命令してくる！

「コノ気分がが最高じゃなければ、なにが最高なんだ！
正に最高にハイってやつだ！！」

「なら、こつちも全力でやってやるぜ！！」

「上等！」

「こつちもブルファイトの方が性に合うんでな！
そつちがその気ならやってやるさ！！」

「「スペルカード！！」」

「炎符「ヴァーミリオンノヴァ」！！」

「恋符「マスタースパーク」！！」

「十時間前」

俺が香霖堂に行ってから一日が経過した。

結局あの後レミリアに俺の無駄使いに関して説教をされたのだが、
フランが蓄音機に興味を持った（フラン曰わく初めて見るらしい）
ため彼女に弾幕ごっこ以外のことに興味を持たせるいい機会ということ
で俺の部屋に置かせてもらえることになった。

事実昨日の夜もフランと俺は夕飯の後に買ってきたレコードを遅く

まで色々と聴いていた。

しかし結局そのままフランが寝てしまい、フランを部屋まで（しつこいようだが俺の部屋の前）寝かしに行ってから咲夜さんの手伝いをした後に自分の部屋で寝た筈なんだが…

「くゝむにやむにや」

「やっぱりこうなるのな…」

まあ皆さん察しの通り本日も隣で寝てる訳ですよフランが…

けど正直俺が目覚ましてから、フランが隣で寝ているという状況はこれで三度目なわけだからもうそんなに驚きはしない。

というより下手したらこれから毎朝このパターンの可能性だってあるわけだから、いい加減慣れないと俺の精神が保たない…

兎に角、時間はまだ早朝五時。

とは言っても、俺や咲夜さんや美鈴は仕事があるため起きなくてはならないが、フランやレミリアにはまだ早い時間だ。

それにこんなに気持ちよさそうに寝ているフランを起こしてまで部屋に戻すのもなんだか可哀想な気がする。

そう思った俺はフランを起こさないように気をつけながら支度をし、仕事をしに行くことにした。

まあ起こす時間になったら、フランの世話は俺の仕事（とは言ってもあまりの仕事とは思っていない）な訳だから俺が起こしに行くわけだし問題ないか…

とまあそんなこんなで始まった俺の幻想郷での使用人ライフ（昨日までは手伝いはしていたが、まだ正式には使用人じゃなかったから

今日から)。とは言っても、やることは昨日とあまり変わらない。せいぜい朝早くから仕事（主に朝食の準備など）をやるのと門番の仕事が追加されただけで、フランの世話は目が覚めてからは毎日やっているようなもの（しつこいようだが俺はこれに関しては仕事とは思っていない）だし、なんだかんだで咲夜さんの仕事も一昨日から手伝っていたためあまり変わった気がしない。

「そんな事言つてると、突然何かおきたら対処できませんよ」

そう美鈴は言っているが、30分前に俺が来るまで居眠りしていたためその台詞には全く説得力がない。

そんなわけで俺は今門番の仕事をしている。

現在時間は大体昼過ぎくらいである。

え？

なんでさっきまで早朝だったのに急に昼過ぎなんだって？

キングク○ムゾン（笑）でそれまでの時間が吹き飛んだからだ！

とまあメタな発言は置いておいて、実は今やっている門番の仕事は急なものであったりする。

本来なら今日はフランの世話と咲夜さんの手伝いをする予定だったのだが、11時過ぎにレミリアに呼び出されて急に昼過ぎからは門番の仕事をしろと言われたのだ。

まあ可愛い娘の世話をするのも悪くないが、可愛い娘と一緒に仕事をするのも好きな俺としては文句は無い。

しかしレミリアはこうも言った：

…「あなたの实力を見るいい機会だし」…

………これって確実に何か来るよね？

「はあ」

「どうしたんですか、ため息なんてついて？」

「いや、この後弾幕ごっこになるって考えると不安でさ」

「大丈夫ですよ。」

慧さんは人間の時にフラン様と戦って無事に生きていたんですから、吸血鬼になった今なら大抵の妖怪なら倒せますよ」

美鈴はそう言ったがやっぱり不安である。

そもそも俺は吸血鬼になったばかりで魔力のキャパシティも精々妖精よりも少し高い程度（咲夜さん曰く）である。

そしてそのせいで弾幕の威力が安定しないからアインとツヴァイを使って安定させてようやくマトモに戦えるようになっていく状態である。

まあ考えても仕方ないか…

きつとなるようになる！

それはそうと…

「なあ美鈴、そのコートで確か…」

「はい！

一昨日慧さんがくれたですよ。」

そう、美鈴が上に着ていたのは俺が一昨日あげたあのコートだった。

「このコート凄く暖かくて貰ってから毎日外に出るときは着てるんですよ」

「正直、喜んでもらえてこっちも嬉しいよ。
それに凄く似合ってる」

俺がそう言うのと美鈴は顔を真っ赤にさせて「はわわわわ」と言っ
て俯いてしまった。

何だか美鈴はしょっちゅう顔を真っ赤にさせている気がする…
高血圧なのだろうか？

だとしたら後で咲夜さんに相談しよう。

まあ妖怪も心臓病とかみたいな高血圧が原因で起きる病気になるか
はわからないけど…

「いえ…別に高血圧とかじゃないんですが…
それに慧さんは鈍感すぎますよ…」

なんかまた鈍感と言われたよ…

「む、それでも勘は鋭い方だぞ。
そうじゃないければ俺はとうの昔に蜂の巣だって」

「そうじゃないんです…
そうじゃないんですよ…」

（このコートだって慧さんが着ていたやつだから着てるのに…）

正直なにが違うのか俺にはわからないぜ…

ただどよく聞き取れなかったけど、どうやら俺があげたコートに理
由があるらしい。

まあきつと初恋の人が着ていたコートに似ているとかみたいな複雑

なものがあるんだろう。

こういうことはあまり触れないようにするべきだろう。

「まあ妖怪色々あるさ。

取り敢えず仕事に戻ろうぜ。

正直咲夜さんにナイフ投げの的になるのはゴメンだ。

それとだ…

おい！その黒白！

なぐに勝手にしかも正面から堂々と紅魔館に侵入しようとしてんだ！
てか入るな！」

「「えっ！」」

俺が黒白の侵入者にそう怒鳴ると美鈴と黒白は驚いて美鈴は黒白を、
黒白は俺達の方を向いた。

まあ大方予想はしていたが、やはりそいつは俺の知っている奴だった。

霧雨魔理沙…

東方の主人公のひとりにして普通の魔法使いであり、俺を除いてフ
ランと戦って生きて帰ってきた数少ない“人間”の一人。

そして色々盗んでいく泥棒…

盗む物は様々で本や魔導具、仕舞には人の心まで盗んでいくルパ○
みたいな奴だ。

「何だよ」

人が折角いちやついているところを邪魔しちゃ悪いなって思ってい
たのにさ」

男だったらそういう好意は有り難く受け取るもんだぜ！」

「悪いがこっちも仕事でねえ。
あと別に俺は美鈴といちゃついてないぞ。」

「そつ、そうですよ！
あなたはなに言ってるんですか！」

「ん？
私はてつきり門番にも春が来たのかと思っただぜ…
それにしても、お前見かけない顔だな」

そう言つて魔理沙は俺の方を見る。

「そりゃそうだ。
なんせ俺がここで働き始めたのは今日からだからな。
というわけで帰ってくれ」

「悪いけどこっちも用があつてね…
パチュリーから本を借りる（盗む）ついでに、最近ここに来た秋山
慧つて奴を見にきたんだぜ」

どうやらこいつはパチュリーの本を強奪するついでに俺を見に来たらしい。

しかし俺を見にきただけならいいが、本を強奪されたり、紅魔館で
暴れられたりするの流石に困る。

というか屋敷の修理をしたり、パチュリーや咲夜さんに怒鳴られる
のは俺や美鈴だ。

それに初日から魔理沙の侵入を許したら最悪仕事をクビにされる…
それだけはなんとしても阻止しなくちゃならない。

「そうかい。」

なら一つ目の目的は達成したな。

秋山慧は俺だ。

それじゃあとつとと帰れ」

そう言つて俺は腰に吊したホルスターからアインを取り出し、その銃口を魔理沙に向けた。

その距離約5メートル。

外す距離ではない。

しかし魔理沙の表情は余裕なのか笑っていた…

「へえ…

お前がねえ…

なかなかいい男じゃないか…

そういえば自己紹介がまだだったな。

私は霧雨魔理沙だぜ。

まあそれは兎も角、お前は私に帰れと言う。

私は紅魔館に入りたいと言う。

話は平行線な訳だ。

しかし私もお前も自分の意見は譲れない。

なら………

やることは一つだよな!!」

そう言つて魔理沙は突然俺に接近して持っていた箒の柄をアインを持っているほうの手に叩きつけた。

バシッ

「っ！」

痛え…

なんとかアインを落とさずにはすんだが…

ゴォォ

気づいた時には魔理沙は箒に乗って俺と美鈴の真上（大体10メートルくらい）でミニ八卦炉を構えていた。
そして…

「スペルカードバトル開始だ！」

バラバラバラバラ！！

そう言つて魔理沙は俺と美鈴に向けて無数の弾幕を放った！
マズい！

このままじゃ俺どころか美鈴も巻き添えだ！
そう思った俺はとっさに美鈴を突き飛ばした！

「うおおおおお！」

ドンッ！

「きゃっ！」

ドガガガガガガガ！

俺と美鈴が地面に倒れ込んだ瞬間に俺達が元々いた場所に魔理沙の放った弾幕が突き刺さった。

危ねー…

ギリギリセーフでところか…

しかも美鈴に体当たりする形で突き飛ばしたおかげで俺の方もダメ

ージはない。

だけど状況は良くはない。

魔理沙はまだ俺達の上空にいるし、いつ攻撃してくるかはわからない。

それにここで戦えば紅魔館に被害がでる可能性がある。

ならやることは一つだけか…

そう思った俺はアイン同様に腰に吊しておいたツヴァイを抜く。

よし…魔力は満タン！

いつでもイける！

「美鈴！

門の方は頼んだ！

俺は魔理沙を誘導してから仕留める！」

「えっ、はっ、はい！

任せてください！」

美鈴も復活して大丈夫そうだ。

そう考えた俺は空を飛んでいる魔理沙に向かってアインとツヴァイの銃口を向け…

ドガガガガガガガ！

一気に大量の炎弾をバラまいた！

しかしその炎弾は…

「おっと！

へへっそんなんじゃまだまだ簡単に避けれるぜ！」

バラバラバラバラ！！

そう言つて魔理沙は俺の炎弾を避けて逆に反撃してきた。
だけどそれでいい…

そもそも当てるつもりがない弾だ。

俺の目的は魔理沙の注意を俺に向けさせて紅魔館から離すことだ。
本格的に戦うのは紅魔館からある程度離れてからだ。

そう思った俺は魔理沙の放った弾幕を避けつつ、適度に反撃をしながら少しずつ魔理沙を紅魔館から離していくことにした。

バラバラバラバラ！！

ドガガガガ！！

バラバラバラバラ！！

避けては反撃…

避けては反撃…

それを繰り返しているうちにいつの間にか俺は湖の所まで来ていた。
文字通りの背水の陣つてやつだが、紅魔館からはだいぶ離れた。
そう思った時、急に弾幕が止み魔理沙が下に降りてきた。

「へえ、最初に思いつきり弾幕を放って私の注意を引き、避けながら
少しずつ紅魔館から離していく。」

しかも怪しまれないように適度に反撃しつつも魔力の消費を抑える
為に最初程弾幕はばらまかない。

元人間にしてはなかなかえげつない戦法をするじゃないか」

どうやら俺の作戦は魔理沙にバレていたらしい。
まあ結果的には作戦は成功したが…

「悪いな…

これでも吸血鬼になったばかりで魔力のキャパシティが低いんでね。
それに屋敷に何かあったら怒られるのは俺なんだよ。

それはそうと、お前こそ俺の目論見がわかっていてなお乗ってるじやねえか！」

そう、今の魔理沙の話から考えるに魔理沙は確実に俺の目論見に気づいている。

なら何故こいつは紅魔館に侵入しようとしなかったんだ？

「まあさつきも言ったけど、私の目的の一つはお前だからな。
それに新しい吸血鬼がどれだけの力を持っているか興味もあるしな
！」

そう言つて魔理沙は再び八卦炉を構える。
なる程、納得したよ…
だが…

「へっ、その余裕…
後で後悔してもしらねえぞ！」

俺もそう言つてアインとツヴァイを構える。
そして特に意識もせずに俺は言っていた…

「この勝負…

てめえはコンティニューできねえぜ！」

克つてフランが魔理沙に対して言った言葉を…

T O B E C O N T I N U E D

第七話 紅蓮の二丁拳銃 前編（後書き）

これで第七話前編は終了になります。

何というか前回魔理沙とのバトルがあると言っておきながら少ししかないという状況になりましたが、後編は序盤以外はほぼ全部がバトルパートになります。

では今回の小ネタとしてはタイトルを二トロプラスのゲームの天使ノ二丁拳銃（二丁拳銃の丁の字が違います）のタイトルから取っています。

因みにこの東方紅蓮録の副題もこのゲームの副題から取っていたり、以前アインとツヴァイの候補に挙げていたオートマゲ？の二丁拳銃もこのゲームの主人公の使っていた物だったりします。

余談ですがこのゲームはやってなかったりします（やりたいのですが買おうと思ったときに限って無いですory）。

次に三人目のヒロインが決定しました。

因みに紅魔郷のキャラじゃないです。

まあ出てくるのは二章の途中からなのでまだまだ先ですが…

そしてルーミアをヒロインにするかしないか本気で悩み始めてます。以前フラン、美鈴に次ぐ三人目のヒロインの予定でストーリーだけ考えてはいたんですが、ルーミアルトをやるならEXルーミアを出したい けどそれを出したらバッドエンドしか書けなくなる…

ボツとなったんですがやっぱり好きなキャラなのでどうしても書きたくありません。

けどヒロインにするなら二章の始めの方で登場させたいです。

では今回はここまでにしたいと思います。

ご意見、ご感想もお気軽に書きください。

ではまた次回…

次回は一週間～二週間後を予定しております。

side 6 (前書き)

今回は前回の話のフアンサイドの話です。

前回サイドストーリーは挟まないと書いたのに結局書くという事実…

side 6

「ねえお姉様？」

そろそろいきなりサトルに門番の仕事をさせた理由を教えて欲しいんだけど？」

いつものごとくテラスで咲夜の淹れた紅茶を自称優雅に飲みながら（わたしには何処が優雅なのかわからない）、自称優雅にクッキーをつまんでいる（しつこいようだが何処が優雅なのかわからない）、自称優雅な姉にそう聞いた（正直クッキーの食べかすを服にこぼしている時点で優雅じゃないと思う）。

数時間前、わたしがサトルに本（なんか怪談話が沢山書かれた本）を読んでもらっているときにいきなり咲夜が来て：

「少しサトルを借りていきます」

と言ってサトルと一緒に部屋から出ていってしまった。
そして数分後にサトルは戻ってきて私に

「ごめん、午後から門番の仕事が入って遊べなくなっただけだ」

と言ってわたしに謝ってきた。

確かにサトルは使用人としてこの屋敷に雇われている。

だから急に仕事が忙しくなって、わたしと遊べなくなるというものもわかっているし理解している。

だけど今回の門番の仕事に関しては明らかにお姉様が急にやらせたものだ。

そもそも門番の仕事は多くても美鈴と妖精メイドが一人か二人いれば十分な仕事だ。

確かにサトルは使用人として門番の仕事もする予定にはなっているみたいだけど、勤務初日だからという理由で咲夜が今日の仕事に入っていないかったしサトルも昨日あまり遊べなかった分、今日は門番の仕事がないから一日中遊んでくれるといていた。ただこの姉はいつものごとく自分が楽しむ為にわたしの楽しみを奪ったのだ。

正直、きゅっとしてボン！の刑（実質上死刑ですよそれ… by 紅丸）にしてやろうかとも思ったけど、流石にそれはマズいので理由を聞いてそれがあまりにくだらないものだったらレーヴァテインでボコボコにしてやろうと思っていた。

しかし…

「そうね…

敢えて言うなら慧がどれほどの力を持っているのか確かめたいのよ

…」

予想外にもお姉様はわたしの問いに真面目に答えた。

普段からカリスマ、カリスマ言いながら全くその気配がないお姉様にしては珍しい。

「フラン…

今物凄く失礼なこと考えているでしょ…

それよりフラン、賭けをしないかしら？」

「賭け？」

突然そんなことを言い出したお姉様に疑問を抱いていると…

バラバララララララ！！

ドガガガガガガ！！

と突然弾幕ごっこの音が外から聞こえてきた。
驚いて外を見てみると門の近くで誰かが戦っている。
一人はサトル、もう一人は：

「えっ、あれまさか魔理沙！？」

そうサトルと戦っていたのは魔理沙だった。
おそらくパチュリーの本（と心）を盗みに来たのだろう。

「まさか、賭けつてアレのこと……？」

「ええそうよ、どちらが勝つか当てた方の勝ち。
簡単でしょ？」

確かに簡単だけど、正直こういう賭けはお姉様の方が有利だ。
お姉様の能力は運命を操る程度の能力……
その力を使えば未来の事なんて簡単にわかる。

「わかった、やるわその賭け」

しかしわたしはその賭けに乗ることにした。
正直暇だし、偶にはこういうのも面白そうだ。

「なら決まりね。
それじゃあ私は「サトルが勝つ方に今日から一週間の夕食後のデザ
ート全部賭けるわ！」えっ……………」

わたしの言葉にお姉様は啞然としていた。

おそらくわたしがサトルに賭けるとは思っていなかったのだらう…

「フラン…

本当にそれでいいのね？

今ならまだ変えられるわよ」

お姉様が確認してくる。

確かにサトルはまだ吸血鬼になったばかりだし、弾幕ごっこも初心者だ。

だけどそれでもサトルは魔理沙に勝てるとわたしは信じている。
だから私は…

「変えるつもりはないわ！

言っただ通り、サトルが勝つ方に今日から一週間の夕食後のデザート全部よ！！」

と再びお姉様に言った。

「いいわ！

なら私は魔理沙が勝つ方に一週間分の夕食後のデザートを賭けるわ！
フラン…

後で後悔しても知らないわよ！」

お姉様はいつものごとく自信たっぷりだ。

はたして後悔するのはどっちかしら…？

わたしはサトルが負けるとは思っていない。

まあもし負けちゃったら。

「お仕置きしなくちゃね…

うふふふ…」

side 6 (後書き)

ではサイドストーリー第6回これで終了です。
次回はサトルVS魔理沙決着です。
今度こそちゃんと後半ですので大丈夫です。
では今回はこのへんで失礼します。

第八話 紅蓮の二丁拳銃 後編（前書き）

かなり予定より遅くなりましたが後編になります。
果たして慧は魔理沙に勝つことは出来るのでしょうか？
それではどうぞ！

第八話 紅蓮の二丁拳銃 後編

ゾクッ

「ッー！」

何だが寒気のようなものがした。

確かに今日はこの周辺は霧が出ているせいか（とは言ってもこの辺りはは年中霧がでている）いつもより寒い。

それに弾幕ごっこで汗もかいているせいもあって更に寒く感じる。不味いなこのままだと勝っても負けても風邪をこじらせそうだ。

そう思っていると…

「弾幕ごっここの最中によそ見してんじゃねーぞ！」

バラバラバラバラ！！

突然空から弾幕が降り注いできた。

俺は上手くそれを避けながら…

ドガガガガガガガ！

アインとツヴァイの乱射で反撃をする！

しかし、それも魔理沙の機動力には無意味で俺の乱射した炎弾は簡単に避けられる。

正直さつきからお互いに弾幕を撃たれたら避けて反撃するの繰り返しだ。

なんとかスペルカードを使わないですんでいるがそれも時間の問題だろう。

それに吸血鬼化して間もない俺と幻想郷の中でもトップクラスの力を持つ魔理沙とでは魔力のキャパシティに差がありすぎる。

このままだとこっちの魔力切れで勝敗が決しちまう。

ならここは一発勝負に出るか…

「あれっ？」

いつの間にか魔理沙が視界ら消えていた。

正直、奴が弾幕こつこの最中に敵前逃亡を決め込むとは考えられない。

「まさかつ！」

俺はとつさに上を向く。

魔理沙は上にいた…

そして見つけたと同時に…

「食らえ！！」

星符「ドラゴンメテオ」！！」

魔理沙は問答無用にスペルカードをぶっ放しやがった！

星符「ドラゴンメテオ」

魔理沙のスペルカードの一つで上空から地上に向けて極太レーザーを放つ技だ。

イメージとしては人工衛星から発射されるサテライトキャノン（まあ多分実用化されてないだろうけど）みたいな感じだ…って、暢気にスペカの解説なんてしている場合じゃない！

マズい！…

気づくのに遅れたせいで、このままじゃ飛ばない限り避けられない！
しかし避けられても、まだ飛ぶので精一杯だから確実に的になる！
だけどドラゴンメテオを避けなければ俺の敗北は確定だ！
なら一か八か賭けに出るか…

「うおおおおお！！」

ザッ

そう考えた俺はバックステップと同時に空に向かって飛び上がる。

ドゴオオオオオオン！

それと同時にさっきまで自分の居た場所に極太レーザーが地面をえぐり突き刺さる。

間一髪と言いたいが、まだまだ危険は去っていない。

まだ飛び慣れていない俺では、今スペルカードを使われれば確実に避けれない！

一番良いのは魔理沙がスペルカードも弾幕も俺が地上に降りるまで一切使つてこなければ良いのだけど…

「はっ！

この時を待っていたぜ！！

食らえ！黒魔「イベントホライズン」！！」

バラバラバラバラ！！

どうやら俺の考えは甘かったようだ…

俺の願いも虚しく魔理沙は問答無用でスペカを使ってきた！

バラバラバラバラ

無数の星の形をした弾幕が俺に襲いかかる…

逃げ場は無し…

「お前がまだ飛び慣れてないと思ってこの時を待ってたぜ！

地上では避けつつづけてもまだ不慣れな空中では絶対に避けられないとおもってな！！」

ああ確かに…

今の俺じゃ空中で弾幕を避けるのは不可能だ。

毛玉の出すシヨボい弾幕なら兎も角、スペルカードなんて絶対に避けられない。

だから…

俺は…

「へっ？」

“あえてその場から動かなかった”

「おいおい、動かなかつたら私の弾幕がお前に当たるぜ？
それとも降参か？

だったら白旗でも上げてくれないと判らないぜ？」

そう言つて魔理沙がニヤニヤした顔で茶化してくる…

「くくっ…」

「お前さあ、今致命的なミスをしたよ…」

「はあ？なに言つて「お前が今マスタースパークを撃っていたら確かに前回の言つたとおり俺は避けられなかったし、そこで完全に決着が着いていたよ…」それがどおした！

どっちにしたつてお前は避けられない！

私の勝ちだぜ！」

どうやら魔理沙は自分がとてつもないミスをした事を解っていないようだ…

だから俺は魔理沙に向かって言つた…

「だからさあ…

威力の高い一発を俺に撃ち込んでいたらお前は勝つてたんだよ！
なのにお前は確実に当てるために威力の低い無数の弾幕をバラまいた！

だから…

今からその余裕を後悔させてやるぜ！」

俺は持っていたアインとツヴァイをホルスターに戻す…

そして変わりに懷からスペルカードを取り出す…

その瞬間、魔理沙の顔が青ざめる…

どうやらようやく理解したようだ。

確かにあの時、魔理沙がマスタースパークを撃っていたら俺に勝ち目はなかった。

しかし魔理沙が確実に勝利する為にイベントホライズンのような威力の低い弾幕を出してくれたおかげで“相手の弾幕を相殺及び打ち消す”と言う選択肢が出てきた！

俺はスペルカードを構える…

体中を流れる魔力が熱せられ焰と化す…

そしてその焰はスペルカードの宣言と共に炸裂する！

「スペルカード炎符「トップガンドライブ」！！」

「なっ！？」

俺の全身が燃え盛る！

そしてその状態で俺は魔理沙に向かって途轍もない速さで弾幕を打ち消しながら突撃する！

「ちいつ！」

魔理沙も負けじと弾幕を撃ち続けるが、全く俺には通用していない。そして…

衝突するギリギリのところで魔理沙は炎に包まれた俺の突撃をかわした。

タッ

魔理沙に避けられた俺はそのまま地面に着地する。

やっぱり空にいるより地に足がついている方が落ち着く。
なんたつて安心感が違うぜ！

「くそっ！」

しかし魔理沙は自分の策が失敗に終わった為悔しがっている。

まあ自分の油断で招いた結果なんだから自業自得な訳なんだけど…
絶対八つ当たりが俺の方に来るよな、コレ…

兎に角、なんとかピンチを切り抜けた訳だが、正直な所相変わらず
ジリ貧状態なのは変わりはない。

取りあえず魔理沙に見られてない俺の残りのスペルカードは二枚。
その中には地上で使えばマスタースパークと互角に渡り合える奴が
あるが、今の俺の魔力じゃ精々撃てて二発が限度だし、さらに本音
を吐くと決定打になりそうなものはそれしかない。

それにさっきから俺が炎弾やトップガンドライブを使ったり、魔理
沙がドラゴンメテオを使ったさいの熱のせいでさっきより少しだが
霧が濃くなっている。

こんな状況じゃ遠距離から奇襲なんて手は使えない。
さて、どうするか……………霧？

s i d e 霧雨 魔理沙

最初は興味本位だった。

こーりんから紅魔館に吸血鬼となった外来人がいると聞いて、パチ
ユリーの所で本を借りる（死ぬまで）ついでにどんな面をしている
か見に行く程度のもだった。

だから、奴…秋山慧が門番の仕事をしていても、人外になってから
数日しか経っていない奴に自分が負けるはずはないと思っていた。

そう…

だからこそ今の状況はまったくの予想外のものだった。

「くっ！」

簡単に言えば作戦が失敗した。

まだ空中戦に慣れていない奴に空中戦を仕掛けて、避けられない状況に持ち込む作戦…

我ながら少し卑怯だとは思いう戦い方だが、今回のように外来人相手にとつとと弾幕ごっこを終わらせたい時に役立つ戦法だ。

だからこそ私は確実に弾幕を当てるために点の一撃ではなく広範囲イベントホライズンの弾幕を使った。

しかし…

奴は私が確実に弾幕を当てようとした行動そのものを逆手に取り、危機的状況を脱しやがった！

正直、外来人相手ではこんな状況は初めてだ。

確かに秋山慧は弱い。

吸血鬼になったばかりだけあって魔力は妖精に毛が生えた程度だし、弾幕ごっこも素人同然だ。

しかし、戦っていてわかる！

奴の強さはそう言った単純な強さの値とは別次元の強さだと！

なんと説明したら良いのかはわからないが、秋山慧は戦い方が上手いのだ。

奴の戦い方はさつきも言ったが弾幕ごっことしては素人だが、“戦闘”として見るなら二丁拳銃を覗きその戦い方には無駄がない。

はつきり言って効率よりも美しさを追求したスペルカードバトルにおいては邪道とも言える戦い方だ。

しかし奴はその無駄の無さでスペルカードバトルの“本質”を貫いていた。

機能美という言葉がある…

それは無駄を廃して、その物の持つ本来の使い道に特化する見た目と形で美しく見えると言う言葉で、よく日本刀などに対して使われ

る言葉だ。

奴の戦い方を表現するとするならば正にそれだ。

それに奴のド派手な二丁拳銃での戦いを足したその姿は、最早“力ツコいい”の一言しかなかった…

恐らくスペルカードバトルに置ける“美しさ”を“格好良さ”にも置き換えられるなら、奴の戦い方は“邪道にして頂点”とも言えるだろう！

だからこそ…

奴の天性からの才覚に嫉妬すると同時に…

奴との戦いが楽しくなり始めていた…

そう思ったときに気づいた…

自分が笑っているということに…

そして、奴（秋山慧）もこの絶対的なピンチの中で笑っていると言
うことを…

そして…

奴と私が銃と八卦炉を構えて弾幕を放ったのは ほぼ同時だった…

バラバララララララ！

ドガガガガガガガ！

無数の弾幕の嵐の中、私も奴も避け続ける！

感情が高ぶりつつも奴の動きから次の行動を予想して、対策を練る！
奴も初めてのスペルカードバトルでありながらそれを実行している。
正直奴との戦いは驚きの連続だ！

「くっ、初めてのスペルカードバトルにしちゃあかなりやるじゃないか！

ただどこいつならどうだ！

魔符「スターダストレヴアリエ」！！」

バラバラバラバラバラ！！

私はスペルカードを発動する！

だが…

「うおおおおお！！」

ドガガガガガガガ！

ダダダダダダダダダ！

私の撃ったスターダストレヴアリエは避けられ、そして奴は避けると同時に反撃してきた！

「すげえ、このタイミングでスターダストレヴアリエも避けられるってどんだけだよ！

お前本当に吸血鬼なりたてなのかよ！？」

そう言いながら私も奴の弾幕を避け反撃をする！

ドガガガガガガガ！

バラバラバラバラ！

「ああ！正真正銘、吸血鬼歴6日の新米だよ！それより、弾幕がとろすぎるぜえ？

こんなんじゃ目え瞑つても避けれるっての！」

奴が私の撃った弾幕を避け反撃しながら挑発してくる。
言ってくれるじゃねえか！

「なら、こつちも全力でやってやるぜ！！」

「上等！

こつちもブルファイトの方が性に合うんでな！
そつちがその気ならやってやるさ！！」

そう言つて私も奴も互いに向けて武器を構え…

そして…

「「スペルカード！！」」

「炎符「ヴァーミリオンノヴァ」！！」

「恋符「マスタースパーク」！！」

ゴォウ！

二つの閃光が放たれ…

ドオオオオオオン！！
衝突した！

炎符「ヴァーミリオンノヴァ」

二丁拳銃のそれぞれの銃口から極太の熱線を撃つスペルか…

恐らくこれが奴の持つ最強のスペルカード！
ならばこいつを凌げば今度こそ私の勝ちだぜ！

だが…

「ぐぐつ！」

「ちいつ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

やはり実力差はあっても奴の持ち得る最強のスペルだけあってかなりのパワーだ。

恐らく威力に関しては互角…いや、少しだが奴の方が上回っている感じた。

だけど…

勝つのは私だ！

そう思いながら私は八卦炉に魔力を更に送り込む！

しかし奴も必死なのか、どんどんやつのスペルのパワーも上がっていつている！

そして！

ドオオオオオオオン！！

二つの閃光は互いにぶつかり合っている位置から爆発を起こした。

ゴオオオオオ

土煙と霧で 前が見えない…

まさかマスタースパークが相殺されるとは思わなかった…

だけど相殺の衝撃でダメージはくらったが、これで奴の最強のスペルは打ち破った！

これで私の勝ちが決まった！

そう思った…

土煙が収まり始める。

私は自分が打ち破った相手の状況を確認しようとした。
だが…

「へっ？

嘘…だろ…」

そこには確かに奴…秋山慧がいた…

人間である私がこの衝撃で平気なのだから奴が立っていられてもおかしくないし、私もそこまでは予想していた。

しかし問題なのはそこではない！

“笑って”いたのだ！

自分の最強のスペルを打ち破られ、間違い無く打つ手なしの筈なのに奴はまるで自分の勝利を確信しているかのように禍々しく笑っていた。

しかも奴は先ほどの衝撃で吹き飛ばされたのか湖の湖に足首まで浸かっている状態だ。

吸血鬼は流水に弱い。

勿論、湖の波も例外ではなく本来なら奴には足に激痛が走っている筈だ…

激痛が走り、打つ手が無い。

そんな状況で笑ってられるなんて最早正気の沙汰ではない！
その表情は最早悪魔と表現してもおかしくはないものだった！

しかし、そう思ったとき私は先程の事を思い出した。

奴はさつき私の策を更に上回る策で打ち破ってみせた。

と言うことは奴にはまだ勝つことの出来る策があるのではないのか？

ならばやることは一つだけだ…

最も強い一撃で叩き潰す！

私は再び八卦炉を構え眼前の紅蓮の悪魔に向ける！

「お前…

本当によくやったよ…

正直、外来人にここまで追い詰められたのは初めてだぜ！
だから…

最後は私の最強のスペルでトドメを刺してやるぜ！」

八卦炉に魔力を込める…

それも今まで以上に！

コイツを使うのも久し振りだな…

そう思いながら私はスペルカードを宣言する！

「コイツで終わりだ！！

魔砲「ファイナルマスタースパーク」！！」

グゴオオオオオオオオオオ！

八卦炉から今までに無い程の巨大なレーザーが放たれる！

ファイナルマスタースパーク…これが私の持つ最強のスペルカード
(ラストスペル)…

簡単に言えばマスタースパークの強化版でしか無いのだが、その威

力、範囲共にマスタースパークを遥かに超えている一撃だ！

だが、その最強の一撃を見ても尚、奴はその場所から動かない…

そして…

「炎符「フレイムウォール」！！」

そう言つて奴は自分の真下を殴りつけ、周囲を囲むように火柱を作り出した。

何をするかと思えば防御系のスペルか…

どうやら本当に手詰まりのようだな…

そう思つた…しかし！

ブオッ！

「！！」

奴が火柱を作り出した瞬間に周囲が一気に白く染まつた！

これは…霧か？

どうやら奴が使つたスペルで湖の水が蒸発した影響でうつすらとかかつていた霧が濃くなつたようだ。

しかしこれでは奴にラストスペルが当たつたかわからない。

それどころか周りの状況すらわからない……………まさか！

私はふと思い出した。

奴は私がラストスペルを使う前にまるで“勝利を確信した”かのように笑つていた…

そして私がラストスペルを使った瞬間に奴は対抗してあのフレイムウォールとかと言うスペルを発動した…

奴だって馬鹿じゃない…

自分の使うスペルが私のラストスペルにかなわない事くらいは解るはずだ…

なら普通だったら今の攻撃は避けようとする筈だ！
しかしそれをせずにスペルを使ったと言うことは…
なる程…

奴は初めから防御ではなく霧を作り出し周りを見えなくさせる為にスペルを使ったということか…

この土壇場でなかなか姑息な真似をするじゃないか…
と言うことは…

私は後ろを向き八卦炉を構える…

その先には私の予想通り黒い影が動いていた！
恐らく奴は霧で視界を遮り私が奴を見失っているうちに後ろから奇襲をしようとしたのだろう。

だが、今回は私の方が上手だったみたいだな！

「悪いがこれで今度こそ終わりだぜ！」

「お前がな…」

ガチャリ

私が勝利を確信した瞬間さっきまで聞いていた“男にしてはやや高い声”と“金属音”が聞こえ、それと同時に“重い金属”を後頭部に押し当てられている感触と“何かが燃えているような熱さ”を感じた…

まさかと思い私は後ろを見た！
そこには…

“ 全身を炎で包み込み悪魔のような笑みで私の頭に手に持つ銃を押し当てている秋山慧がいた”

リボルバー

side out…

next side 秋山慧

「なっ、なっ…」

「何で俺が“ここににいるか”…そう聞きたいみたいだな…」

俺がそう聞くと魔理沙は顔をひきつらせながら頷く。

まあ後頭部に銃を突きつけられていたら誰だってこうなるか…

「まあ単純に言えば、俺は“普通に真っ直ぐ歩いて”ここまで来たんだが…」

俺は魔理沙の質問（になっていない質問）にそう答えた。

嘘は言ってない。

だが…

「嘘だっ！

だってお前はついさっきまでそこにいたじゃないか！」

と魔理沙は言ってきた。

どうやらまだ解っていないらしい。

「なら…」

もう一度お前が俺だと思ったものを確認してみろよ…」

そう言うのと魔理沙は再び自分の前方にある物を見た…
そこにあつたのは…

「私の…影…？」

「ああ…」

お前が俺と勘違いしたのは“俺の纏っている炎の明かりで出来た影が霧に映し出された”ものだ」

「！！」

そう、俺の作戦は確かに魔理沙の予想通り霧を利用した奇襲だった。しかし、普通の奇襲と違い相手が後ろから襲ってくると“勘違い”させてから奇襲をかけるというものだった。

具体的に説明すると先ず相手にもう打つ手がないと思わせる。

次に相手に俺がまだ何かを企んでいるかのように振る舞う。

次に霧を発生させると同時に自らの体に炎を纏う。

これによって相手の後ろに相手自身の影が映る事になり、尚且つ相手からは殆ど俺を確認出来なくなる。

そして最後に相手が自分の影を俺と勘違いして俺から見て後ろを振り返った瞬間に奇襲を仕掛けるというものだ。

だけど正直この作戦は最後の賭けだった。

そもそもこの作戦は相手側が後ろから奇襲をしてくると勘違いしな
くてはならなかったし、手詰まりを思わせる為に切り札を使わざる
負えない。
ヴァーミリオンノヴァ

それに奇襲だけあってチャンスは一回限り。

おまけに魔力が底をつく寸前だったから立て直しは不可能。
正に背水の陣！

「それにしても正直きつかったぜ…

お前に策があると思わせる為に両足を流水に浸けながら激痛のなか笑ってなくちゃいけなかったし、霧を発生させなきゃいけなかったからギリギリまでファイナルマスタースパークを交わせなかったしさ…」

魔理沙は相変わらず黙っている。

自分の油断が勝ちを逃したと思えば誰だってこうなるか…

まあそれは兎も角…

「ゲームセット…

悪いが、俺の勝ちのようだな…」

もしかしたら魔理沙にはまだ余力が残っているかもしれない…

しかし、魔理沙が俺の方を向いて弾幕を撃つ前に俺が撃つ方が速いし、たとえ魔力切れで炎弾が出せなくても格闘戦で吸血鬼が人間に負ける道理はない。

魔理沙もそれがわかつているのか肩を震わせ、そして…

「あゝチクシヨ〜！

負けた負けた〜！

つーか外来人に負けたのは始めてだぜ！」

……………なんだか思っていたものと違ってサッパリした感じだった…

そんな魔理沙の反応に啞然としていたら…

ブオッ！

急に突風が吹いたと思ったらいつの間にか目の前にいた魔理沙が消えていた。

一体どこに！

そう思っていたら…

「おい！

こっちだ！」

そんな声が真上から聞こえた。

上を向くと魔理沙が箒に乗って空を飛んでいた。

しかし、はつきり言っただけ俺は丁度真下にいるわけだから魔理沙のスカートの中が丸見えだ。

それにしてもドロワーズか…

悪くないな…

「なに人のスカートの中を覗いてるんだよ、このスケベ野郎！
まあいいや、今回は私の負けだから見逃してやるぜ！
だけど次は負けなげ！」

ブオッ！

そう言っただけ魔理沙は何処かへと飛んでいった。

「ふう〜、って、とっとと」

緊張の糸が切れたのか、力が一気に抜けてふらつく。
取りあえず俺は適当な木を見つけ根元に座り込んだ。
正直、魔力を使いすぎて体に力が入らない。

実のところ魔理沙があ場で降参してくれて助かったのは俺の方だったりする。

あの時、フレイムウォールを使い全身に炎を纏ったときに既に俺の魔力は底をついていたのだ。

まあラストスペルの方はなんとか避けれたからよかったけど…

それでもそんな状態で最後まで戦い続けられたのは恐らく意地だったのだろう。

「うっ…」

まずいな…視界が霞んで意識がもう保ちそうにないな…

「慧さん！

何処ですか」

大丈夫ですか」！」

薄れゆく意識の中そんな声が聞こえた…

恐らく美鈴が俺を探しに来てくれたんだろう…

「ここだぜ美鈴…

まあ魔力切れてもう意識が保たないけどな…」

残りの力を振り絞り俺はそう言った。

出た声はそんなに大きいものではなかったけど、それでも美鈴は気づいてくれたようで俺の方に来る気配がした。

「さ…る…ん！

…じょ…で…！」

最早何も見えず何も聞こえない…

だけど最後に感じたのは暖かな手の温もりだった。
そして俺はその温もりに何処か懐かしさを感じつつ意識を完全に手
放した。

第八話 紅蓮の二丁拳銃 後編（後書き）

これで第八話は終了になります。

今回遅れた理由はいくつかありまして、先ず戦闘描写が上手く書けなくて何度かやり直した事が一つ。

二つ目に魔理沙の視点で苦戦したこと。

三つ目に佳境に入っている所でポケモンの新作にどっぷりとはまっています。それで更新が遅れました…

はい、完全に私情です。

サーナイト可愛いよ、サーナイト。

とまあ発売から一週間、いまだにはまっています。

取りあえず今回の話になりますが、この東方紅蓮録においてのスペルカードバトルは本家のシューティングのイメージよりも翠夢想や緋想天などのような格ゲーと儚月抄でのスペル力戦を合わせた感じの戦闘方法です。

そのため美鈴は拳法を使う事は出来ずし、レミリア曰わく最強の体術も使えます。

次に今回初登場した慧のスペルカードについての説明になります。先ず炎符「フレイムウォール」は自分の周囲全方向に炎の壁を作り出すスペカで正直第一話のフラン戦のラストで使ったあれです。

次に炎符「ヴァーミリオンノヴァ」は二丁の銃のそれぞれから極太の熱線を撃ち出すスペルで、イメージとしてはマスタースパークというよりもウイ○グガン○ムゼロのツイ○バスター○イフルとグラ○モスのグラビームを合わせた感じです。

最後に主人公が魔理沙を罫にはめたあの影のトリックは、プロツケン現象と言う名前の光学的現象で小学生の頃に読んだ推理小説に書いてあったのを思い出し、今回使ってみました。

それでは今回はこの辺で失礼します。

次回のサイドストーリーは二本立て（分けますが）でパチュリーの

作戦失敗と慧と魔理沙の戦いを覗いていた皆さんご存知の“あいつ”の話を予定しております。

side 7 (前書き)

最近投稿が遅れ気味ですorz
文章を早く書けるようになりたい今日この頃…

side 7

side パチユリー・ノーレッジ

「ふふふん ふふふん ふふふふふふふん」

「あの〜パチユリーさま…?」

私が機嫌良く鼻歌をしながら“準備”をしていたらこあが話しかけてきた。

「なんだか嬉しそうですね…」

「当たり前でしょ？」

今日で遂に魔理沙が私のものになるのよ！
嬉しくて当然でしょ？」

私はなぜか少し困ったような表情をしたこあに対して私はそう答えた。

そう、今日こそあの人形女を出し抜き魔理沙を私のものにするのだ！
今までの魔理沙の行動パターンから考えると、おそらく…いや、確実に今日！

魔理沙はこの図書館にやって来る！

それに美鈴の力じゃ魔理沙を止めることは出来ないし、咲夜はレミイに、フランは慧にべったりだから厄介な妨害も無くここまでこれるだろう。

そして魔理沙が来たら飲ませるの

この“不思議（は〜と）なお薬（催淫惚れ薬）”の入った紅茶を
うふふふ

凄く楽しみ

私と魔理沙の赤ちゃん

いっぱい産んであげるわ

いや、逆に産んでもらうのも悪くないわね…

どっちにしる私と魔理沙の甘〜い蜜月の日々の始まりには違いないわ！

「そつ、そういえば！

さつき妖精メイドの皆さんが言ってたんですけど、慧さん今日の仕事、フラン様のお世話から門番の仕事に変更になったそうですよ！」

慧？

そういえばこあはまだ会ったことがなかったわね…

まあ今は新米吸血鬼のことなんてどうでも………なん…だと…

今こあは慧の今日の仕事の内容が変わったって言ってたわよね？

「こあ…

今の話し、少し詳しく教えてくれない？」

「慧さんの今日の仕事が変更になった事ですか？

確か…今日の慧さんの仕事は初日ってこともあってフラン様の世話と咲夜さんの手伝いだけの予定だったんですが、お昼前にお嬢様が慧さんのお昼の仕事を門番の仕事に変更してくれて咲夜さんに言ったそうですよ。

けど流石に門番なんてやったことないだろうからと言う理由で美鈴さんと一緒に門番をするということになったそうです…」

こあは私の質問にそう答えた。

確かに魔理沙は強いし、弾幕に関しては微妙な美鈴や吸血鬼とはいえまだ新米の慧なんかには負けることはないだろうけど、この感じだ

と時間は取られるだろう…

こっちは早く魔理沙と（禁則事項だよ）や（禁則事項です）したり、（禁則事項よ）を（禁則事項だぜ）したくてたまらないのに！

レミイめ！

余計なことを！

しかし、正直この辺りから嫌な予感はしていた…

だけどそれを考えないように、忘れるように準備を再開しようとしたら……

「パチュリーさま」！

助けてください！」

今度は半泣きで美鈴がドアを思いっきり開けて入ってきた…

背中には力無くぐったりした慧が背負われてる…

しかし確かによく見るとボロボロだが、こんなにぐったりする程怪我をしている訳ではない。

おそらく体力の消耗と魔力の使いすぎで一時的に気絶しているだけだろう。

………魔力切れ？

確かに慧は吸血鬼になったばかりで魔力のキャパシティが低いため魔力切れで倒れてもおかしくはない。

しかし慧は仮にも吸血鬼だし、人間の時にフランと弾幕ごっこをして生存しているためそんじょそこの妖怪や妖精には負ける筈はない。

つまり慧と戦っていたのはこの幻想郷でもそれなりに有名なもの…最低でも美鈴くらいの実力者と戦ったことになる…

「パチユリー様！」

慧さん大丈夫なんですか!？」

美鈴が相変わらずの半べそ状態で私に聞いてくる。

正直、うつとおしいがきつと慧のことを心配しているのだろう。

「大丈夫よ……」

疲労と魔力切れで気絶してるだけよ……

それにしても魔力切れになるまで戦うつて一体誰と戦ったのよ……」

「実は、先程黒白がいつもの如く館に侵入しようとして……」

慧さんは黒白を戦いやすい所まで誘導してから仕留めてくるからそれまで門を頼むって言うて黒白にスペルカードバトルを挑みにいつて、しばらくしてから心配になつて様子を見にいったら木陰で意識を失っている慧さんを見つけたんです……」

なる程ね……

美鈴の話から考えるに、やっぱり慧は弾幕ごっこで魔力切れをおこしたようだ……

まあ?とかなら兎も角、相手が黒白じゃ仕方がないか………黒白?

確か黒白って………

「んっ、うん」

「!?!」

「慧さん!？」

目が覚めたんですか!？」

どうやら慧の意識が回復したようだ。

まあただの魔力切れだったのだから心配する必要は無かったのだが、美鈴は目が覚めた慧に駆け寄っていった。

「ああ、まだ少し頭痛がするけど大丈夫だ…

それにしても悪いな、館の中まで運んでもらっちゃまって」

「大丈夫ですよ！

私こう見えて力持ちですから！」

美鈴…

それは女の子の台詞じゃないわよ…

そんな事を思いながら二人の様子を眺めていたら…

「それにしても、やっぱり魔理沙は強かったわ。

正直、あそこで負けを認めてくれなかったらかなりまずかったぜ」

……………へっ？

「ねえ、慧…

今なんて言っただの？」

正直、慧の言っただ言葉が信じられなかった…

魔理沙が負けを認めた？

「ああ、正直ギリギリだったぜ…

負けを認めさせる為に結構せこい手を使ったし…

けど安心してくれ！

泥棒魔法使いは俺が“追っ払った”から多分当分は“来ない”んじゃないかな」

慧がその台詞を言ってからのは覚えていない…
気が付いた時には私は美鈴とこゝに押さえつけられていた…
そして足元には図書館に来たとき以上にボロボロになった慧が転が
っていた…

人の恋路を邪魔する奴は弾幕に蜂の巣にされて死んじまえ by
パチユリー・ノーレッジ

side ???

「ふふふ…
なんとなく湖にただけだったのですが、なかなか面白いものが撮
れましたね…」

私は茂みに隠れながら先程まで魔理沙さんと戦っていた二丁拳銃の
男を背負って紅魔館に戻ろうとしている門番を見てそう呟いた。
それにしても吸血鬼化した外来人ですか…

しかもあの戦い方から見るに、まだ弾幕ごっこに慣れていない感じ
ですね…

しかし、慣れていないにもかかわらずその動きはセンスのある感じ…

面白い！

実に面白い！

“紅蓮の二丁拳銃を持った吸血鬼”ですか：

きつと何時もの如く八雲紫に連れて来られたのでしようが、ここま
で変わった外来人は初めてです！

それにこの感じだとまだ他の方々はその存在も知らないはず！

これは久々の特ダネですね！

元々外来人は珍しく（とは言っても最近結構多いが）色々新聞の
話題にできるモノが多い。

しかし、大半は幻想郷に来て直ぐに妖怪に食べられるか、博麗神
社に行き元の世界に帰ってしまうから新聞の話題にしようとインタ
ビューしに行っても、その時には既に元の世界に帰った後だったり
するパターンが殆どだ。

だけど今回の彼は外来人の中でもかなり稀とも言える吸血鬼化した
外来人だ。

それ故に元の世界には例外を除いては二度と戻れない。

そして彼を吸血鬼化させたのはおそらくフランドール・スカーレッ
トなのだろう（姉のレミリア・スカーレットはあまり人間を吸血鬼
化させるのを好んでいないらしいので）。

彼女については噂でしか聞いたことがないが、とてつもなく強く狂
暴、そしてどんなものでも壊す程度の力と言う最凶の能力を持って
いるが故に紅魔館に軟禁されていると言われている。

そんな彼女と出会って生き残っただけでも十分新聞の一面に出せる
程なのに、更に彼はフランドールに気に入られたのか吸血鬼化まで
している。

ここまでくれば彼の存在は奇跡としか言いようがない。

「本当にあなた達外来人は私達を飽きさせませんね…」

そう呟き、私：射命丸文は住処である妖怪の山に戻ることにした。
今からならおそらく明日の朝刊の内容にこの事を載せられるだろう。
まあ情報が少ないし当事者にインタビューもしていないので内容は
薄くなりそうですがね…

side 7 (後書き)

前回の反省

前回の話を見直してみたら、物凄く誤字が多かったですorz
もうなんか酷い感じに…

というわけで今回のside7ですが、ようやく紅魔郷以外のキャラ(こーりんを除く)が登場しました。

だけど文花帳やダブルスポイラーをやっていないので、文のキャラがかなり微妙なことに…

やっぱり花映塚までじゃ結構きついです。

本当に第二章以降どうしよう…

紅魔郷以外のキャラがどんどん出てくるし…

とまあへたれるのはここまでにして次回予告ですが、少し色々ありまして次回もサイドストーリーにしたいと思います。

理由としては本編の次が第?話だからです。

多分大半の人はこれでわかります。

では今回はここまでです。

そして感想や意見などもございましたらご自由にお書きください。

それでは…

s i d e 8 (前書き)

ようやくs i d e 8完成です。

そして最早サイドストーリーとは言えない長さに…

side 8

紅魔館の最上階にある一番大きな部屋。

そこが頭首であるレミリアの部屋だ。

部屋にある家具はどれも一目で高級な物だとわかるが決して悪趣味ではなく落ち着いたものばかりであった。

しかし当のこの部屋：いやこの屋敷そのものの主であるレミリアはとても不機嫌な表情をしていた。

それもそうだろう…

先程レミリアはフランとの賭けに負けて、今日から一週間、夕食後のデザートをフランに渡さなくてはいけなくなったのだから。

レミリアの能力である“運命を操る程度の能力”を使えば確実に勝てたのだろうが、それを使えば妹の信頼を裏切ることになるだろうし、何より面白くない。

それにフランは自分で慧が勝つ方に賭けたのだからギャンブルとしてはちゃんと成立している。

ただ負けず嫌いのレミリアにとってはやはり屈辱的な事であり、何より毎日の楽しみである咲夜特製デザートが一週間も食べられないと考えると機嫌が悪くなるのも当然である。

「あらあ？

紅魔館の主…

スカーレットデビルことレミリア・スカーレットともあろう方が何をそんな不機嫌な顔をしているのかしらあ？」

と、突然そんな声が聞こえた。

部屋にはレミリア以外誰もいない。

しかし、レミリアは少しも驚いた顔をしていない。

だが、その表情は先程よりも更に不機嫌なものになっている。

「……………正直あなたを呼んだ記憶は無いわよ。
それに、どうせあなたのことから最初から覗いていたんでしょ」

「あらあ？

つれないわね。

まあ最初から覗いていたっていうのはあってるんだけど……」

そう聞こえた瞬間、何もない空間に割れ目ができる。

その割れ目の両端には何の冗談なのかリボンが取り付けられている。
スキマ…ある一人の妖怪にのみ操る事のできる所謂不思議空間への
入口。

スキマが開く…

中には沢山の目が蠢いている。

そして…

「久し振りね、レミリア・スカーレット。

ご機嫌いかが？」

そう言つてスキマの中から胡散臭そうな金髪の女が現れた。

八雲紫：この幻想郷を創った大妖怪にして幻想郷の周囲を囲む博麗
大結界の管理者（とは言つても殆どの仕事は式にやらせてるが）。

「で、要件は何？

あとそれを言つたらとつと帰れ。

正直目障り」

「本当につれないわね…

まあいいわ。

理由としては単純に私の連れてきたあの男の様子を見に來ただけよ。

まあまさか吸血鬼になっているとは思わなかったけど…」

慧をこの幻想郷に連れてきたのは八雲紫…

そのことはレミリアも予想していた。

と言うより、そもそも外来人の八割以上は紫によって連れてこられるか、彼女が開けたスキマに運悪く落ちてしまい幻想郷にやってくるかのどちらかだ。

つまり外来人が来る「八雲紫が原因でほぼ間違いない」と言うことである。

しかしレミリアには腑に落ちない二つの点があった。

一つは何故紫は慧を幻想郷に連れてきたのか…

そしてもう一つは…

「何故フランドールの部屋に彼を送ったか…

そう聞きたいんじゃないかって？」

紫がそう言うのとレミリアは更に不機嫌そうな顔になった。

そう、レミリアが気になっていたのはまさに紫の言った通りのことなのだ。

確かに今までこの幻想郷には沢山の外来人がやってきたし、この紅魔館にもやってきた（レミリアが意図的に運命を弄って紅魔館に来るようにした人間もいる）。

しかし、個人の部屋…ましてやこの幻想郷の中でも最凶と恐れられているフランドールの部屋に直接スキマ送りされる外来人は彼が初めてである。

「そうね…

あえて言うなら只の“気まぐれ”よ。

まあ、始めからあの子をあなたの所に送るつもりではいたんだけどね」

若干“気まぐれ”の所に力を入れて紫はそう言った。

その顔は何を思い出したのかは解らないが、かなり不機嫌そうな顔である。

レミリアはきつと慧が外の世界で紫のことをババアとでも言ったのであるうと思った。

まだ慧が幻想郷に来て一週間も経っていないし、幻想郷やってきて直ぐに3日間も意識不明だったため慧とレミリアの付き合いは実質上三日程度である。

それでもレミリアは秋山慧がどんな性格をしているかは何となくわかってるので、レミリアは何となく慧が何を紫にしたのか想像できた。

しかしレミリアは紫の言葉にまた新たな疑問を感じた。

紫は今慧を始めからレミリアの所に送るつもりだったと言っていた。つまりは慧は紫が何かの目的で紅魔館に送り込んだということになる。

しかし同時に紫自身の気まぐれにより慧が吸血鬼化するというイレギュラーな事態が発生した。

これが紫にとっては想定範囲内なのか、全くの予想外の出来事なのかはレミリアには解らないが、少なくともレミリアや紅魔館の住民（慧も含めて）には今のところ何かの実害がありそうな感じはしない。

そう考えたレミリアは少しだけ安心した。

まあ紫が何を考え慧を紅魔館に送り込んだのかは解らない以上油断はできない訳だったりする…
故に…

「用事は済んだか？」

八雲紫…

ならとつと消える。

目障りだ」

レミリアがそう言って追い返そうとするのは必然だった。

「酷いわねえ。」

お茶の一杯くらい出してくれたっていいじゃない。
あとお茶菓子」

そして相変わらず図々しい紫…

正直、他人様の家に勝手に侵入して言う台詞ではない。
レミリアもそう考え…

「神槍「スピア・ザ・グングニル」」

問答無用でスペルカードを発動し…

ヒュンッ

紫に向けて放った。

ドゴォ！

しかし結果的にグングニルは外れ、棚の一つが無惨にも木っ端微塵になるだけで終わった。

「危ないわねえ…

こんなのが刺さったら死んじゃうじゃない」

背後からそんな暢気な声が聞こえてレミリアは振り返る。
そこにはスキマから上半身だけを出した状態の紫がいた。

「当たり前でしょ？」

殺すつもりで投げたんだから」

そう言っレミリアは再びスペルカードを構える…

「……………わかったわよ…

帰ればいいんでしょ！

帰れば！」

紫はそう言っスキマに潜ろうとして止まる。
そして…

「ねえレミリア…

一つ聞いていいかしら…」

とレミリアに聞いた。

「何？」

「貴方には“秋山慧の運命はどう視えている”のかしら？」

それを聞いたレミリアは一瞬だが驚いたような顔をしたが直ぐにその顔をいつもの何かを企んでいるような笑みにして紫に言った。

「そうね…

余り多くの事は言えないけど、これだけは言えるわ…」

「？」

「そう遠くない未来に慧は重大な決断を迫られるわ…
それも選択次第では周りにいる者の運命を狂わせるくらいだね…」

side 秋山慧

人間にしても妖怪にしても心というものは複雑なものである…
相手にとって良かれと思ってやった事が、逆に相手を怒らせてしま
うなんて誰でも一度や二度は経験があるんじゃないだろうか？
えっ？
俺はどうなのかって？

今現在、私秋山慧は全身打撲に加え、鎖骨と右手と肋骨三本の骨折
(利き腕だよ畜生！)、更に頭蓋骨を始めとした計五力所にひびが
入るなどの大怪我をしている…

原因は先程俺が魔理沙を追い返した事を知ったパチュリーが激怒し
て俺にアグニシャインを始めとした様々なスペルをお見舞いし、更
にスペルで図書館の天井まで吹き飛ばされた結果、天井に激突しそ
のまま地面に叩きつけられたのだ…

えっ？

何で吸血鬼なのに直ぐに再生しないんだって？

まず俺はまだ完全な吸血鬼ってわけじゃない。

確かに今の俺は人間だった頃に比べてかなり頑丈になったが、それ

でもフランやレミリアに比べればまだまだだ。

フラン曰わく俺が完全に吸血鬼としての力を手に入れることが出来るのはまだまだ先になるそうだ。

それに現在の時刻は夜の6時を少し過ぎたくらいだ。

吸血鬼は夜の間は不死なのだが、昼間はその不死性が消えている。

その不死性故に夜ならどんな怪我でも直ぐに治る（とは言っても俺の場合は完全ではないため治りが速くなっている程度）。

しかし、昼間だとその再生能力もかなり落ちるのである。

そして今は日が落ちたことであまりやく怪我の再生スピードが上がり始めたところである。

この感じだと明日の朝には完治するだろう。

それにしても実際これだけの怪我をすれば、人間なら普通に死んでる訳だから、この体と俺を吸血鬼にしたフランには凄く感謝したいところだ…

とまあ、つまり俺が何を言いたいかというと…

あくまで今現在俺が“されている”ことは仕方がないことであり、今の俺は好意に甘えるしかない状況だということなのだ…

「サトル？」

なにブツブツわけのわからないこと言ってるの？

それよりはいい、あゝん」

「あつ！

フラン様！

ずるいですよ」

次は私だつて言ってるじゃないですか」

……………つまりだ

パチュリーにぶっ飛ばされて利き腕骨折 利き腕が使えなきゃ飯が食えない フランと美鈴が食べさせてあげる

という状況なのだ…

もつと簡単に説明すると美少女2人に男の子のロマン“あゝん”をさせているわけだ…

外の世界にいた頃、ファミレスや学校でこれを見る度、彼女のいない俺はそいつら（と言っても男のみ）をぶっ飛ばしてやろうと思っていたが、実際にやられてわかった。

これ結構恥ずかしい…

「なあフラン、美鈴…

一応、左手でも飯は食えるから大丈夫だぞ…」

「だゝめ」「駄目です!」

俺の願いも虚しく、頼んで0・1秒もしない内に俺の意見は却下されてしまった…

「第一慧さん、左手を使うって言ったって、その肝心の左手だってパチュリー様のスペルで怪我してるじゃないですか!」

「そうだよ!

そんな手で“つかえる”って言ってもせつとくりよくがないよ!」

フランや美鈴の言うとおり、確かに俺は左手も怪我をしている。しかし、別に右手と違い骨折しているわけじゃないし、怪我と言ってもせいぜい手に“石の鍬が貫通”した程度の怪我である。

「かんつうつて…
ふつうに大けがだよ…」

「大丈夫だって。

確かに見た目は派手だけど痛みも感じないし、フォークぐらいなら持てるぜ？」

「いやいや、痛みがないって、完全に神経が切れちゃってるじゃないですか！

兎に角！慧さんは怪我をしてるんですから今ぐらいは甘えるべきです！

というわけであ〜ん」

「…あまり人に甘えるのは好きじゃないんだけどな…」

あむっ、もぐもぐ

「人じゃないも〜ん。

きゅっけつきだも〜ん」

「だったら私も妖怪ですから大丈夫ですね」

そういう意味で言ったワケじゃないんだけどな…

そう思いつつもなんだかんだで自力で飯が食えないというのは自分でもよくわかってるので、結局フランや美鈴に食べさせてもらうしかないんだけどね…

「いいご身分ね…

慧…

こっちは魔理沙と（禁則事項）できなくてイライラしてるのに…」

「ええ本当にそうねえ…パチエ？
いつそのこと月までぶっ飛ばしてやるうかしら？」

一方こちら（レミリアとパチュリー）は物凄く機嫌が悪い…

パチュリーに関しては魔理沙を追い返した事が原因だが、レミリアに関してはフラン曰わく賭けに負けて今日から一週間食後のデザートが全てフランに取られるから機嫌が悪いらしい。

はい、完全に八つ当たりです…

しかもパチュリーに関しては完全に逆恨みである。

だけど本人達にそんな事を言ったら確実にフルボッコにされる…

今だって相当な怪我をしているのにこれでまたボコられたら今度こそ吸血鬼な俺でも死ねる自信がある。

「慧、この後話があるから私の部屋に来なさい」

食後のティータイムの最中にレミリアがそんなことを言ってきた。

なんだか以前にも似たようなことを言われたような気がするが、今回はなんだか期限が悪い…

なんと言うか…

顔は笑顔なんだが、眉間の辺りがピクピクしている…

その原因が俺の隣でいつもの二倍の量のケーキをパクついているフランによるものだと思いたいね…

「まずは先程の働きに関してはよくやったわ。
まあ正直あなたが魔理沙に勝てるのは少しも思っていなかったから
予想以上の働きよ」

夕食後レミリアの部屋に言った俺にレミリアが言った言葉は予想外のモノだった。

正直「フランに賭けで負けたのはお前のせいだ」とか言って八つ当たりをしてくると思ったんだけど…

「…またあなた、失礼な想像をしてない？」

「いえいえ、滅相も御座いませんぜお嬢」

レミリアの疑惑に対して俺がそう言つとレミリアは怪訝そうな顔をしてこう言つた。

「ねえ慧？」

その“お嬢”ていうのはなに？」

「なんと言つか…お嬢を含めて周りが俺の敬語をキモイと言いますので少し砕けた感じにしてみたんですけど…」

俺はレミリアの問いにそう答えた。

「ふーん、まあそっちの方があなたらしくていいんじゃない？
別に問題はないわ。」

それじゃあ本題に入るけど、慧？

二つ程質問に答えてもらっけどいいかしら？」

質問？

「？、はい問題無いですよ」

一体何なんだろうか…

まさか、就職後の面接ってわけでもないだろうし…

「そう…先ずは、最近…と言っても吸血鬼化してからだけど、外の世界にいた頃の記憶の一部が思い出せなくなったりしてない？」

外の記憶の一部分？

「いえ、ちゃんと思ひ出せますけど…」

俺はレミリアの質問にそう答えた。

確かにこの幻想郷での数日間以外の世界での数十年間と比べ遙かに濃密なものではある。

それでも今までの事が思い出せなくなっているという事はない。

「そう…じゃあ逆に誰かの過去が夢で出てきたりしたことはない？」

誰かの過去が夢に出てくる？

それこそ無いな。

それどころか、ここ数日間は何かと忙しくて疲れていたのか眠りが深く、夢そのものを見ていなかったりする。

だから俺は…

「いえ無いですけど…」

と、俺はレミリアの質問に再びそう答えた。

「そう…わかったわ…
質問はこれで終わりよ。
仕事に戻りなさい」

一体何がわかったのか俺にはさっぱりわからなかったが、レミリアは俺の答えに満足したようだ。
そう思って部屋から出ようとしたら…

「慧、ちょっと待ちなさい」

いきなりレミリアに呼び止められた。

「どうしたんですかお嬢？
小腹がすいたならホットケーキかフレンチトーストでも作ってきませんが？」

「本当にあなたは私の事をどう思っているのか小一時間程聞いただ
したいわ…というかあなたに料理が出来るってことに驚きよ…
って、そうじゃなくて言い忘れていた事があつたのよ！」

まだ何かあるのかよ…
正直そろそろ行かないといろいろとマズそうな感じなんだが…
主にフランがキレル方向で…
しかしレミリアの表情にふざけた感じは一切ない。
余程大事な事なのだろう…

「じゃあ言うけど、さっき記憶がなくなっ
てないか確かめたけど、
自分の記憶が少しでもなくなっているものがあるって気が付いたら
真っ先に私に言いなさい。
いいわね？」

正直な所、記憶の一部がなくなる事がそんなに重要なのかは疑問なのだが、レミリアの表情は相変わらず真剣なものである。

おそらく俺の想像以上に重要な事なのだろう。

そう思った俺は…

「わかりました。

それじゃあ思い出せなくなったらその時は世話になります」

そうレミリアに言っ、おそらく退屈そうにしている俺のご主人様の下に戻るために部屋を出た。

「……………」

「……………」

「咲夜さん……」

「……………はい？」

「あなたは一体何をしてるんですか…？」

何故だか部屋を出て直ぐの所に咲夜さんがいた…

何故だかハアハア言いながらレミリアの部屋に聞き耳を立てて…

そして…

「なっ、何でもないわ！

それじゃあ慧フラン様の世話は頼んだわよ」

と言って咲夜さんはレミリアの部屋に入っ、いった…

何も見なかった事にしよう…

そう思った俺はそのままフランの部屋に急ぐことにした。

なんだか途中でレミリアの叫び声（というか喘ぎ声？）が聞こえた気がするが、気のせいだろう…

side 8（後書き）

side 8これにて終了です。

今回は主に後々の複線を入れていたので面白いかと言うと結構微妙です…

そして久し振りの登場のババアこと八雲紫。

彼女は二章の終わり辺りから頻繁に登場しますが、それまではちょこちょこ登場して意味深なことを言って消えるの繰り返しをするチャシヤ猫みたいな立ち回りをする予定です。

因みに紫とは戦います。

絶対無敵の境界を操る力に慧がどう戦うのか気長にお待ちください。それでは次回は第？話です。

ようやく“あいつ”が登場します。

第？話 チルノと大妖精 前編（前書き）

前回から2ヶ月…

待ってる人いるのかなあ…

というわけで今回は第？話のサトルサイドの話です。

第？話 チルノと大妖精 前編

「ふっ！」

ガコンッ

俺の振り下ろした手刀によって切り株上にに立てられた丸太が綺麗に真っ二つに割れる。

うん、悪くない！

昨日パチュリーにやられた怪我も一晩で完全に完治したようだ。

それどころか以前よりも若干パワーアップした感じもする。

というかそもそも手刀であまり太くはないとはいえ丸太を割ることが出来る時点で十分人間離れをしているけど…

まあ人間じゃないわけだが…

因みに何故俺がこんな朝っぱら（しかも時間は午前7時過ぎ）から丸太を割っているかというと単純に暖炉に使う薪を作っているのだ。一応現在の紅魔館の調理場のコンロやオーブン、風呂を沸かしたり暖房などに使われるボイラーなどは基本的には魔力で作動するようにパチュリーが改造したらしいが、レミリアの部屋や食堂などは今でも暖炉が使われている。

まあ理由はレミリアが暖炉の方が趣があると言ったからだそうだが…

「慧さん、朝ご飯が出来たそうですよ…って、もうこんなに割ったんですか!？」

俺が薪を割り終わり一息ついていると、突然そんな声が聞こえた。どうやら美鈴が朝食が出来たことを知らせに来てくれたみたいだ。まあ美鈴が驚くのも無理はない。

現在俺の後ろには大量の割られた薪があるのだから…

「ああ、これで一週間くらいは保つ筈だぜ」

俺は美鈴にそう言った。

まあ実際は体の調子を確かめる為に素手で割っているうちに気付いたらこんな量になっていただけなんだけどね…

「いやいや、素手で一週間分の薪を割るって…」

何だかもの凄い早さで人間離れしてきますね慧さん…」

「まあ一応吸血鬼だからな。

それより朝飯出来たんだろ？

早く行こうぜ！

もう朝っぱらから肉体労働してたから腹減ったよ」

そう言って俺は食堂へ向かって歩き出した

「えっ！？ちよつとまっつてくださいよ」

それに気付いた美鈴も慌てて俺を追いかけるようにして歩き出した。

「慧、あなたの事が新聞にでているわよ」

朝飯の最中新聞を読んでいたレミリアがいきなりそんな事を言い出した。

おそらく内容は昨日の魔理沙との弾幕ごっこの事だろう。というかそれしか心当たりがない…

「まあ、取りあえず読んでみなさい。
なかなか面白いから」

そう言つて、レミリアは新聞を俺に渡してきた。

「えっと…何々…」

魔理沙敗北！

紅魔館に現れた紅き二丁拳銃の男の謎に迫る！…って、なんだこれ！？」

新聞の一面を見た俺は驚いた。

いや、正確には一面ではなく一面の写真なのだが…その写真は俺が魔理沙を欺いて背後から銃を突き付けた時のものだったのだ（しかも結構近い距離から撮影されている）。

一体いつの間に撮られたんだ？

そう思っていると…

「サトル？

どうしたの？

朝っぱらから大きな声で叫んで…」

俺が新聞を見て驚いているのを不思議に思つたのか、フランがそう言つて俺の背中によじ登つて新聞を覗き込んできた。

その手には食べかけのソーセージの刺さつたフォークを持ちながら…

「フランさん？

何かいろいろと当たってるんですが…」

主に発展途上の双丘と食べかけのソーセージが…

「あててるのよ?」

フラン: そういう偏った知識は一体どこから仕入れてくるんだ...
そして俺の髪にソーセージを当てるのは流石に止めて欲しいな...

「それはともかくどうしたのサトル... って、サトルが新聞にでてる
く!」

そんな俺の願いも軽く無視したフランは俺の見ていた新聞を覗き込んで驚いていた。

「で、サトルはどんな悪いことしたの?

おしょくじけん?

だつぜい?

それともきょうせいわいせつ?」

フラン: 何であなたは若干ワクワクしてるんですか?

それに、そういう偏った知識はどこから仕入れてくるんだよ!?

あとお前は一体普段から俺をどんな人間(今は吸血鬼だけど)だと思ってるんだ!?

それに美鈴誤解だ!

だからそんな「ドン引きです...」的な表情は止めてくれ!

ついでにパチユリー!

笑うな!

「いやいや別に悪いことはしてないぜ...

しかもタイトルから考えるに多分昨日の事だろ」

そう言っただけ俺は背中にいるフランに見えやすい位置に新聞を持ち、

再び読み始めた。

「えっと…昨日の昼過ぎ、幻想郷でも悪名高い自称普通の魔法使い霧雨魔理沙（1×）はいつものごとく紅魔館におそらく地下の図書館へ本を盗みに行ったところ、門前でスペルカードバトル（以下弾幕ごっこ）に敗北し逃走した。

幻想郷でもトップクラスの实力者である彼女を撃退したのは今まで見たことのない男だった。

その様相は癖のある短い茶髪に赤い瞳、服装は黒のレザージャケットに手には紅く輝く銀色の回転式と同じく紅く輝く黒い自動式の二丁拳銃を持っていた。

この男は霧雨魔理沙との会話から考えるにおそらく新しく来た外来人だと思われるが、手に持つ紅く光る二丁拳銃から炎の弾幕を出したり、スペルカードを発動していたことから能力者、もしくは妖怪と化している可能性が高い。

しかし霧雨魔理沙との弾幕ごっこの後、魔力切れを起こして倒れたところから魔力は差ほど高くはないようだ。

だが、その少ない魔力でありながら幻想郷でも上位の強さを誇る霧雨魔理沙を撃退したことからそのバトルセンスはかなり高いのだろう。

霧雨魔理沙との弾幕ごっこの後、紅魔館の門番、紅美鈴が彼を紅魔館まで運んだことからおそらく現在彼は紅魔館に住んでいると見られる。

しかし、現段階では彼については様相と人外化した外来人であることと彼が現在紅魔館に住んでいる事しか解っていない。

だが霧雨魔理沙を撃退したことや何故彼がこの幻想郷に来たのか、そして何故彼は人をやめたのかと彼についての興味は尽きない。

よって本誌では今後も彼…紅蓮の二丁拳銃の男についてわかり次第お伝えしていこうと思う…」

なんだこれ…

「おお」

サトルが悪いことしてないのに有名人だよ！

ほら！見てみて美鈴！」

「あつ本当ですね！

それに周りの殆どの人が知らない事を知ってるようでなんだがちょっと得した気分です！」

フランと美鈴はそんな事を言いながらはしゃいでいる。

俺自身もなかなか悪い気分じゃない。

だが、それでも俺を不安にさせるモノがあった。

何故なら…

ニヤニヤ

「お、お嬢…？」

「なあに？」

ニヤニヤ

そう何故かさつきからレミリアがニヤニヤと笑っているのだ…

「なんと言つか…

一体何故そんなニヤニヤしてるんですか…」

俺はレミリアに聞いた。

するとレミリアは…

「いや、これから“面白く”なりそうだと思ったのよ。
そう考えるとどうしてもニヤニヤが止まらないわ」

と返してきた。

正直レミリアにとっての“面白い事”の殆どは俺にとっては“厄介事”だったりする。

事実昨日は散々な目にあっただし…

けどまあ今回に関してはおそらく大丈夫だろう。

俺が思うにレミリア考えている面白い事とはおそらくこの新聞を呼んだ奴が昨日の魔理沙のように（魔理沙はこーりんから話を聞いたのが理由だが）俺目的でこの紅魔館に侵入してきて、それが理由で俺があたふたするのを見て楽しむ事なのだろうが、昨日の件でパチユリーには悪いが一番紅魔館に侵入してくる確率の高そうな魔理沙は当分は来ないだろうし、弱い妖怪はそもそも紅魔館自体に近づかない。

強力な妖怪に関しては大半が一般常識くらいは持っているだろうし、ましてやアポ無しで人様の家に土足で入るような輩はいくら非常識な奴らの多いこの幻想郷でもババア（紫）くらいだろう。

まあそれは兎も角として、いったい誰がこんな写真を撮ったんだ？
そう思った俺は新聞社の所を見た。

…文々。新聞…

やっぱり射命丸かよ！

「サトル〜！」

まだ〜！？」

「まだ〜…って、今作り始めたばかりじゃないか…」

そんなこんなでいつものごとく時間を跳ばして現在午前10時の俺の部屋。

日本人にはあまり馴染みがないかもしれないけど、他の国では午前10時というのはおやつの時間だったりする。

そして、レミリアやフランの出身が外国（確かレミリアは自称ブラド・ツペシュの子孫とかと言っていたから多分ルーマニア）というのもありこの紅魔館でも午前10時はお茶の時間だったりする。

えっ？今俺が何をしているのかって？

まあ所謂茶菓子ってやつを作っているところだ。

本来ならこういう仕事は咲夜さんが普段はやってくれるのだが、どこから聞き出したのか（多分レミリアから）フランが俺がそこそこ料理が出来る事を知ったらしく俺の作ったお菓子を食べたいと言い出したため本日のフランのおやつを俺が作る事になったのだ。

因みに本日のおやつはホットケーキだ。

理由としては久々に料理を作るから感覚を取り戻すためというのと、フラン自身が食べたことがなく話たら興味を持ったからだ。

とまあそんなこんなで生地の方は完成した。

後は焼くだけ。

そう考えた俺はコンロに火を着けて、温まったフライパンに油を少し入れなじませ生地を入れる。

じ〜〜〜

部屋に甘い匂いが立ち込める。

ある程度焼けた事を確認して生地を裏返す。

じゅじゅ

裏側にも焼き目が着いた所でそれをフライパンから出して皿に乗せ、再び生地を焼き始める…

じゅじゅ

……何なのだろうか…

先程からやたら視線を感じる…

フランではないことは確かだ。

何故ならフランは今出来上がったホットケーキを眺めるのに夢中になっているからだ。

（なら誰の視線だ？）

そう考えた俺は当たりを見回す。

じゅじゅ

「……………」

窓の方を見た俺は啞然とした。

「どうしたの？」

サト…ル……………」

いきなり黙り込んだ俺を変に思ったフランも俺と同じ様に窓を見て啞然とする。

「まずいよチルノちゃん！
見つかつちゃってるよ！
早く逃げようよ！」

..... まあ結論から言おう.....

？（バカ）がいた.....
しかも窓の外で俺の作ってるホットケーキを見ながら大量の涎を垂らして（後で拭いておかないと咲夜さんに怒られそうだ.....）緑色の髪をした気弱そうな妖精に引っ張られていた.....
まあ取りあえずは.....

「食うか？
ホットケーキ」

それを聞いた妖精二人はその場で大きく頷いた。

（30分後）

「あゝおいしかったゝ
にいちちゃんありがとね！」

「もゝチルノちゃん失礼だよゝ
あつ、ホットケーキおいしかったです。
ごちそうさまでした」

「うん！」

咲夜のつくったお菓子とちがったかんじだけどすごくおいしいよ！
「どうやら俺の作ったホットケーキはちびっ子三人組にはとても好評

だったようだ。

あの後、俺は取りあえず残りの三人分のホットケーキを焼くことにした。

まあ生地を多めに作っておいたおかげで二度手間にならなかったのはラッキーだったけど。

それにしても…

幼女が食べ物をパクつく光景はいつ見ても良いものだ。

というかこのシーンで萌えないロリコン（同志）はいない。

「そういえばじこしょ　かいがまだだったわね！

あたいチルノ！」

「大妖精といいます。

大ちゃんって呼んでください」

チルノと大妖精…

紅魔館の近くにある霧の湖の近辺を縄張りにする妖精コンビ（まあ実際にそうだと知ったのはついさっきだが）…

大ちゃんに関しては本編では台詞もないから詳しい事はわからないが、チルノに関しては結構知っている。

最強の妖精にして冷気を操る程度の能力の持ち主…

そして…

「ちゃんとじこしょ　かいができるあたいつてさいきよ　ね！」

どうしようもない？（バカ）である…と言いたいのだが、実のところ俺自身はチルノはそんなに馬鹿じゃないのではないかと考えている。

たった今言った台詞もチルノの見た目からすれば言ってもおかしくないような事だし、実年齢は兎も角精神的に幼いだけなんじゃない

かと思っている。

事実フランも年齢だけなら495歳と完全にロリババアだが、言動は幼女そのものだ。

因みに俺はロリババアもイケる！

アル・ア○フ最高です！

目指せ大十字○郎（ロリコン神）！

「そうか、俺は秋山慧。

最近ここで働き始めたんだ。

で、こっちが…」

「フランドール・スカーレット！

フランって呼んでね！

因みにサトルの“ご主人様”だよ！」

古今東西、相手が自己紹介をしてきたのならこちらも自己紹介で返すのが礼儀というものと、いうわけで俺とフランもチルノと大ちゃんに自己紹介をした。

なんだかフランの“ご主人様”という部分が弱冠強調されて聴こえたのはきつと気のせいだろう。

それにしてもフランの様子がどこことなく楽しそうに見える。

おそらく初めて同年代（精神的に）の子達と会ったから嬉しいのだろう。

フランは生まれてからの495年間を紅魔館の地下室で育った…

美鈴から聞いた話ではようやく最近になってから紅魔館の中限定ではあるが自由に歩き回れるようにはなったらしいが、それでも同年代の子との交流なんてものはこの紅魔館ではあるはずがない。

そういう事を考えるとやはりチルノや大ちゃん存在はフランにしてはとても新鮮なのだろう。

しかし、一つだけ疑問がある。

「なあチルノと大ちゃん。
一つ聞いていいか？」

「なに？」

「何ですか？」

「どうしてこの紅魔館に来たんだ？」

そう、コイツ等は一体何の目的でここ（紅魔館）に来たのか？
それが一番の疑問だった。

さっきも言ったが基本紅魔館には弱い妖怪は来ることがない。
来るとすればメイドの求人募集をしたときぐらいしかないが、それ
も現在はやっていない。

そもそも、チルノも大ちゃんも年齢（精神的な）的に有り得ない。

「ふっふっふ、そんなの決まってるじゃん！」

俺のそんな疑問に対してチルノは不敵に笑いながらそう言ってきた。
なんだ？まさかレミリアの予想が大当たりして俺目的で攻めてきた
のか？

「なんできたんだっけ？」

「そういえばなんで来たんだらう？」

………前言撤回。

やっぱりチルノは？（バカ）だった…
というか…大ちゃんも忘れてるのかよ！

…と思ったのだが考えてみれば妖精の殆どは頭が悪く、大ちゃんはその中でも比較的頭が良い方ではあるが、それでも妖精の中ではないただけである。

だから大ちゃんが紅魔館^{まじ}に来た理由を忘れていても何ら不思議ではない。

寧ろ大ちゃんの性格から考えると下手をしたら理由も聞かされずにチルノと一緒に来た可能性だってある。

「まあ兎に角、お前らは目的は忘れちゃったが紅魔館に侵入してふらふらしていたら何だが美味そうな匂いがしてきて、それに釣られてこの部屋に着いたと？」

「そういうこと！」

俺が少し呆れながら質問すると、チルノはそう堂々と答えた。

正直、そう堂々と答えられてもかなり困る…

けどまあチルノの事だ。

どうせ拾ったさっきの文々。新聞でも読んで（ちゃんと読めているのかは謎だけど）興味を持ったから大ちゃんを引き連れて紅魔館に来たとかそんな感じだろう………。だとしたらある意味レミリアの予想（それ自体が俺の推測だが）は当たっていたってことだよな……。まあものすごく凶暴な奴が戦闘を仕掛けてくるよりは遥かにマシだろう。

………あれっ？

そういえばコイツ等どうやって紅魔館に侵入したんだろう？

そう思ったとき…

“きやああああああ！！！”

外からまるで“ナイフで刺されたような”悲鳴が聞こえた…

「ねえサトル…」

今美鈴の悲鳴が聞こえた気が…」

「フラン…」

多分もう手遅れだ…」

ありがとう美鈴…

お前のおかげでチルノ達が侵入できた理由が解ったよ…

俺はおそらく咲夜さんに折檻されているだろう美鈴の無事を祈りながら心の中でそう呟いた。

「で？」

お前らはこれからどうするんだ？」

食後のお茶を楽しんでいる妖精二名に俺はそんな事を聞いた。

「どうするって…」

なにが？」

しかしチルノは状況が解っていない（というより何も考えていない）のかすつとぼけている。

「うーん、なんかチルノちゃんが用事があつたような覚えはあるんですけど…」

やっぱり思い出せないですし…

どうでしょう…」

それと比べて大ちゃんの方はちゃんと考えていたようだが、残念ながら答えにはなっていない…

しかし正直なところ状況としてはあまり良くはない。

チルノと大ちゃんは所謂侵入者だ。

それを通してしまった美鈴や黙認している俺が後で折檻（とは言っても美鈴は折檻済みだが）されるのもあるが、何よりチルノと大ちゃん危険である。

妖精だから死にはしないだろうが、咲夜さんにでも会ったら串刺しは間違いない。

あの人侵入者には容赦ないし…

まあ幸いにもレミリアは今外出（多分博麗神社）しているからこれ以上面倒くさい事になることはなさそうだな…

そんなことを考えていると…

「あつ、うゝ。

えつと…」

なんだかフランがなにか言いたそうな雰囲気で唸っていた。

唸っているフラン可愛い…じゃなかった、正直こんな状態のフランは始めてみるな…

「どうしたんだ？」

「えっ？

ううん、なんでもないよ…」

俺はフランにそう話しかけたが、逸らされてしまった。

「あつっ…

え〜と…」

しかしそれでもフランは相変わらず何かを言いたそうにしている。気になった俺はフランの目線を辿ってみた…ふ〜んなる程ね…

フランの目線の先、そこにはチルノと大ちゃんがいた。

俺が思うに、おそらくフランはチルノと大ちゃんと話がしたいのだろう。

しかし、恥ずかしいのか不安なのかは解らないがどうしても話しかけることが出来ないといったところか…

正直、その気持ちは俺自身経験があるからよくわかる。

だがふだんのフランは良くも悪くも無邪気な感じだから、そのような面があったことに少なくとも俺は驚かされた。

レミリアにしてもそうだが、もしかしたら吸血鬼という生き物は元来素直じゃない奴が多いのかもしれない。

（まあ俺も外の世界では素直じゃないって散々言われてたしな…）

外の世界での自分を思い出し俺は少しだけ笑ってしまった。

しかし俺の経験上、素直じゃないということはデメリットしかない。こういうことは自分から歩み寄る事が重要だ。

勿論俺自身がチルノ達にフランが話があるみたいだとも言えば簡単なのだろうが、こういう事はやはり自分から挑む事が大切だろう。故に俺は少々厳しいと思うが、フランの手助けはしない方が良いと思った。

「なあフラン…」

「なに？」

「何かを伝えたい時はちゃんと口に出さないとだめだぞ。」

黙り込んでちゃ何も伝わらないぞ」

「ふえっ？」

俺の言葉を聞いたフランは少々間の抜けた声を出して驚いていた。結局のところ俺は“手助け”はしなかったが“後押し”はしていた。まあ確かに少々甘いんじゃないかとは思うが、俺の言葉を聞いてチルノ達に話しかけるかどうかは結局はフラン次第だ。後は一切手を出さない。

「……………よしっ！」

しばらくフランは考え込んだ後何かを決心したようにしそう言い、そして…

「ねえ、チルノちゃん、大ちゃん…」

チルノと大ちゃんに話しかけた…

第？話 チルノと大妖精 前編（後書き）

前回から2ヶ月も経ってようやく更新しました：

待っていてくれた方々（いるのかわかりませんが）には本当にお待たせいたしました。

原因としては前回は投稿してすぐに急な引越しが決まりまして、更に引越した後も新しいバイト先を探したりしていたため非常に遅くなりました。（因みにまだバイト先は決まっていませんorz）しかも今回もかなりの誤字脱字が多い可能性が：

取りあえず話を変えますが、今回は？話と言うこともありチルノと大ちゃんが登場しました。

まあ本来は今回で全部チルノ達の話は終わらせる予定だったのですが、予想以上に長くなりまして、結局今回も魔理沙戦の時と同様に前編後編に分ける事にしました。

この感じだと第一部のラストの方は三話くらいに分ける事になりそうです。

それでは今回はここまでにします。

次回は今回の話のフランクサイドから始まります。

第10話 チルノと大妖精 後編（前書き）

正直4ヶ月も間が空いてしまいましたがお待たせしました。
連載再開です。

第10話 チルノと大妖精 後編

side フランドール

ただ一言“一緒に遊んで”と言っただけなのに…

「あつ、うゝ。

えつと…」

その言葉をこの二人…チルノちゃんと大ちゃんにどうしても言うことが出来ない…

本当にその一言を言えただけなのに…

どうしても拒否されるのが怖くて言い出すことが出来ない…

それに生まれてからの495年間一度も外に出たことがなかったから、わたしと同じ年くらいの子を見るのは初めてで、こういう感じで話せばいいのかも解らない…

「どうしたんだ？」

さつきから唸っているわたしを心配したのかサトルが声をかけてきた。

急に声をかけられて私は驚いて「えっ？」と間の抜けた声を出してしまった。

しかし、サトルを見た瞬間“サトルだったらなんとかしてくれるんじゃないか？”とそんな考えが私の頭をよぎった。

サトルと初めて出会ってからまだ一週間くらいだけど、サトルが凄く優しい人（とは言ってもわたしと同じ吸血鬼だけど）だったことはわかってるし、サトルならきつとわたしがお願いすればきつと

手伝ってくれると思う。

だけどこういうのは自分でやらなくちゃ意味がない。
だからサトルにお願いすることはできなかった。
だけど…

「あうっ…
え」と…」

どうしてもあと一歩が踏み出せない…

「なあフラン」

サトルがまた声をかけてきた…

だけどわたしは「なに？」と少しぶっきらぼうに返してしまった。

わたし嫌な子だ…

サトルは心配してくれているのにうっとおしいと思ってる…

きつと嫌われた…

そう思った…

だけど…

「何かを伝えたい時はちゃんと口に出さないとだめだぞ。

黙り込んでちゃ何も伝わらないぞ」

サトルはいつもと変わらない優しい感じに笑ってそう言った。

「ふえっ？」

正直わたしは驚いてさっきよりも更に間の抜けた声を出してしまった。

サトルが鈍感でわたしがうっとおしいと思ってしまったことに気づ

いていなかったのか、気づいていて尚その言葉を言ったのかはわたしにはわからないけど一つだけわかったことがあった。

きつとサトルはわたしが何をしたいのかがわかっていたのだろう。

だからこそわたしを後押しするかのような事を言ったのだろう。

自分^{サトル}が手を出したら意味がないから。

やっぱりサトルは優しい…

だからこそわたしはやらなくちゃいけない！

「……………よしっ！」

決意は固まった

「ねえ、チルノちゃんと大ちゃん…」

チルノちゃんと大ちゃんに声をかける。

「なに？」

「フランちゃんだっけ？」

どうしたの？」

チルノちゃんと大ちゃんが私の言葉にそう返してくる。

その反応に一瞬ひるみかける。

だけど…

（サトルは応援してくれている！

だったら怖いものなんて何もない！）

そう思ってたわたしは…

『フランと一緒に遊んで…』

その言葉をはつきりと声に出した…

side 秋山 慧

「フランと一緒に遊んで…」

フランがそう言った瞬間辺りが静まり返った。

チルノなんてポカーンとした顔をしている。

しかしそんなチルノ達とは逆にフランは不安そうな表情をしている。

まあ頑張った言っただのに反応がないんじゃないや誰だって不安にもなるか…

それにしてもフランのこの言葉は結構意外だと思った。

何故なら普段のフラン（+外の世界での情報も含めて）なら遊ぶ

相手は玩具と変わらないといった感じで、実際俺自身ここに来て直

ぐにその事をたっぷりと思い知らされている。

だからこそフランと一緒に遊んでくれと“頼む”と言うのは少なく

とも俺の知っているフランのイメージからはかけ離れているものだ

った。

まあもしかしたら元々こういう一面があったのかもしれないが、も

しそれが俺が来てから身につけたものだっただらそれはそれで使用人

冥利に尽きるものがある。

とまあそんな事を頭の中で考えてみたりしてみたが状況は相変わら

ずの沈黙である。

しかもいつまで経っても何の反応もないせいでフランは若干泣きそ

うな顔を始めてる。

（やっぱり少し俺も手助けするべきかねえ…）

そんな考えが頭をよぎり始めた時…

ゴガッ！

と物凄く鈍い音をたてていきなりチルノが文字通り“ぶっ倒れた”。

「おいチルノ…

お前は一体何をやっているんだ…」

「いやゝなんだか静かだったからうつかり寝そうになった！」

「「「……………」」」」

どうやらコイツは？どこるか空気も読めないらしい（まあ実際に本気で“からけ”と読みそうだが）…

流石に大ちゃんやフランも呆れた顔をしている。

つい数分前までのシリアスな空気はどこへやらって感じた。

「いやゝゴメンってばゝ

それじゃフランだっけ？

何して遊ぶ？」

あの重い空気を思いつきりぶっ飛ばした割に軽いな。

しかもその後“何して遊ぶ？”て謝る気無いだろ……………て…
へ？

「なにみんなポカ〜ンとしたかおしちゃってんのさ？
遊ぶんじゃないの？」

どうやら俺の聞き間違いってことはないみたいだ…

「本当に遊んでくれるの？」

フランがチルノに聞いた。

それに対してチルノは…

「あたりまえじゃない！」

それに、遊びのさそいにのらないヤツはいないわよ！」

と答えた。

そしてチルノはフランの手を取って…

「それじゃフランなにして遊ぶ？」

そう言つて再びフランにそう聞いた…

「ふう…

取り敢えずなんとかなっ たな…」

チルノがフランを引っ張つて大ちゃんと一緒に何して遊ぶかを話し始めてから俺は少し冷めてしまった紅茶を飲みながらそう呟いた。
フランは何百年もの間（おそらく生まれた頃から）その強力過ぎる力が原因でずっと紅魔館の地下に幽閉されていた。

しかも実際にそうなのかは俺にはわからないが、その間は外にも興味がなかったという話も聞いたことがある。

そんなフランが自分から進んで友達を作ろうとするのはおそらく精神的に良い傾向なんだろう。

しかし、同時に結構疑問なこともある。

少なくともフランが地下に幽閉されていたのはその強力な力以外に情緒不安定さがあった。

事実「サトル〜！」フランは俺と初めて会った「サトル？」時にいきなり襲いかかった「ちよつと！サトル聞してるの!？」

「うわっ！」

いきなり耳元でデカイ声を出されて驚いた俺はその声の方を向くと、いつの間にかさっきまでチルノ達と話していた筈のフランが俺のすぐ近くにいた。

若干ご立腹な感じで…

「なにぼけーっとしてるのよ！

早く始めようよ!」

「?」

正直考え事をしていたせいかフランが何を言っているのかさっぱり解らない（状況が理解できないという意味で）。

「なにが“?”よ!

みんなで鬼ごっこするって言ったじゃない!

ねっ?大ちゃん!」

「はい、フランちゃんの言うとおりお兄さんもフランちゃんが鬼ご

「つこやるって言ったら“うん”って言ってましたよ？」

フランの言葉に対して大ちゃんがそんな事を言ってきた。
言われてみれば確かにフランが鬼ごっこをやるって言っていたような気がする。

ついでに言えば俺も“うん”で言ったような気がしないでもない…

「あと、サトルじゃんけんしなかったからサトルが鬼だよ！」

こんどはチルノがそんなことを言ってきた……………

取り敢えず情報を整理しよう。

どうやら俺が考え事をしている間にもう何して遊ぶかはちびっ子達によって決定したようだ。

しかもいつの間にか俺も参加する事が決まってしまうているようだ。
さらに既にじゃんけんをしていたようでそれに気づかなかった俺が
鬼に決定したようだ……………って！！

「それじゃ始めるよ！」

よいい…「ちよつとまつ」ドン！」

俺の制止も虚しく、チルノの掛け声によって三人はキヤーキヤー言
いながらそのまま部屋の外に出てしまった。

俺も急いで部屋の外に出たが既にフラン達の姿はどこにもない。

チルノ達は所謂侵入者をやつた。

だから正直この状況は…

「かなりまずいよな…」

こりゃ…」

「へえ…」

何がまずいのかしら…」

「そりゃ、この事が咲夜さんにでもバレたら恐怖のお仕置きが……
へ？」

そう言えばフラン達が逃げていつてからは俺“一人だけ”だったよな……

なら俺は“誰と”話してるんだ？
そう思った俺は後ろを振り返る……
其処には……

物凄く“良い”笑顔で微笑んでいる咲夜さんがいた。

「慧……」

「ひいつ！」

「ここは託児所じゃないの……
そのくらいは解っているわよね？」

ああ解ってるさ！
解っているとも！

だけどフランに友達ができそうだから大目に見てほしいなあ……
なんてふざけたことも言えず、俺はただ咲夜さんの“良い”笑顔の中
のある意味レミリア以上の凄みにビビりまくって口をパクパクとす
る事しかできない……

「覚悟はできたかしら？」

そう言っただけで咲夜さんは愛用のナイフを取り出す……
やべえ……

アレ確実に銀製（対吸血鬼）だ…

しかもよく見ると血が着いてる…て事はアレさっきまで美鈴の頭に刺さっていたやつだよな…

それは兎も角グッバイ現世。

ちよつくら映姫様に説教されてくるぜ永遠に。

「なぐんて冗談よ」

「へ？」

「だから冗談よ。

冗談。

ちよつと脅かすつもりが本気でビビりまくってるからつい悪のりしちやつたのよ」

咲夜さんのネタばらしを聞いて俺は全身の力が抜けてその場に座り込んでしまった。

正直こういうのはマジで勘弁してくれ…

「銀ナイフを見せつけられた時には本当に心臓が止まると思いましたがよ…」

「なに言ってるのよ…

あなたの心臓はもう止まってるでしょ？

吸血鬼なんだから」

え？

マジで？

そう思った俺は自分の脈を計ってみる……………てマジだ！
本当に脈がない！

「その様子だと今気づいたみたいね…

それよりもあの妖精達に関しては問題ないわ。

お嬢様が出掛ける前に無視しても問題ないって言っていたし」

なんか凄く重要なのにサラッと流されたし…

それよりもなるほどね…

レミリアには既にお見通しってわけか…

「それにしても鬼ごっこか…

懐かしいわ…

私達も昔よく遊んだわね…」

ふと咲夜さんがそんなことを言ってきた。

しかし…

「咲夜さん…

なに言ってるんですか…

俺と咲夜さんが会ってからまだ数日じゃないですか」

と俺は答えた。

何故か咲夜さんは昔俺と遊んだみたいな感じのことを言ったからだ。勿論俺が言ったとおり咲夜さんと会ったのは数日前が初めての筈だ。それに咲夜さん自身も自分が言ったことに疑問に思ったのか驚いた顔をしている。

「確かに何を言っているのかしら私…

まあきつとあなたが紅魔館に違和感なく溶け込んでいるからそう言っってしまったんでしょう…」

そりゃあ溶け込めているのは嬉しいけど、それでもそんなこと間違えるか？

普通…

まあ咲夜さん天然な所があるみたいだしそう不思議でもないか…
それよりも…

「取り敢えず俺は今から鬼としてフラン達を捕まえてきますよ」

俺はフラン達と鬼ごっこをしていたことを思い出して、咲夜さんにそう言った。

流石にこれ以上長話をしているとフラン達が怒りだしそうだが…
俺はまだ死にたくない。

「そうだったわね。」

走り回っても大丈夫だけど、飾ってある物とか壊しちゃ駄目よ」

「ちなみにもし壊しちゃったら？」

「お仕置きタイムが待ってるわ」

「……………肝に命じておきます……………」

笑顔で恐ろしいことを言う咲夜さんにビビりながら俺はフラン達を探しに紅魔館を走り回ることにした。

その後なんとかフラン、チルノ、大ちゃんの三人を捕まえることが出来たが、第二ラウンドと称して今度は俺が三人に追いかけ回される（しかも俺以外はスペカアリで）ことになった…

そして毎回ごとくしつこいようだが時間は飛んで夕方…

とは言ってもまだ3月の半ばのため既に日は殆ど沈んで辺りはかなり暗くなっている。

まあおかげで体中についた生傷が高速で治癒してくれているが…

ちなみにこの生傷は鬼ごつこの最中フランやチルノにやられたものである（大ちゃんはひたすらオロオロしていただけだった）。

正直ちびっ子容赦なさすぎ…

だがそれがいい！

とても…いい！！

とまあ俺の変態思考は兎も角、時間も時間な為チルノ達は帰る事になったのだ。

「それじゃ気をつけて帰れよ」

あと、知らない人が何かくれるって言ってもついて行くなよ」

「あたいそんなばかじゃないもん！」

チルノはそう言っているが正直不安である。

それに大ちゃんが苦笑いをしている所を見るとどうやら以前に何度かホイホイついていったようだ。

本当に大丈夫なのか？

そんな事を考えていると…

「ねえチルノちゃん、大ちゃん…」

とフランがチルノ達に話しかけた。

その顔は若干不安そうな表情をしている。

一体どうしたのだろうか？

チルノ達も心配なのか…

「どうしたの？」

とフランに聞いた。

そしてフランは二人に…

「えっと…」

よければでいいんだけど…

またこうやって遊んでほしいな…」

と言った。

それを聞いた途端…

「あはははははは！！」

とチルノがでかい声で笑い出した。

一体どうしたんだ？

フランも驚いているのか目を丸くしている。

「いやごめんごめん。」

だってあたりまえなことくからおかしくて！」

「あたりまえ？」

チルノの答えに対してフランはそう聞き返す。

「そっ！

だってあたいたちもう友達でしょ！」

そう言ってチルノはフランを見てニカッと笑った。

「とも…だち？」

「そっ。」

もう一緒に遊んだんだからもう友達！
当たり前じゃん！」

それを聞いたフランは目を丸くしていたがすぐにいつもの無邪気な顔になり…

「ありがとう！」

と明るい声で言った……………

「サトル！」

わたし初めて友達ができたよ！」

チルノ達が帰ったあとフランが俺にそう言ってきた。

何百年もの間地下に幽閉され、地下からは出られても紅魔館からは出たことがなかったフランにとっては今日の出来事はきつと新鮮だったのだろう…

そう思った俺は

「そっか、良かったな…」

と言ってフランの頭を撫でた。

撫でられたフランは顔を赤らめながらくすぐったそうな表情をする…
その表情を見て俺はいつかこの少女を外に出してあげたい…
そして外はこんなにも広くて美しいものが沢山あるのだと教えてあげたい…
と、正直柄にもないことを心の中に誓うのだった…

その事が後に大事件を引き起こすとも知らずに……………

side レミリア

深夜一時過ぎ…

咲夜はいつものごとく主人であるレミリアに呼び出された。
用事は今日の状況報告である。

咲夜の話聞いた後レミリアは微笑を浮かべながら…

「やはり来たわねあの妖精…」

と言った。

咲夜はレミリアには運命が見えていることを知っているので差ほど驚いてはいない…
しかしレミリアはやけに不思議そうな表情をしている…

気になった咲夜は…

「お嬢様？

どうなさいましたか？」

と聞いた。

それを聞いたレミリアは表情を戻し…

「何でもないわ…

咲夜、今日はもう大丈夫よ。

下がちなさい」

と言った。

主人の言葉に従い咲夜は部屋から出た。

しかし自分の部屋に戻ろうとしたときレミリアの部屋から声が聞こえた…

“少しだが…

運命が歪んでいる…”

と……………

第10話 チルノと大妖精 後編（後書き）

これで今回の話は終了です…

相変わらずのアレなできですが楽しんでいただけたら幸いです。

先ずは今回かなり遅れてしまった理由としては1月から2月にかけてはテスト期間で書けなかったただだったので、2月の終わりに辺りにうっかり今まで書いていたデータを全部消去してしまい、その後地震などの影響で新しいバイトが忙しくなったりしたためここまで時間がかかってしまいました…はい、完全に言い訳です…すいません…

取り敢えず謝罪タイムは終了して、今回の解説になります。

今回は前回からの続きでフランがチルノや大ちゃんと仲良くなる話です。

まあ内容はほのぼの路線なんですけど、正直私の性格なのかなかなか上手いかなかったです…

バトルシーンとかは割と一気に書けるのですが…

後今回の話にはいくつか伏線が張られています。

まあはつきり言っただけかなりわかりやすいですが、興味のある方は楽しみにしてください。

まあ伏線回収はかなり後になりそうですが。

それとここからは雑談ですが、まどかマギカ良かったです。

何というか流石虚淵つて感じです。

正直自分もあんな感じにストーリーが作れたらなっと思っています。

ちなみに作者は以前にも書きましたが最初にやったエロゲがファントム（虚淵の処女作）だったりしたため彼の作品のファンだったりします。

それでは今回はここまでにしたいと思います。

次回はいよいよ第一章ラストバトル！

レミリア戦その1になります！

第一章はこのレミリア戦を三話から四話ほどやってから最後の二話で終了となります。

第11話 red night (前書き)

ヒャッホウ面白いように執筆が進むぜ！

と言うわけで今回は早めの投稿です。

そして今回からレミリア戦スタートです。

まあ魔理沙戦の時同様バトルパートの始めだけあってバトル要素が無いですが…

第11話 red night

…ザッ

「出して！

出してよ！

どうしてこんなところにとじこめるの！」

「あなたは力は危険なの…

だからここから出すことはできない…」

「やだよう…

お姉ちゃん！

ここから出してよ！」

「……………ごめんなさい」

…ザッザッ…

「ねえー美鈴ー

もっと遊んでよー」

「すみませんフラン様…

私もこれから仕事がありますので…

ですが明日も来ますからそれまで待っていて下さい！」

「うん…

それじゃお仕事がんばってね…」

「ありがとうございます。
それではまた明日」

ボタン…

「……………だけど…一人は…寂しいよお…」

…ザザザザザザザザ…

バジュツ

「ひい!?!」

グシユツ

「お止め下さい妹様!」

「えゝだつて退屈なんだもん!
それにあなた達（妖精）は殺したつて死なないんだから別にいいじやん!」

「ですが…ブベツ!」

「うるさいなあ…
死んじゃえ…」

…ザザザザザザザザザザ…

「いっしょに遊んでくれるのかしら?」

「いくら出す？」

「コインいっこ」

「一個じゃ、人命も買えないぜ……」

「あなたが、コンティニューできないのさ！」

……ザッザッザッザッザッザッザッ……

「出なさいフラン……」

今日から屋敷内だけなら自由に歩き回っても構わないわ」

「495年もこんな所に閉じ込めておいて今更？」

それに屋敷内だけってことはどうせ外には出れないんでしょ、お姉様？」

「……………」

……ザッザッザッザッザッザッザッザッ……

退屈……

結局地下から出れてもなにもない……

確かに地下にいた頃に比べたらすごくマシにはなったけど、結局退屈なのは変わらない。

「クソっあのふざけた格好した野郎共、思いっきり頭ぶん殴りやがって！畜生まだ痛えぞ……っーかそもそもここどこだよ！」

……………あれっ？

誰もいない筈なのにわたしの部屋から声が聞こえる…

ギィ

誰だろうあのお兄さん…

初めて見る人だけど…

またお姉様が退屈凌ぎで雇ったのかしら…

まあいいわ…

きつと暇つぶしにはなるでしょ。

「ねえ。お兄さんだあれ？」

「ああ…ごめん。俺の名前は……………」

ザ

目が覚めた…

サイドテーブルにおいてある時計を見るかぎりどうやら今は深夜三時を少し過ぎたくらいのようなのだ。

隣にはいつものごとく知らない内に俺のベッドに潜り込んでいるフランが幸せそうに寝ている…

流石に時期的にもう暑いだろ…

チルノと大ちゃんがフランと仲良くなってから二週間が過ぎた。

あれからチルノ達は毎日のように紅魔館にやってきてはフランと一緒に遊んでいる（そして俺はおもちゃにされている…

まあ悪くないけど…）。

そして遊んでいるときにチルノ達から館の外のことを聞いて興味を

持ったのか、館の外や俺の元いた世界についてよく聞いてくるようになった。

それがだいたい五日くらい前の話である。

その頃から俺はさっきの夢と同じ内容のノイズ混じりの夢を見るようになった。

いつも決まった内容で、ある少女が地下に閉じ込められて時間が経つにつれ段々と狂っていくという悲劇だ…

だが今日のは少し違っていつもより先があつた…

俺自身にも覚えのかる光景が…

「コレってやっぱりフ란の記憶だよな…」

フ란が起きないように俺は静かにそう呟く…

正直まだ確証があるわけではない…

たまたまこういう夢を連続で見ているだけかもしれない…

だけどこれがもし本当だったならフ란はきっと俺が予想していた以上に辛い思いをしてきたのは間違いない…

「なら、そろそろ行動に移す時かもな…」

その日…

俺はようやく覚悟を決めた…

「それで慧？……………さっきは“なんて”言ったのかしら…？」

朝、9時頃…

俺はレミリアの部屋で正座させられていた…

その場には俺とレミリア以外にも咲夜さんがいる…

しかも二人は若干呆れた顔をして…

何故こんな事になっているかと言うと、朝食の後フランがいなくなつてから俺がレミリアに「今日フランと香霖堂に行ってきますので昼はいらないです」と言つたのが原因だ。

因みに最初はレミリアも生返事で「わかったわ」と言ってくれたのだが、俺が「許可は取ったぜ！

ヒッハー！」というウハウハ気分でフランの部屋に行こうとした瞬間に咲夜さんに捕まって現在に至る…

まあ俺が何をしたかつたのかと言うと“ナチュラルに言つて許可を得てフランと一緒にお外へGO”という作戦だ…まあ完全に失敗した訳だが…

余談だが昼はいらないと言うのはこーりんに人里の美味しい店を聞いてそこで昼飯を食べるつもりだったからだ…

因みに今回の事はフランは知らない。

完全に俺の独断だったりする。

「慧…

もう一度聞いわ…

あなたは何て言つたの？」

「フランを外に連れ出す…

そう言いました」

レミリアの質問（カリスマオーラによる威圧付き）に俺ははつきりとそう答える。

「慧…

その言葉本気で言っているの…」

レミリアからの威圧感が更に上がる…

最早その表情には先程の呆れた雰囲気は一切無い…

隣にいる咲夜さんも珍しく不安そうな表情をしている。

おそらく俺の言っている事はそれほどんでもない事なんだろう…

だけど…そんなものはとうの昔に理解している…

はつきり言っただけのやろうとしている事は途轍もなく危険な可能性
を持っているということも…

だけど俺は…

“ フランに外の世界を見せてやりたい ”

そう決めたんだ！

だったら言う言葉は一つだけだ！

そこに恐れるものなんてなにもない！

だから俺は…！

「 ああ！

覚悟の上で言っている…！ 」

使用人としてではなく… “ 秋山慧という一人の吸血鬼 ” としてレミ
リアに対してそう言った。

それを聞いたレミリアは一瞬笑みを浮かべて…

「 あなたの言いたい事はわかった…

なら今夜零時に屋敷の地下に来なさい…

其処までは咲夜に案内させるわ… 」

そう言っただけで俺と咲夜さんを下がらせた…

その表情には何時ものようなふざけた感じは一切無く、ただ一つ俺

に負けず劣らずの覚悟の色が見えた…

「慧…

今回ばかりは諦めた方がいいわ…」

フ란の部屋に戻る途中に咲夜さんが突然そんな事を言ってきた。

「どうしてです？」

「はつきり言ってお嬢様はあなたと戦う気よ…

お嬢様もただふざけてフ란様を今まで屋敷に閉じ込めていたわけじゃないから…」

そう言つて咲夜さんはより一層不安げな表情になる。

咲夜さんが言いたい事はわかる…

はつきり言つて俺が正攻法でレミリアに勝つ事は“不可能”だ。

先ず妖怪というのは才能などの要因もあるが、基本は長生きなほど魔力や妖力のキャパシティが上がりそれに比例して強い。

レミリアは妖怪にしては妖怪にしてはさほど長生きな方ではないが、逆を言えばその若さで何千年と生きた大妖怪以上の強さを持った真正銘のバケモノだ。

それに加え準鬼級のパワーと準天狗級のスピード、さらには圧倒的な回復能力に分裂能力を持った“完全”なる吸血鬼。

吸血鬼化して1ヶ月も経たない俺には年齢的にも能力的にも勝てる相手ではない…

だが、そんなものは魔理沙の時も同じだった…

魔理沙も人間とはいえ数々の異変を解決してきた凄腕だ。

本来俺には勝つのは不可能な相手だった。

だがどんな強敵にも必ず逆転の隙は必ず存在する…

俺が魔理沙に勝てた（まあ降参だった）のもそれ故だ。

それに決意したのは今日だが、レミリアと戦う覚悟をしたのは二週間前にチルノ達が帰った後だ…

俺もこの二週間、ただ遊んでいたわけじゃない。

そう思いながら俺は新たに作った二枚のスペルカードを取り出し見る。

だがその内一枚は色が白い…

俺のスペルカードは本来俺の属性故に赤い色をしているのだが、そのスペルカードは紋様は入っているのだが色は真っ白なのだ…

そう、このスペルカードはまだ未完成だ。

俺の魔力の使い方が未熟なせいで完成する事ができなかったスペルカード…

だがこの未完成のスペルカードこそが今回最大のワイルドカード（切り札）だ。

チャンスは一度…

しかもそのチャンスが巡ってくる可能性も高いわけじゃないし、寧ろそのチャンスが巡ってくる前に俺がレミリアに敗北する可能性だってある…

（それでも…俺は決めたんだ…

アイツに…フランに外を見せてやると！）

だから俺は咲夜さんにただ一言「もとより覚悟の上です」とだけ言っただけ…

午後三時…

約束の時間まで残り九時間…

頭の中でレミリアと戦うイメージをする…

無論真つ向勝負ではなく幾重にも策を張り巡らせたものだ…

正直今の状況でできる事なんてこれくらいしかない。

だけど何もしないよりはマシだ…

だから俺はな「さ…るさ…」ん度「慧さん！」も何「さ…と…る…
さ…ん！」

ボカツ

………て

「美鈴！

何なんだよいきなり殴って！

マジで痛い！」

「だって慧さん何度呼んでも気づかなかったじゃないですか！」

む…どうやらイメトレに夢中になっていて気づかなかったようだ…
それでも…

「それでも殴ることはねえだろ…」

「だって何度も呼んでるのに気づいてもらえなかったら誰だって怒
りますし殴りたくなりますよ！」

うつ…ごもつともです…

「なんと言つか…ごめん」

そう言つて俺は美鈴に謝つた…
まあ悪いのは完全に俺だしな…

「……………慧さん、なんだか最近変ですよ」

俺が謝つた後、美鈴が突然そんなことを言つてきた。

「そつ、そうか？」

「はい！」

だつてここの所なんだか話しかけても上の空だし、さっきなんて…
！」

そこで美鈴は悲しそうな顔をして…

「まるで“これから死にいく”ような…
逆に誰かを“殺しにいく”ようなそんな顔をしてました…」

どうやら美鈴に心配されているようだ…
……………自分では表情に出していたつもりはなかったんだけどな…
どうも不安な気分つてのは周りから見ればわかりやすいものらしい。

「大丈夫だつて！
別に誰かを殺しにいくことも自殺しにいくこともないつて！」

不安そうな美鈴に対して俺はそう言つた。
まあ嘘ではない…

確かに勝てる見込みがない戦いではあるが負けることはあつても死

ぬことはないだろうし、レミリアを殺すつもりもない。
だが美鈴はまだ俺を疑っているのかジト目で俺を見つめてくる。
そして…

「まあいいです！

慧さんが言いたくないなら別に言わなくても構いません！」

と美鈴は言った。

それでもまだ不満なのか怒ってる感じがする…

「だけど…」

「ん？」

「慧さんが帰ってくる場所は紅魔館（こうまかん）なんですから、必ずここに帰ってきてくださいね…」

そう言った美鈴の表情はどことなく寂しげだった…
そんな美鈴に対して俺はただ「ごめん…」としか言うことができなかった…

夜11時…

約束の時間まで残り一時間…
俺は今自分の部屋にいる。
そして隣には…

「くすぴ…」

フランが寝ている…

おつと勘違いしないでくれ！

別にフランとパチエリー曰わく“禁則事項”をした後とかじゃないぜ。

何故か今日に限って一緒に寝たいって自分から言ってきたのだ。

「案外フランにも感づかれているのかもしれないな…」

俺は呟く…

そしてフランの寝顔を見る。

その顔はとても穏やかだが、その小さな体で今までどれだけ辛い思いをしてきたか、俺にはわからない…

495年…

人間だったら五、六回は人生を繰り返しているくらいの年月だ。

これほどの時間を地下で彼女は何を思っただろうか…

正直俺には想像もつかない。

しかし、俺が夢で見たようにそれは少女の心を壊すのには十分過ぎる時間だったのは想像に難くない。

（だからこそだ…）

もう一度俺は自分の目的を確認する…

“フランの外出をレミリアに認めさせる”

はつきり言っただけ外に出させるだけならこのままフランを連れて部屋の窓をぶち破って紅魔館から出ていけばいい。

だがそんなものは根本的な解決にはならない。

あくまでレミリアに認めさせることが重要なのだ。

そう思いながら俺は普段着ているエプロンから香霖堂で買ったジャケットに着替え腰のホルスターにアインとツヴァイを挿す。
朝、レミリアは明確な答えは言っていなかったがきつと答えは“NO”…つまりは“戦いは避けられない”。

トントン

誰かがドアをノックしている…

いつの間にか時計は零時五分前を指していた。

ということはきつと咲夜さんが迎えに来たのだろっ。

ドアを開ける…

そこにいたのは予想通り咲夜さんだった。

「慧…これから地下室へ案内するわ…

準備は…聞くまでもないわね…」

俺の姿を見て咲夜さんはそう言った。

「それじゃあ、案内するわ…

ついて来て」

そう言っただけで咲夜さんは歩き出し、俺もその後を追った。

地下室に行くまでの間俺と咲夜さんは終始無言だった。
互いに何も言わずひたすら地下に降りていく。
ただひたすら降りていく…

そしていつしかそれすらも終わりが見えてきた。
最後の段を降りる…

その先にはいかにも重そうな金属製の扉があった。
勿論ただの鉄の塊というわけではない。

その表面には機能こそしていないが魔術的な彫刻…おそらく強力な
結界…が施されていた。

「慧…

お嬢様はこの先で待っているわ…」

そう言われて俺は重い扉を開けて部屋の中に入る。

中はかなり広いが薄暗く周りがよく見えない…

それにどこことなく錆びた鉄の匂いがしてそのせいかヤケに頭がクラ
クラする…

だがそんな部屋の奥にレミリアはいた。

「時間丁度…

感心ね」

「まあ咲夜さんが時間に正確だからな…

」

レミリアの言った言葉に俺はそう答える。

正直、威圧感が半端じゃない…

しかしそんなことをお構いなしにレミリアは話始める。

「慧…あなたはさっきフランを外に連れ出したい…そう言ったわね」

俺は無言で頷く。

「ならこれを見てもう一度同じ事が言える？」

そう言っレミリアは右手を上げパチンと指を鳴らした。
その瞬間部屋に灯りが灯りようやく辺りが見えるようになった…が…

「……………凄まじいなコイツは」

俺は思わずそう呟く。

当たり前だ。

何故なら…

その部屋は辺り一面すっかり黒い染みとなった血がこびり付き、そこらじゅうに無数のクレーターや爪の跡が残されていたのだから。そうさつきからしていた鉄臭さはこの部屋にこびり付いていた血のものだったのだ。

そりゃ頭もクラクラするぜ…

なんたつてそこら中に“餌”があるのと同じなんだからな。

だが俺が本当に驚いたのはそんな事じゃない。

俺が本当に驚いたのはこの部屋の惨状が“夢と全く同じ”だということだ。

「あまり驚いてないわね。

或いはもうコレを“知っていた”のかしら？」

畜生、完全に凶星だよ…

正直、これじゃ主導権を握られている状態だ…

（まあ、そんなものは最初からだな）

そう思った俺は無駄な反論をせずに黙りを決め込むことにした。

それに今の話から推測するに、レミリアはきっと俺がフ란の記憶を夢で見ている事を知っている。

知っている事をわざわざ説明する意味もないだろう。

「まるで、いまさら説明することもないだろうって顔ね…まあいいわ。それじゃあもう一度だけ聞くわ。」

この部屋の惨状やフランの記憶を見て……………あなたはまだ「フランを外に出す」なんて言える？」

レミリアはそう言って再び……いや、俺がフランの記憶を見た事も踏まえてさっきと同じ質問をしてきた。

サトル！

わたし初めて友達ができたよ！
☺

二週間前チルノ達が帰った後にフランが言った言葉を思い出す。フランにはもっと友達ができる…

外に出ればそれは確実だ。

勿論、外に出ればこの部屋でおきた惨状が繰り返されるかもしれない。

だけど…そうなりそうになったら俺が止めればいい！
だから俺は…

「ああ何度だって言ってるさ！俺はフランを外に出す！」

そうはつきりと宣言した。
それを聞いたレミリアは……

「くくっ あははははははははは！」

と笑い出し…

そして…

「言っただけな眷属風情が！

ならその覚悟私に示してみせろ！！」

と言って全身から魔力を放出させた。

まるで血のように紅い色をした魔力を。

「上等だ！

ならお望み通り魅せてやるよ！！

俺の…覚悟を！！！」

そう言っただけ俺もホルスターからアインとツヴァイを抜き銃口をレミアアに向ける。

もう引き返すことはできない…

戦いの火蓋は切って落とされた。

ならそれは決着が着くまで止まることはない。

紅に染まるこの部屋で、二つの紅が今ここに激突した…

TO BE CONTINUED

第11話 red night（後書き）

これで第11話は終了です。

今回はいつもより（とは言っても前回は4ヶ月振りでしたが）かなり早くの投稿でした。

原因はバトルパート開始というのもあってテンションがハイになっていた為面白いように執筆がサクサク進んだのが理由です。

まあ駄文は相変わらずですし、誤字脱字は酷そうですが…

とまあ毎回恒例の自虐はここまでにして今回の解説です。

今回はバトルパートの開始だけあってまだバトル要素は無く主に慧が戦う目的を再確認する話です。

故に動機が動機なだけあって全体的に内容も暗いです。

まあ本格的なバトルは次回からになりますし、ここからが熱い展開になっていきます。

それと今回のシナリオには関係ないのですが、以前三人目のヒロインを二章に出すとか翠香かルーミアにしたいとか書いてましたが、感の良い方はもう前回でお気づきでしょうが咲夜さんによろと思っっています。

理由は最近買った東方のボーカルアレンジのジャケットの咲夜さんの絵が素晴らしく、その瞬間咲夜さんルーミの内容が閃いたと言うのが一つ。

もう一つは単純に翠香とルーミアをシナリオに絡ませ辛くなったからです。

ギャグパートでならこの二人は割と絡ませ易いのですが、シリアスパートになると内容が紅魔館や吸血鬼といったテーマに偏りやすくなり、特に物語終盤はシリアスパートとバトルパートオンリーです。なので全くと言っていいほど絡ませられなくなります。

それに現在の状態では翠香ルーミは問題の丸投げ、ルーミアルトは他のルートのラスボスが出番なしになってしまったためヒロインに

するのは難しいと判断しました。

ただ二章では分岐点を用意するつもりでいますので、そこでゲームでのバッドエンド的な感じでルーミアエンドと翠香エンドを用意するかもしれません。

それでは今回は以上です。

第一章も残り四話となってきました。

慧とレミアの戦いの行方は？

そして慧はフランを屋敷の外に連れ出す事は出来るのか？

第12話 blood night（前書き）

お待たせしました。

第12話です。

正直バトルシーンはムズいです。

あと今回は痛いです（物理的に）。

「訂正」5月27日

今回レミリアのスペル名を誤って神槍『グングニル』（本来は神槍『スピア・ザ・グングニル』）と書いていたため訂正します。

第12話 blood night

正直、俺は甘く見ていたのかもしれない…

ドガガガガガガガガガ！

まあ確かに俺がレミアに勝てる可能性はかなり低いし、勿論それを自覚していたさ…

ドドドドドドドドドドドドド！

だけどさ…

ズガガガガガガガガガガ！

「だけどさ…」

ドガガガガガガガガガガ！

「なに？」

あれだけのことを言っておいて、所詮その程度のものなの？」

「こんなにも圧倒的なのかよ！
ど畜生が！！」

はつきり言おう…

状況は“最悪”なくらいに劣勢だった。

戦闘開始から大体五分程は経っているが、俺は既にスペカを一枚使っている…
フレイムウォール

だがレミリアの奴はいまだにスペカを使用していない。

スペルカードバトルのルールでは別に同じカードは一度しか使えない訳じゃない。

しかし自分の手札を晒すという行為は自分の首を絞めるのと同じだ。それはこのスペカバトルでも変わらない。

「ほらほら！

ぼけっとしてると大怪我するわよっ！！」

そういつてレミリアは無数の弾幕を俺にぶつけてくる。

マズいな…

まるで散弾じゃねえか！

範囲が広過ぎて避け切れねえ！

「チイツ」

仕方ない…

そう思った俺は懷からスペカを出して…

「炎符『トップガンドライブ』！」

発動した！

「うおおおおおおお！！」

全身に炎を纏った俺は炎の推進力で加速し弾幕の範囲外に逃げる。

「へえ…

今のは本気で当てるつもりだったのだけど、なかなかしぶといわね。だけどこれで“2枚目”よ！」

ああわかってるよクソツタレ！
だけどレミリアが言っている通り、今の状況はかなりマズい。
このままじゃ確実に何も出来ずに終わる……………だったらその状況
を覆せば問題ねえだろう？

「クツクツ…
クハッ」

俺は不適に笑い出す…
その姿を見たレミリアは不信そうな顔をする。
それでいい…
そもそも俺の実力でレミリアに勝てないことなんてわかりきったこと
とだ。

それに真っ向勝負は嫌いじゃないが、俺の流儀じゃない…
狙うなら…相手の意表を突いた一撃だけだ！

俺は右手に持ったアインをホルスターに戻す…
この状況下で俺のそんな余計に自分の首を絞めるような行動を見て、
レミリアの表情はより一層険しくなる…

ドクンッ

既に象徴と弱点シンボルという意味でしか機能していない動かない筈の心臓
が脈打つ…

それに伴い魔力の流れが加速する。
ああ、わかってるさ…

何も持っていない右手を前に出す…
手のひらを上に、甲は下に…

“序章（お遊び）はここまでだ”

ツヴァイの照星を右手首に当てる…

“ならば“此処”からが…”

そして…

「シヨウタイムだ!!」

ザシュツ

その手首を切り裂いた！

「なっ…なに考えてるのよ!?
絶望し過ぎて気が触れたの!?!」

俺のぶっ飛んだ行動に遂にレミリアが声を上げる。
当たり前だ。

銃を片方しまったかと思えば突然のリストカット…
普通なら確実にビビる。

寧ろ精神がマトモなら驚かない奴はいない。

意外な行動で乱れた精神はそう簡単には落ち着かない…

これだけでもなかなか効果ありだな。

それにラッキーなことにレミリアが“驚いた”。

それは俺の“この行動”を知らなかったということ。

つまりはレミリアは自らの能力“運命を操る程度の能力”で未来を
予知していないということだ。

「だったら…」

そう言っただけは右手に血を溜める…

はつきり言っただけ茶苦茶痛い。

吸血鬼の高速再生で出血がすぐに止まらないように手首の半分くらいの深さまで切り裂いたうえに、本来刃物じゃない照星で無理やり引き裂いた…いや、実質手首の肉をえぐり出したのだから当たり前だ。

よく見ると骨も見えてるし、人間だったら確実に死んでいる。

だが出血も相当だが、ある程度出血量を制御出来るから何とか意識は保ってられる。

手に一杯血が溜まる…

準備完了だ。

「これでも…

くらいやがれ!!」

そう言っただけは自らの血をレミリアに向かって飛ばした！
血飛沫はレミリアに向かって飛んでいく…だが。

「何をするかと思えば驚かせた後に血を使った目潰し？
とんだ期待はずれね…」

そう言っただけレミリアは俺の放った血飛沫をワザとギリギリで回避する。

ああやっぱりレミリアは油断してやがる。

ソイツが…

「ソイツがテメエの命取りだ！
レミリアアアアア!!」

“ I · m b l a z e (我は紅蓮の焰也) ” ！！」

そう言つて俺は右手を前に出し虚空を掴む…その瞬間！！

ドゴン！

「！？」

血飛沫が“爆発”しギリギリで血飛沫をよけたレミリアはその爆風で吹き飛ばされた！

新技“ブラッド・バレット・ボム”…

血液を散弾のように飛ばし、任意の場所で爆破させる技。魔力は血液に多く溶けており、尚且つ身体の一部だ。

ならそれを利用すれば遠距離にあるものを発火させられるのではないか？

そう思つて作つてみた技だったが、まさかここまでとはな…

正直予想以上の破壊力だ。

まあそれは兎も角…

「弾幕ごっこはスペカだけじゃねえんだぜ…b a b y (お嬢さん)？」

「お前がそんな事を言つと正直気持ち悪いわ…

それに、その程度で調子に乗らないことね…若僧が！！」

ドゥドゥドゥドゥドゥドゥドゥ…

俺の挑発を聞いたレミリアが、起き上がるとともに弾幕をバラまいてくる。

その弾幕を俺はうまくかわす！

どうやら挑発にかかってくれたようだ。

それで…いい…

今のところ思惑通りだ。

ドンドンドンドンドン！

レミリアの攻撃に対して、俺も左手に残ったツヴァイで反撃する。

右手首からの出血は相変わらず酷いが構いやしない！

俺は地下室を駆け抜ける！

それを追うようにレミリアは追撃するが、俺もツヴァイで反撃し続ける！

ドガガガガ！

ドンドンドン！

ドガガガガ！

ドドドドド！

一進一退の攻防…

それを表現するとするならば正にそれだった。

追撃するレミリアに対しツヴァイを連射、時にブラッドバレットボムを絡めての攻撃！

右手首から血を垂れ流し俺は駆ける！

頭は血の匂いと大量出血でクラクラする。

この程度では死にやしないだろうが、それでも油断したら意識が飛びそうだ…

だがそれでも俺は地下室を駆け続ける！

その一步一步を勝利への布石とするために！

そして…

最後のレミリアの弾幕をよけ、俺はレミリアに背を向けた…

「何をしてるの？」

今更になって逃げるつもりなのかしら？」

レミリアが俺を蔑むかのような顔をしてそう言う。

だが俺はその言葉を聞いて確信する。

“勝った！！”

俺は懐から一枚のスペカを出す。

この感じだとレミリアは気づいていないだろうが、現在この部屋にはちょうどレミリアがいる位置を中心に魔法陣（見様見真似だが）が描かれている。

“俺の血”で描かれた赤い魔法陣が…

つまり現在この部屋の一部は一種の爆弾と化している！

そしてこのスペルカードは血を爆破させる起爆スイッチであり、同時にその威力を倍増させる。

（まさかここまでうまくいくとはな）

そう思いながら俺は引きつつた笑顔を緩める。

右腕を上げる…

その手には一枚のスペカ…

後ろにいるレミリアの表情はわからないが、スペカを確認出来ているならこう思っただろう…

“罠に嵌った”と…

ならコイツで終いだ！

そう思いながら俺は“スペルカードの名を唱えた”：

「スペルカード…」

炎符『ブラッド・エクスプロージョン』…」

その言葉とともに魔法陣が起動する！

炎のような紅い光を放ち異形の紋様が浮かび上がりそして！

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

大爆発を起こした！

炎符『ブラッド・エクスプロージョン』

俺の第四のスペルカード…

俺の血を利用した技…ブラッドバレットボムを応用したスペルで俺の血の爆破範囲と破壊力を大幅に上げるスペル…

単体では全く役立たずだがあらかじめ自分の血で描いたものの大きさによって範囲も破壊力も変わる。

まあ二度やりたくねえけど…

正直出血多量でキツイ。

まあコレだけの威力だ流石のレミリアも…

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「え……………」

ホッと一息ついた瞬間突然そんな声が聞こえた。
まさか！？

「チイツ！

炎符『ヴァーミリオン』「遅いのよ！」

ザクッ！

それは一瞬の出来事だった…

そう…一瞬で…

「マジ…かよ…」

“俺の左腕が肩から無くなっていた”

その左腕はツヴァイを握った状態で俺の後方数メートルの所にある。

そして…

「まさか、私にスペカと能力を使わせるとわね…
けど後一步足りなかったみたいねえ！」

俺のスペルで半壊し燃え盛る部屋をバツクに、崩壊した天井の穴から差し込む月明かりに照らされたレミリアが其処にいた…

その右手に血の着いた神の槍グングニルを持って…

そう…俺の左腕はレミリアに肩から切断されたのだ。

「ぐうつ…」

ようやく今になって激痛が走る。

既に血の量が足りていないため出血は少ないが、あまりの痛みに既に視界がぼやけ始めている。

ドガッ

レミリアの蹴りが俺の腹に炸裂し、俺は無様に仰向けに倒された。起きあがるうにも左腕がないのと力が入らないせいで起き上がれない。

「今のスペルはなかなかだったわよ…
けど所詮はその程度よ！」

そう言ってレミリアは俺の残った右肩を…

ボキッ

「グアッ！」

足で外した。

これでもう俺は反撃できない…
情けない…

足があるだけマシだがまるで達磨だ…
後一步…

油断さえなければ勝負はまだわからなかった…
この敗北は俺自身の失態だ…

………敗北？
何を考えてるんだ俺は？

「正直、あなたは期待以上よ…
だけど今回はここまでよ…」

そう言ってレミリアはグングニルを片手で持ちながら俺の胸倉を掴んで投げ飛ばす。

負けるのか？

俺が？

そしてグングニルを構えながら俺の方に突撃してくる。

なにもできずにこれで終わりか？

俺は何もできる筈もない空中で足掻く。

もしかしたら外れた肩がはまるかもしれない、という希望的観測で…
だがそんなものは起こるはずもなく、グングニルは俺の腹に突き刺さっ…

「サトル　！！！！」

グングニルが刺さる刹那、突然フ란の叫びが聞こえた…
だがそれを確認する間もなく…

グングニルは…

俺の身体を…

貫いた…

T O B E C O N T I N U E D

第12話 blood night（後書き）

これで今回の話は終了です。

前書きでも書きましたが戦闘シーンを文章にするのは難しいです…
それでは今回の解説です。

先ずは慧の血についてですが、慧の血液は能力の影響で一種の液体爆弾と化しています。

爆破できる期限は完全に乾燥するまでですが、少量でも大爆発を起こします。

その上汎用性もかなり高く、使いこなせばファンネルみたいな事も可能です。

今回出た新技、ブラッドバレットボムやスペルカード、炎符『ブラッドエクスプロージョン』もその応用です。

因みにブラッドバレットボムはスペカではありませんので、慧はもう一枚スペカを隠し持っています。

それがどう物語に出てくるかはもう少しお待ちください。

今回の解説は以上です。

ここからは雑談になりますが最近慧の変態度が下がっている気がします…

まあシリアスな内容が続いてるから当たり前なのですが、多分その反動で暴走させます。

それでは今回はこれで終了です。

次回もレミリア戦の続きです。

今回で半分くらいなので第一章もあと三話（サブシナリオを含めると五話）で終了します。

感想やアドバイスもお待ちしています。

それでは…

第13話 dead night (前書き)

忙しくて遅れましたが、第13話はじまりです。

第13話 d e a d n i g h t

s i d e レミリア

「スペルカード…」

炎符『ブラッド・エクスプロージョン』…」

慧がそう言った瞬間足下が紅く輝き始めた。

正直私は彼を過小評価し過ぎていた。

確かに慧は強い。

しかしその強さは“フランの血”の影響と、私の渡した魔銃…ファントムの力があつてのものだと思っていた。

しかし彼本来力はそういう直接的なものではなかった。

戦闘中の判断力！

勝利のためならルールの範囲内限定だが手段を選ばない貪欲性！

そして…どんな絶望的な状況でも諦めない圧倒的な精神力！

この私ですら一瞬でも恐ろしさを感じた程だ！

確かにまだ慧の肉体はまだ半分は人間で、魔力も大したことはない。

だが、その魂は紛れもない吸血鬼バケモノそのものだ！

「本当に面白い男ね…」

あなたは…」

私は静かに笑いながら呟く。

おそらく満身創痍の慧には聞こえていないだろう。

いや…確実に聞こえていない。

なぜなら…

彼はこの後私にスperlブレイクされ、それが原因で私に敗北するのだから。

そう私は途中からではあるが自信の能力…『運命を操る程度の能力』で未来を見ながら戦っていたのだ。

卑怯？

確かにそうかもしれない…

だけど私はこの戦いは負けることができない。

慧がフランを外に出したいという気持ちはわかる。

私だって同じ気持ちだ！

だけど情緒不安定なフランが、万が一幻想郷の人間を殺してしまったら？

そのときはフランが退治…つまりは殺されてしまっ、博麗の巫女である霊夢によって…

大切な妹を殺される…

しかも殺すのは同じくらい大切な友人…

それにフランの力は洒落にならないくらい協力だから、霊夢も無事ではすまないだろう。

最悪私は大切な人を二人も失っ…そんな事、耐えられるわけがない！だからこそ私はフランを今まで屋敷に閉じこめていた…

まあ結局地下に閉じこめているのも耐えられなくなって、屋敷内限定で出歩けるようにしたのだが。

そして、そんなときにやってきたのが慧だ。

フランの血を受けた後天性の吸血鬼…

血を受けるといのは、その力を受け継ぐと同じ…
私は思った…

『彼を強くすれば、誰も悲しまずにフランを自由にしてあげることができるのではないか？』

だから私は慧を使用人として雇い、魔を守護するといわれる魔双銃ファントムを彼に与えた。

さらには慧により強く、そして経験を積んでもらうために幻想郷でもトップクラスの強さを持つ魔理沙と戦わせた。
全ては大切な妹のために…

事実慧は私の期待通り日に日に強くなっていた。

しかし、そこで誤算が生じた。

見えている運命がズレ始めたのだ。

始まりはあの妖精達が来るのが早かった事だ。

それだけなら時折ある微妙な誤差程度のモノだったが、あろう事がそれが原因で慧が行動し始めてしまったのだ！

本来の運命なら慧はまだ私に戦いを挑むことはない。

彼が私に挑んでフランを外に連れ出すのは今から半年程経ってからだったのだ。

まあそれでも私には勝てなかったのだから、今の慧が勝てるわけが無い。

これは運命の修正だ…

今なおズレつつある運命を元の形に戻すだけだ。

だからこそ…

私は負けるわけにはいかない！！

「スペルカード！

紅符『不夜城レッド』！！！」

その言葉と同時に…

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

慧のスペルが炸裂した！

「くっ！」

凄まじい威力だ…

正直後少しスペル発動が遅かったら私ですらただではすまなかっただろう。

だが…やはり何かがおかしい。

そもそも私の見た運命では、慧は自分の血を使った戦法もスペルも使わなかった…いや、今はそんな事を考えている暇はない。

慧のスペルと私のスペルが衝突した影響で地下室は半壊状態（天井が一部崩れて外が見える程）なうえ、火の海と化している。

そのおかげで慧はまだ私が動ける事に気づいていない。

（たたみかけるなら今ね）

そう考えた私は懷からスペルカードを取り出し…

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

発動する！！

その瞬間私の右手に紅い魔力で出来た槍が出現する！

「え……………」

私の声を聞いた慧は一瞬間抜けな声を出して驚いたが、すぐに体勢を立て直してスペルを発動使用とする…だが！！

「遅いのよ！」

ザクッ

そう言つて私は問答無用に慧の腕を肩から切り落とした。
そして万が一の事も考え、すぐに後ろに下がる。

「マジ…かよ…」

慧のその言葉は私が無事だったことに対してなのか、それとも一瞬で形勢を逆転された事に対してか…
どっちにしても変わりはない。

「まさか、私にスペカと能力を使わせるとわね…
けど後一步足りなかったみたいねえ！」

まるで挑発のような言い方だが、その言葉に嘘はない。
事実慧はよくやった。

この私ですら油断し続けていたら確実に負けていただろう。
だがまだ足りない…

そう思った私は再び慧に接近し腹に蹴りを入れる。

左腕を切り落とされてガードできない慧はそれをマトモにくらって
顔を苦悶に歪めながら倒れる。

更に私は倒れた慧の残った右肩を踏みつけ…

「今のスペルはなかなかだったわよ…

けど所詮はその程度よ！」

ボキッ

その肩を外した！

「グアッ！」

慧は更に顔を歪めて苦しむ。

その姿を見て心が痛まないわけではない…

だが…慧にはまだまだ強くなってもらわなければならない！

この私を倒し、暴走したフランすらも止めることが出来るくらいに
まで…！

だから…

「正直、あなたは期待以上よ…

だけど今回はここまでよ…」

そう言っただけ私には慧を片手で投げ飛ばしグングニルを持って突撃する。
慧は必死に足掻くがどうにもならない。

そしてグングニルが慧の腹を貫こうとした…だが！

「サトル　…！！」

突然フランのそんな悲鳴が聞こえた。

私は声の聞こえた方を見る…其処には！

顔を真っ青にした半泣き状態のフランがいた…！！

何故ここにフランがいるのかはわからないが、正直かなりマズい状
況だ…！！

私はグングニルを解除しようとするが時すでに遅し…

グングニルは慧の身体を貫いた…

慧の様子がおかしい。

それに気づいたのは一週間くらい前からだ。

話をしていたら突然ボケーンとし始めたり、時折普段の慧をみていたら考えられないくらい怖い顔をしていたり…

その上夜中にこっそりと新しいスperlを作っていたりと、変な行動が多くなっていた。

めーりんも私と同じことを言っていたから勘違いって事はないと思う。

だから私は真相を確かめるために今日は慧の部屋に行くことにした。

夜：私は慧の部屋で狸寝入りってやつをしている。

理由は様子のおかしい慧を監視するためだ。

慧はそんな私を見て完全に寝てると思っっているようだ。

私の演技もなかなかのものだ。

将来は女優にでもなろうかしら…

そんなことを考えていると…

トントン

と誰かがドアをノックする音が聞こえた。

一体こんな夜中に誰が来たんだらう？

そう思って薄目を開けると、どうやら咲夜が来たみたいだ。

どうやら慧と話しているみたいだけど、ドアとベッドの距離が離れているからよく聞こえない。

それにしても何でさくやが…？

まさか！

『咲夜さん！』

俺、咲夜さんのことが…！』

『その気持ちは嬉しいけど駄目よ…
私はお嬢様のモノなの…』

『そんなもの関係ない！
俺はあなたのことを愛しているんだ！
だから咲夜さんの答えを聞かせて欲しい！』

チュッ

『！…！』

『これが私の答えよ…』

『咲夜さん…』

『慧…』

的な感じ！？

下手したら駆け落ちってやつ！？

それだったらサトルが様子が変だった説明もつくよね！？

それは兎も角…

このままじゃさくやにサトルを取られちゃう！

そう思った私はサトルとさくやの後をこっそりついて行くことにし

た。

どうも、様子がおかしい…

サトルとさくやの後ろについて行ってるうちに私はそう思い始めた。まず二人の間に会話が全く無い。

その上、さくやは凄く悲しそうな顔をしている。

サトルも無表情…いや、今まで見たことがないくらいに冷たい表情をしている。

そして…

「えっ…？」

サトルとさくやは地下室への扉を開けてそこに入ってしまった。

“495年間私が閉じ込められていた、あの地下室に…”

正直、あそこにはもう二度と入りたくない…

だって、あそこには嫌な思い出しか無いから…

ただどあそこに行かなきゃサトルが何を隠しているのかわからない。だけど…

そうやって扉の前で悩んでいると…

「ふっフラン様…

どうしてここに…」

いつの間にかさくやが戻ってきていた。その後ろにサトルの姿は無い。

「ねえさくや…
サト…ッ…！」

ザザッ

「なに？」

あれだけのことを言っておいて、所詮その程度のものなの？」

「こんなにも圧倒的なのかよ！
ど畜生が…！」

ザザッザザ

さくやにサトルの居場所を聞こうとした瞬間、突然そんな映像がノイズと共に頭を過ぎった。

（何…今の…ッ！）

ザッザザザッ

「ショウタイムだ…！」

ザシユッ

ザザッ

再び頭にノイズが走ったと思ったら、今度は別の映像が頭に流れた。
今度は誰かが自分の手首を引き裂いている映像だ…ッ！

ザザザザザッ

「ソイツがテメエの命取りだ！
レミリアアアアア！！」

“ I · m b l a z e (我は紅蓮の焰也) ” ！！」

ザーーーーー

またしてもノイズと一緒に映像が流れる。
見えたのはお姉さま？
そして聞こえたのは…

「フラン様？
フラン様！？」

さくやが急に黙り込んだ私を心配してか、しきりに私を揺すっている。

何故だろう…

さっきからいやな予感がする。

ドクンッ

動かない筈の心臓が動き出す…

まるで私を急かすかのようにドキドキしている。

「いかなきゃ…」

「えっ？……きゃっ」

私はさくやを突き飛ばして地下室に向かって走り出す。
さっきまでの迷いを振り切って…

私が閉じ込められていた地下室の入り口までの道のりはかなり長いある程度私が暴れられるようにかなり広く作られているくせに入り口は一つしかなく、その上一番下まで行かなくちゃ入れないからだ。その入り口までの長い階段を私は駆け抜ける。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

この紅魔館でこれだけの大爆発を使うことが出来るのは、炎を操れるサトルだけだ。

私は急いで入り口に向かう。

扉の向こう……そこにはグングニルを持った“お姉さま”が、ボロボロで既に左腕を失って倒れている“サトル”の右腕を今まさに外したところだった……

どうしてお姉さまはサトルと戦ってるの…？

それは簡単じゃん。

い
『

どうして…！

『そんなのわかんないよ。

けどアイツ（お姉さま）がわたしの玩具^{サトル}を壊したのは事実だよね？
ほら、見てみなよ』

私はお姉さまとサトルを見る…

「正直、あなたは期待以上よ…
だけど今回はここまでよ…」

そう言ってお姉さまはサトルを片手で投げ飛ばした。

そして投げ飛ばしたサトルに向かってグングニルを持って突撃する…

「サトルー！！！」

それを見て私は悲鳴を上げる。

一瞬サトルとお姉さまが気づいたような気がしたが、そんなことで止まるわけではない…

グングニルはあっさりとサトルの体を貫いた…

『これでわかったでしょ？』

サトルを刺したお姉さまは今度は私を見た…
その表情は啞然としている…

『だけど、そんなの関係ないよね？』

うん関係ないね…

『そうだよ！』

大事なのは、お姉さまがサトルを殺ったって事実だけ！！』

ドクンッ

動かない心臓が脈打つ。

そう、お姉さまがなんでサトルを殺したかなんてどうでもいい…
どうせまた“わたしのため”とかって言い出すのがオチだ。

問題なのは“わたしのサトルをお姉さまが殺った”ということだけ…

「アハッ…アハハハハハ！」

『笑っちゃうよね？』

いつもいつもわたしのためとか言ってる、やってることはわたしを傷つけてばかり！』

そうだ…お姉さまいてもいつもわたしのものを奪っていく！

『そんなお姉さまは！』

そんなお姉さまは…

『殺しちゃえ！』

「死んじゃえ…」

スペルカード、禁忌『レーヴァテイン』」

side レミリア

「死んじゃえ…」

スペルカード、禁忌『レーヴァテイン』」

ゴォッ

そう言つてフランはスペルを発動して私に切りかかってきた。

「くッ！」

物凄い速さだったが、私はギリギリの所でそれをかわす…だが！！

「逃がすかつ！！！」

フランのその叫びと共にレーヴァテインの刀身が伸びる！

「ぐうっ！」

なんとか真つ二つにされる寸前でグングニルで受け止める。
しかし…

「ガアアアアアアアアッ！！！」

「なっ…！」

きやっ！」

ドガッ

「がはっ！」

その威力は凄まじく私はいとも簡単に吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。

禁忌『レーヴァテイン』…

私のグングニルと対になる邪神の作り出した剣を再現したスベル…その名は“破滅の枝”の意味を持ち正にフ란の能力を体現した武器だ。

勿論再現とはいえ神の武器だけあってその破壊力は高く、私でさえもまともに当たれば命の保証が無い程だ。

だがこのスベルは出力を上げれば上げる程リーチと破壊力が増すが、その大きさ故に逆にスピードが落ちる。

それが唯一の救いであり、普段のフ란は手加減が出来ない為いつも最大出力でそれを使っていた。

だが今のフ란は違う…

追撃こそ最大出力だったが、明らかに最初の一撃は出力を調整していた。

恐らく本能的に最も殺す事に適した状態を無意識に使っているのだろう。

「禁忌『スターボウブレイク』！！」

「！！」

フ란の周囲に色とりどりの無数の弾幕が出現する。

マズい！

そう思っつてその場を離れようとする…しかし。

「なっ！！」

最悪だった…

左の羽が折れてる…

どうやら壁に叩きつけられた時に折れてしまったようだ…
これではもう飛ぶことはできない！

ドドドドド！

弾幕が私に向かってくる。

飛んで逃げることは出来ない。

かといって走っても逃げきれないし、弾幕の量が多すぎて避けきれない。

「くっ！」

私は既に壊れかけているグングニルで再び防御をする…だが…

ドガガガガガガガガガガ！！

「ぐうつ！」

その弾幕の嵐は凄まじく、防御していてもその威力に押されていく…
…そして…！

バキンッ！

「えっ…」

ガガガガガガガガガガ！！

「ぐ…がはあっ！」

ついにグングニルは砕かれ、弾幕の嵐は私に直撃した！！

痛い！

ここまで強力な攻撃をくらったのはいつ以来だっただろうか…

「アハ！アハハ！

ねえこれで終わりなの？お姉さま！

アハハハハハハハ！」

フランは自らの弾幕に蹂躪される私を見て嘲笑う。

その瞳に既に正気の色は無い。

今のフランは慧を殺された（と思い込んで）怒りで我を忘れていると同時に、自らの狂気そのものに完全に支配されてしまっていた。本当に…無様だ…

この495年間、フランがこうならないようにずっと閉じ込めていたのに…

結果的にそれがフランを狂わすことになって…

それに気づいて屋敷限定で自由にしても、結局フランを心を癒せないくて…

ようやくその鍵になる慧がやってきても、この通り肝心な所でハマをしてまた裏目に出る…

そう思い私は苦笑する…

「これで終わり！

じゃあねお姉さま！

禁忌『恋の迷路』！！」

フランのスペル宣言という名の死刑執行の合図が部屋に響く…

それと同時に先程以上の弾幕が出現する。

もはや弾幕の嵐どころか弾幕の壁だ。

終わった……

普段なら飛んでよけるが、肝心の羽根は折れている。

防ぐにもダメージをくらいすぎて、スペルを上手く発動できない。

これで終わりだ……

結局何もかもが最初っから間違っていたのだ……

私には……フランを救うことは出来ない……

「ああ……そうだな。だからこそ“俺が此処にいるんだろ”？」

「え……？」

何もかも絶望した瞬間、突然そんな声が聞こえた。

男にしてはやや高めの声……

だけどとてつもなく力強い声。

ここ1ヶ月の間、何度も聞いたその声を！！

「炎符『フレイムウォール』！」

私が前を向いた瞬間、視界が紅蓮に染まる。

そしてその声の主はそこにいた。

スタボロで立っているのがやつとの筈なのに……

その男はしっかりとそこに立っていた！

そしてそいつは足下に落ちていた、先程切り落とされた自分の左腕を拾い上げ……

グジュツ

[illegible]

無理やり元の位置に“くつつけた”。

骨を差し込み、断裂した部分を炎で無理やり“溶接”し、さらには左腕に強制的に大量の魔力を注ぎ込み筋肉と神経を超高速で再結合させる。

それは正に地獄の苦しみ…

正気では出来ない行動。

だが彼はそれやってのけた。

そして…

「初めから俺が此処にいる理由なんざ、あいつと一緒にいることしかねえじゃねえか。

だったらあいつの暴走を止めるのも俺の役目。

あんたは後ろでふんぞり返ってればいいんだよ。

そうだろ？

お嬢！」

ゴキンッ

左腕の関節がハマる音と共にその男…秋山慧は後ろを振り返って、私にそう言っただけだ。

TO BE CONTINUED

第13話 d e a d n i g h t (後書き)

それでは今回の話はこれで終了です。

それにしても気づいたら最初の投稿から一年が過ぎましたが、いまだに第一章が終わらない…

まあ合計すると半年分は休んだりしましたので…本当にすみません。それに一年も書いているのに文章力が上がらない…

とまあ自虐はここまでにして、今回の解説です。

今回も前回からの続きでレミリア戦…とは言っても完全にフラン戦と化しています…

前回レミリアによって腹にグングニルをぶち込まれ、その一部始終を見ていたフランがそれを切欠に暴走してしまうという話です。

やはりフランと言えば狂気と言うことでこういう話になりました。

とりあえず次回で第一章最後の戦いは終結します。

復活した慧はフランを止めることは出来るのでしょうか…

と解説はここまでで、実は最近まどかマギカの百合ものの長編を書くこうと思っています(まあ不定期になりますが)。

シナリオはおおざっぱには考えていますが意見やアドバイスがあればお願いします。

ちなみにほむ×まどで、目標は全員生存のハッピーエンドです。

そして物語も序盤以外は殆どオリジナルの予定です。

それでは今回はここまでです。

感想は勿論、悪い点も指摘してくれると嬉しいです。

第14話 d a y b r e a k (前書き)

お待ちせしました。レミリア戦と名ばかりの实质フラン戦クライマックスです！

第14話 d a y b r e a k

寒い…

まあ血が足りてないんだから当然なんだが、まるで死んでいるみたいでいい感じがしない。

『ふん、この程度の事…

昔から何度も味わってるだろ。
今更なに言ってるんだ？』

またてめえかよ…

これで二度目か？

『まあ、そんな所か…

それにしても情け無いな』

うるせえ！

ヘマをしたとはいえレミリアを追い詰めたんだ、寧ろ大金星だろ？
次こそは俺が勝つ！

『くつくつく…』

何が可笑しい！

『なに…まさか次が有ると思っているお前のお目出たい頭が…な』

どういう意味だ、そりゃ？

『こつこつ事だ』

ザザッ

「アハッ…アハハハハ！死んじゃえ…
スペルカード、禁忌『レーヴァテイン』！」

ザザッ

なっ…！なんでフランとレミリアが戦ってるんだよ！
それにあのフランは！

『これがお前の招いた結果だ。
見てたんだよ、あのちびっ子は。
お前が串刺しにされる瞬間をな』

まさか、付いてきていたのか！

『そういうことだ。
これでもまだ、次が有るなんて甘ったれたことを言えるか？』

言えるわけがねえだろ…！
このままじゃフランに残された道は破滅だけだ！

『その通り。
なら…もうやることは解ってるな』

ああ…どうやらのんびりてめえと話をしている暇は無さそうだ。
じゃあな！

『待てよ…』

なんだよ！

『特別サービスだ。

お前に新しい力をやる』

新しい力？

『ああ……

正直このまま突っ込んでいって勝手にくたばってもらっちゃ困るんでな。

じゃあいくぜ……………

「ぐっ痛うっ！」

目が覚めたと同時に切り落とされた左腕（とは言っても肩すら残っていないが）とグングニルで貫かれた腹が酷く痛む。

というか腹の傷口からは腸が飛び出ている。

正直言つて吐きそうなくらい気分が悪いが、そんな事をしている暇はない。

俺は周囲を見渡す、そこにはやはりフランとレミリアが戦っていた

……だが！

ドガガガガガガガガ！

「アハハハハハハハ！」

「ぐ…がはあっ！」

そこにあっただのは意識を失っていた時に見た光景…いや、それよりも更に状況が悪化していた。

マズい！

このままじゃ本当に取り返しのない事になる！
だがどうする…

そう思っているうちに俺はあることに気が付いた。

右腕が動く…

先程レミリアに外された右腕の関節が再びはまっていたのだ。

地面に叩きつけられた衝撃ではまったのか理由はわからないが、どうやら再び運の巡りもこっち側に傾いてるみたいだ。

なら迷ってる暇はねえ！

そう思った俺は飛び出た腸を傷口に突っ込んだ。

「ぐう…！」

グチュリという音と共に何とも言えない不快感と激痛が俺を襲う。

だがこの程度はまだ序の口だ…

俺はポケットからハンカチを取り出しそれを猿轡のように噛む。

そして右手に炎を灯し…

「グヴウウウウ！」

その炎を傷口に押し付けた。

高熱の炎や焼けた鉄などで皮膚を溶かし傷口を無理やり塞ぐ応急処置…

映画だか漫画だかで見た方法だが、正直発狂しそうだ…

だがどうやら傷口はしっかりと塞がったようだ。

そして俺は起き上がり走り出す！

本来なら背中への傷口も塞ぎたいのだが、生憎そんな時間は無い。
何故なら……

「これで終わり！」

じゃあねお姉さま！

禁忌『恋の迷路』――！」

そう言っただけでフランはレミリアに向かってスペルを発動していたからだ。

しかもレミリアは既に戦意喪失状態のようで、よけることはできそうにない。

それにレミリアの前方数メートルの所に俺の左腕が落ちている。

正直回収しないと、フランの弾幕で消し炭になっちまう。

そういうこともあり俺は全力で走る！

なんだか幻想郷に来てからというものずっと走りっぱなしのような気がするぜ……

そう思いながらレミリアの横を通り抜けた時……

「私には……フランを救うことは出来ない……」

とレミリアのそんな言葉が聞こえた……

ああたしかにお前はフランを救う事は出来なかったよ……

だけどな……

それでもレミリアはフランを大事にしていたじゃねえか！

自分が恨まれる事を覚悟の上で、ずっとフランを守っていたじゃねえか！

だけどそれでも駄目だ！

それでも諦められなくて！

それでも努力を続けてきた！

だから俺は……

「ああ…そうだな。だからこそ俺が“此处”にいるんだろ？」

そう言った。

「え……………」

その言葉を聞いたレミリアはいつかのフランのように間の抜けた声を出す。

どうやらこいつは俺が復活したことに気が付いていなかったようだ

…まあいい…

俺は懷からスペルカードを出す。

魔力にはまだまだ余裕がある…ならいける！

「炎符『フレイムウォール』！」

スペル宣言と共に右拳で地面を殴りつけたその瞬間、そこから紅蓮の壁が出現し迫り来る弾幕を焼き消す！

この感じなら当分は壁の方は保ちそうだ。

そう思った俺は足下に落ちている自らの左腕を拾い上げ…

グジュツ

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

無理やり元の位置に“くつつけた”。

骨を差し込み、断裂した部分を炎で無理やり“溶接”し、さらには左腕に強制的に大量の魔力を注ぎ込み筋肉と神経を超高速で再結合させる。

やっていることはさっきとあまり変わらないが、同時に神経や筋肉

を無理やり魔力を通して再結合させているため激痛も不快感も先程以上だ。

しかも今回は猿轡も噛んでいないから、奥歯を噛み砕きそうになる……
だけこの程度のことではタレられない。
だから俺は…

「初めから俺が此処にいる理由なんざ、あいつと一緒にいることしかねえじゃねえか。

だったらあいつの暴走を止めるのも俺の役目。

あんたは後ろでふんぞり返ってればいいんだよ。

そうだろ？

お嬢！」

そうレミリアに言い放った！

それと同時にゴキンツという音と共に左肩の関節がはまる。

それを聞いたレミリアは最初こそ驚いた表情をしたが、すぐに元の調子に戻ったのか…

「私は主なんだから当然よ！

それよりも復活が遅い！」

と理不尽な文句を言ってきた。

はつきり言って俺の怪我の原因は完全にコイツなのだが…

まあとりあえずはフランを止めるのが優先だな。

レミリアへの文句は後回しにして。

「それで、止めると豪語したんだから、あの弾幕の壁を突破する作戦は考えてあるんでしょうね？」

「そんなもの無い！」

「はあ?!」

俺の答えを聞いたレミリアは啞然とした顔をする。

それもそうだ、今フランの使っているスペル：禁忌『恋の迷路』は無数の弾幕の壁を放ち一種の立体迷路を作るスペルだ。

これがゲームなら壁の間所々にある隙間を見つけ出し、弾幕を回避出来る。

だがいつかのように現実はそんなに甘くない。

最初の隙間から内部に入り込んでも次の隙間を探している間に弾幕が当たってドボンがオチだ。

「じゃあどうするのよ!」

はつきり言っでどうも出来ない。

結局現在の状況じゃ、どんなに良い作戦を考えた所で確実に失敗する。

セオリーに忠実にいけばだ…

「なあレミリア…

迷路を手っ取り早く最速で攻略する方法を知っているか?」

「はあ?!」

こんな時に何を言ってるのよ!」

俺の言葉にレミリアは若干怒っている感じでそう答える。

だが俺は構わず話を続ける。

「まあ聞けって…

迷路を最短で攻略する方法、それは…」

「それは…」

「迷路を創っている壁を突き破って真っ直ぐに突っ込むだ!!!」

そう言っただけは懐からスペルカードを取り出す！

そのカードはついさっきまで色が着いていなかった、未完成のカード…

だが今は燃えるような鮮やかな紅に染まっている！

そして俺は…

「スペルカード…」

炎剣『レーヴァテイン？（セカンド）』！！」

魔剣^{スペル}の名を叫んだ…！！

その瞬間、右手の甲に紅い剣をモチーフにした紋章が浮かび上がる。
そして…

「ウオオオオオオオオオオオオ！！！」

一瞬右腕が炎に包まれた後、その炎が圧縮し甲に浮かんだ紋章と同じ形のブレードが具現した。

炎剣『レーヴァテイン？』…

その名の通りフランのスペル、禁忌『レーヴァテイン』を真似したスペル。

しかしフランのレーヴァテインとは違い魔導具に魔力を通すのではなく、炎の魔力そのものを圧縮しブレード状の形と性質を持たせている。

正直、レーヴァテインよりもレミリアのグングニルに近い。

だがその切れ味は…
そう思った俺は…

ブンッ

消えかけのフレイムウォールに振り下ろした！

ザンッ

その結果フレイムウォールはいとも簡単に真つ二つになった…周りの弾幕を巻き添えにして…
いける！

これだけの切れ味があれば壁を突破できる！

そう、俺にはもう作戦も何もありませんでした。

俺がフランを救う手段はただ一つ…

“ただ愚直に弾幕の壁を切り開いてフランのいる所に辿り着く…！”
ただそれだけだ…！！

俺はフランに向かって駆け出す！

距離にして数十メートルくらい、普段なら数秒で辿り着く。

だが今は常に弾幕の壁が迫ってくる！

俺はそれを切り裂きながら進む！

剣でさばき切れない弾幕は左腕で叩き伏せる！

だがそれでも全てはさばけず直撃はないものの確実に体力を削って
いく…

左の拳も弾幕を殴りつける度にボロボロになる…

その上フランに近づくにつれ弾幕はより激しくなっていくのに対して、俺のレーヴァティンは魔力不足で徐々にブレードが短くなっていく…

だがそれでも俺は突き進む！

残り十メートル…

ここまでくると最早避けるのは不可能になってきた。

残り八メートル…

それでも弾幕の壁を切り裂き、進む！

残り六メートル…

そういえば、最初にフランに会ったときもこんな感じだったな…

残り四メートル…

あの時は力も何もなかった…だけど今は違う！

もう俺は無力じゃない！

少なくとも…

“ 狂いながらも涙を流して弾幕を撃っている少女を救う事はできる
！”

残り二メートル！

迫り来る弾幕を切り裂く！

その瞬間遂に魔力が切れ、ブレードが消滅する！

だけでもう手を伸ばせば届く！

既に身体も限界を超えている。

それを気力で動かす！

しかし！

「ガアアアアアアアアアア！」

ドンッ

「グヴッ！」

最後の最後、フランの放った弾幕が腹に直撃する…

その威力に視界が歪む…

だが！

「ウオオオオオオオオオオオオ！！！」

倒れる瞬間俺は気合いで体制を立て直す！

そして…

「とどけええええええええええ！！！」

side フランドール

『ねえ、もういい加減理性なんてなくしちゃいなよ！
好き勝手に暴れるのって最高に気持ちいいよ！』

私の中の狂気がそう言ってくる。

もう何度目なんだろう…

だけど正直もうどうでもいい…

サトルはもういない。

お姉さまに殺されたから…

お姉さまもきつと考えがあつての事なのだろうけど、もしかすれば
サトルがお姉さまに戦いを挑んだのかもしれないけど…

どっちにしたって、わたしは大切なものを失ってしまった…

サトルがいて、お姉さまがいて、美鈴やみんながいればよかった…
例えずっと外に出られなくても、みんながいればそれでよかった…

だけど、もう無理だ…

サトルは死んじゃって、もう戻ってこない…

それに悲しみと怒りが大きすぎてもうわたしは狂気を押さえ切れな

例えばその身が傷つこうとも屈せず立ち続け、私のいる所に向かってくる。

そして…

「とどけええええええええええ！！！」

その叫びと共に暖かい感情が流れ込み……

私は目を覚ました……

「サトル？」

気が付いたとき、私はサトルに抱きしめられていた。

サトルの身体は全身ボロボロの血塗れで、抱きしめられている私にもその血が着いてしまっているけど不思議といやな感じがしない。

寧ろその血の一滴一滴ですら愛おしい……

そして…

「たく…勝手に俺を…殺すんじゃないやねえよ…」

それに……あの程度じゃ俺は……死なねえよ……」

私の大好きな人は、そう言っても以上に優しい顔で微笑んだ……

その顔を見て私は涙が溢れてきた。

その感情はさっきまでのような負の感情ではなく……

愛しい人が生きていて…

愛しい人に抱きしめられ…

そして何より……

彼にが私を救ってくれた嬉しさで……

「うん…

ありがと…サトル…」

としか私は言うことができなかった…

s i d e 慧

「うん…

ありがと…サトル…」

そう言ってフランは涙を流しながら、そのまま俺の腕の中で意識を失った。

それと同時に俺もフランを抱えながら仰向けに倒れる。

限界を超えた魔力行使。

全身に渡る怪我。

そして何よりレミリアとの戦いで的大量出血（とは言っても半分は自業自得だが）。

よくもまあ今まで動けたものだと言っても関心している。

けど流石にもう限界だ。

視界は既に霞んでいるし、身体はもうピクリとも動かない。

けどまあ万事上手くいったわけじゃないが、大団円にはなったから結果オーライでとこか…

「あなたねえ…

一歩間違えたら吸血鬼でも死んでるわよ？」

いつの間にか俺の近くまでできていたレミリアがそんなことを言う。
だけでもう声すら出ない。

「けどまあ、あなたには感謝しているわ。
ありがとう」

そう言ってレミリアは俺の視界から消える。

きつと咲夜さん達を呼びにいつてくれたのだろう。
薄れゆく意識の中で俺は崩落した天井を見る。

既に外は日が昇り始めているのか空が白んでいた。

どうやら気が付かないうちに、結構な時間が経っていたみたいだ。

結局レミリアには勝てなかったしフランを暴走させかけて俺は大怪
我と散々な結果にはなってしまったが、何故だか気分は清々しい。

朝日を浴びて本来怠い筈なのに不思議なもんだ。

まあ取りあえずは…

「お疲れ様ってところか…」

最早自分でも聞こえないくらい小さな声でばやくと同時に俺は意識
を失った。

起きた後に美鈴や咲夜さんに怒られることを覚悟して…

第14話 d a y b r e a k（後書き）

それでは今回の話は終了です。

そして第一章のラストバトル決着です…とは言っても結局のところ、慧はスタボロなんですが（笑）

というか人間だったら死んでます。

今回また慧の新しいスペカ炎剣『レーヴァテイン？』が登場しましたが、イメージはレーザーブレードそのものです。

ブレードの形である右手の甲に浮かんだ紋章はフェイトの士郎と切継の令呪を足して歪めて2で割った感じです。

とまあレーヴァテイン？の設定はそのくらいなんですが、実は最初の頃は別のスペルで炎拳『ブレイズフィスト』と言う両手に炎のガントレットを装備するスペルを考えていたのですが、今回の話はフランの話だと言うことと、いつかフランと慧にWレーヴァテインをやらせてみたいという理由で変更しました。

ただ個人的に気に入っているスペルなので多分近いうちに出します。

それでは今回はここまでです。

第一章も本編のみなら次回でラストになります。

そして感想やアドバイスもお待ちしています。

それでは…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9995/>

東方紅蓮録 ~ Vermilion Arms ~

2011年7月27日22時38分発行